

特277

442

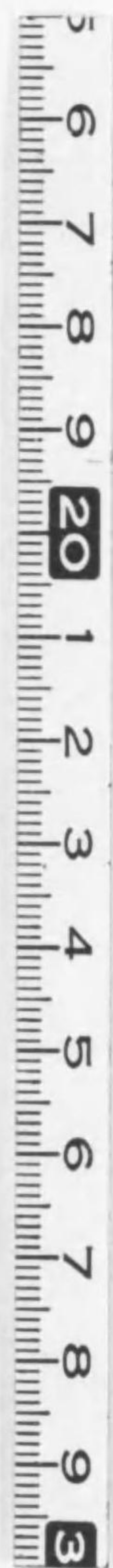
特277-442



*76W10381 *

本校教育の方針

愛媛縣師範學校代用附屬
余土尋常高等小學校



始



序

題して本校教育の方針と言ふ。私たちの教育の理想と實際との
一端を披瀝しやうとする小著に過ぎない。凡そ人間教化のことに
於いて、怖るべきは常識論に墮せんとするこゝであり、戒むべき
は具体化の適確ならざらんとするこゝである。私たちは常にかゝ
る一念に強く燃えつゝも力は餘りにも微、勿論未踏錯誤の如何に
多からんかを恐るゝものである。

ならば、私たち自らの深化の上に貴き機縁を求むるこゝもなる
こゝを衷心希求し、茲に上梓する所以である。

昭和二年九月

村上万壽男



76W10381





Faint vertical text on the right page, likely bleed-through from the reverse side. The text is mostly illegible due to fading.



目次

教育の方針

- 教育の理想……………一
- 教育の作用……………三
- 指導の實際……………六

各學年教育の方針

- 低學年……………八
- 中學年……………一五
- 高等學年……………一九
- 高等科……………二四

各教科教育の方針

- 修身科……………三
- 讀方……………九

級方	綴方	書方	算術科	國史科	地理科	理科	圖書科	手工科	唱歌科	体操科	裁縫科	家事科	農業科	訓育科
.....
六七	八〇	九一	一〇八	一二一	一三一	一四〇	一五九	一六五	一八九	一九四	二〇〇	二〇八		

看護衛生	農業實習	家庭との連絡	教育研究	職員	實習生
.....
二四	二五	二五		二六	二八

本校教育の方針

教育の方針

教育の理想

吾人は我が國文化の崇高さに限りなき畏敬愛着の念を覺えるものである。殊に自他文化の深き省察と、我が民族思想の体認とは一層この感を切實ならしめるものゝ様である。文化は歴史的社會的のものであつて進化流轉止まるなき内に、始終一貫恒常の趣あるは勿論、その社會乃至民族の精神の特殊性或は思想の傾向等によつて行はるゝものなるが故に、我が國文化への畏敬愛着の念は必然的に我が國忠愛の理念を伴ふものである。

かゝる文化愛、國家愛の一念は文化存續乃至發展の希求を生じ、有限的我に換ふるに文化創造の可能性者たる若き個体に向つて文化の無限なる生々發展を托さんとして、兒童敬愛の念と共に文化傳達乃至蕃殖の意思を生ずる。蓋し文化傳達とは時間的歴史的傳達の意を強くし、文化蕃殖とは同時的社會的蕃殖の意を主にしたるものと言ふべきなれど、共に人生に於ける精神的存續の義にして畢竟文化

創造乃至發展の過程たるべきものであらう。

かくて文化存続の希求は人間眞性の生命的願望にして如何ともし難き精神活動の理念たるのみならず、教育精神の中核とも言ふべきものなれども、吾人の衷には又、彼等兒童のいたけなき、弱々しさに對して之を慈しみ、之をいとしみその成長發展をのみ喜ぶ純乎たる兒童愛の念を有する。即ち彼をして彼たらしむべく彼自らの人格を創造せしめると共に、莊嚴なる文化を体認せしめんとする忠純なる兒童愛の躍動を体験するものである。

而して實に教育はかの文化愛を基底としたる、燃ゆるが如き兒童敬愛の念の流露にして、兒童對吾人の對立を超へたる人格的教化の作用、即ち人間眞性の合一歸郷を認むる自他人格の共鳴共感を意圖するものである。自他人格の融けて一体となり、教師は自己を没して遍く文化の代表者、傳達者となりて兒童の衷なる眞性に、彼自らをして目覺めしむべく祈念し且之を輔導するものであらねばならぬ。所詮人格とは文化の主觀的意にして、文化を離れての人格を認むる能はざるものなる以上、人格の構成といふも文化の体認に外ならぬ。人格と文化とが不即不二、内容の一に會するの意味に於いて文化的人格の構成にのみ眞の人格の創造を認め得ると共に、文化体認の意も認め得らるゝのである。

故に教育の目的乃至陶冶の理想は之を客觀的に見れば文化の体認である。而して文化の体認は文化

財の理解体得に於いてのみ可能なるなれば、教育の目的は又之を文化財の理解体得、延いてはその創造發展への道であらねばならぬ。更に言へば文化の創造發展乃至文化財の理解体得は之をすべて文化價值追求の一念によつてのみ可能なるが故に、教育は又之を文化價值の体認とも言ひ得べきなれど文化價值は無限に發展して、その究極を究むる能はず所詮その方向に留まるべきものなればそは又文化精神の体認乃至自覺とも言ふべきである。而して之を主觀的に見れば兒童の人格を構成せしむること即ち文化的人格者たらしめることなれど、文化が生々發展してその極致を見る能はざるものなると共に人格も又その際涯を究むべからざるものなれば人格の構成とは要するに永遠の自己更生であり、自己の眞性への無限なる自覺であらねばならぬ。

併しながらかゝる主客の對立は、彼を彼たらしむるの一途に融合統一さるべきであつて、教育とは兒童をして彼自らの眞性に目覺めしめんとする麗はしき精神活動の流露であらねばならぬ。

教育の作用

教育は彼をして彼たらしめ彼自らの天性を全ふせしめんが爲に彼自らの自我構成を幫助せんとする吾人の無限なる教化的努力であり、教師對兒童の對立に於ける人格的教化の作用を意圖するものなるが故に、吾人は常に彼等の各發達段階に於ける生活相を觀得してその刹那々の活動をして、由しそ

の活動の意義は左程深からず、その価値は必ずしも大ならずと雖も、過程としての獨自の意味を充實せしめ、それ自身の価値を實現せしむる様、吾人の生活を彼等の世界に没入してその指導に努めなければならぬ。それは彼等の生活を彼等と共に生活せんとする絶對的な立場、即ち己の立場を以て彼を付るにあらで、彼の立場に於て彼を見る、立場のない立場に於いてのみ可能である。

惟ふに吾人が彼等の生活の中に没入して彼等と共に生活せんとするには先づ吾人が彼等の生活を理解せなければならぬ。眞に彼を愛すとは眞に彼を知ることであるといふ教育愛の精神は正しき兒童觀を求要してゐるのである。而して兒童の生活に自己を没入したる教師は彼等と共にその生活を生活するのみならず、その裏には正しき規範意義を捧持して有意無意にこの未發展の人格に對して彼等に即した教化、指導に努め、以て彼等の發展を幫助すべきである。それは兒童のその日その日の儘なる生活に、その時其の時の充實、即ち彼等に即したる彼等自身の價值創造乃至は人格の構成を祈りつゝ、しかもその祈願の空しからざりしを悦びつゝ、更に明日の彼等の營みに充實あれかしと念する燃ゆるが如き教育精神の淨焰であらねばならぬ。

併しながら凡俗なる吾人の心意の奥底には彼等兒童の生活の如實相を吾人の規範意識に照らして評價判斷し、時としては吾人の立場に於いて彼を律せんとし、或は吾人との餘りなる隔りを心密かに憐むのであるが、この誤りから生ずる諸の作用の中には彼等の激刺たる活動を傷つくるが如き素因が含

まれてあることが甚だ多いから心しなければならぬ。而してこは吾人教育者たるもの、絶えざる懊惱なれど、この矛盾の果には彼等に對して不合理なる飛躍を強要せんとする破綻を生ずる。併しながらこの惱みは之を教育的に統一すること、即ち彼等をしてその天性を全ふせしむる様、彼の立場に立ち、彼に即したる教育作用をなすべく自覺することによつて超越し得る所のものであるべく、吾人は教育作用の要諦を此の矛盾の統一にありとさへ信するものである。

かゝる教育的統一とは彼等兒童の生活の中に於ける彼等の價值創造の意義を究むると共に、彼の立場に立つべく吾人の生活を彼等の生活に投げ入るゝことである。而して吾人はその生活の中に生活して徒にその埒外に出でず、彼等の價值を價值とし、その意欲を意欲として、彼等の生活を生活せしめると共に、その反面絶えず彼等の普遍への復歸を念じつゝ、その無限なる人格的構成のプロセスを歩み得しむることである。

併しながら吾人は彼等の生活を一般的抽象的に論斷して之を測るべきではない。かゝるは蓋然的な概念的知識にして、吾人に何等かの教育的警告を與へるとしても眞に生々とした有用なる指針を齎すべきものでない。吾人は唯彼等の生活を凝視して彼等のありのまゝなる生活の意味に向ひ、その根元へ根元へと思ひを致してその活動の意義を考察し、その價值を辨別し、然る後致すべき作用を考究すべきであらう。兒童の本能、衝動的な活動と雖も、意味あり、價值ある合目的活動である。而して彼

等が自らの活動を統制して行くところに彼等の價值實現があり、人格の構成がある。故に彼等の連續的發展の補助を教育と意思し、彼等の生活を彼等自身に生活せしむべきでありとする以上、吾人は彼等の意欲の激洩たる活動を尊重すべきであつて、この道より一步を履み出で、吾が規範に思はされてはならぬ。吾人は自己の悩みを悩みつゝ、彼等の活動を凝視して彼等の生活に自己を没入して行く所に吾人の教育的努力の存することを信すべきである。されど吾人のこの矛盾に對する懊惱こそは彼等をして精進發展せしむる素因たるのみならず、教育の望みに新らしき精氣あらしめるものである。之を要するに吾人は直觀的會得による正しき兒童觀よりして機に臨み、變に應じてその指導に當り、彼等の活動の根元に思を致してその結果によつてのみ彼等を左右するが如き言動をなさず、しかも彼等の心態如何にありしか、而して如何に働きつゝあるかと巨細之を觀得して慎重にその指導をなすべきである。

指導の實際

然らば教育上如何にして彼等の學習を指導し文化の体認乃至人格の構成を補助すべきであらうか。蓋し學習とは文化の体認、人格の構成の活動であり、自己の文化々人格化の意に外ならぬ。故にその學習指導に於いては合文化的活動をその第一義諦となすべきであると共に、兒童の心的狀態に合自然

であるべきを要する。即ち一面高く文化價值を捧ぐるのみならず他面強く陶冶價值を究め、以てその陶冶財たる學習の題材を精進すると共に、實際指導に當つては彼等自らをして文化体認への道を歩ましむべく、彼等に即したる進路階梯、解決理解の方法等を暗示指導すべきである。

かくて彼等の學習は最初は多方面的不定形、無系統なる氣儘の學習となり、教師は中心に定位して彼等の依存を依存として之を受くると共に彼等の意欲の方面に應じてその指導に當るべきである。従つて従來の如き各教科の截然たる分立及び時間割制による學習よりも、各教科分立以前の未分科の學習、即ち學的分類よりの分科制、學的系統よりの教科課程等の分立組織以前の渾一なる未分科の學習となるべきである。

而して漸く進みては未分科の學習が分化發展して分化的學習となり、教科獨自の目的及課程に應じて系統的、分科的に學習し、時間割制による計畫的學習を生じ、更に進みては自學的態度の發展により學究的學習となるのみならず、自省自治の活動も盛となり、自覺的活動乃至學習に進む。

なれどその文化体認乃至理解即彼等の學習内容の多くは、不秩序無系統なる認識豫科としての經驗素材たるに止り、吾人より之を見れば殆んど未解決のものたりと雖も、彼等獨自の意味に於ける價值實現の活動であり尊ぶべき學習の成果である。

以上は本校に於ける教育の方針につきて之を約説したるなれど各學年教育の方針、並びに各教科教

育の方針等に於いて更に之を詳論し、以て本校に於ける教育の方針をより明かにせんとするものである。

各學年教育の方針

低學年教育の方針

教育は兒童に即したものであらねばならぬ。兒童に即すとは兒童の心身及び生活を基底とすることであり、その教育は彼等の心身及び生活を教育的意味に於て向上發展せしむべく幫助誘導することではなくてはならぬ。

故に吾人は先づ兒童生活への眞摯忠實なる凝視と理解とを其の第一義的要件となし、それと共に教育の本質的立場よりする人格的教化の眞意義並びに實際諸相の究明に思を致さねばならぬ。

一、兒童の生活

兒童の心身及びその生活は既に心理學的立場に於て精細緻密に考究され又されつゝあることは今更贅言を要せぬ所であるが、渾然たる彼等の生活を概念的に分類して衝動及び感覺、意思活動の時代等と名づくるならば低學年兒童の心的活動は、衝動乃至感覺活動時代の末期及び意思活動時代の最初期

に當り、未だ内省自覺等の精神活動を缺くは勿論、嬰兒期と同じく遊戯そのもの、活動そのものを目的とし、學習乃至勤勞等の自覺的努力は殆んど之を認め得ざるのみか、特に入學當初に於ては抑制克己等の努力を缺き社會的意識にも乏しき全くの幼兒にして學校生活への理解もなく、興味本位にして、衝動乃至感覺活動に追はれて自己の活動そのものゝみを享有せんとするものである。而してその興味も全く間斷的にして注意も斷片的利那的であり瞬間的活動を常として統一持續等の活動は望むべくもない。

然しながら尋二時代に入れば稍前述の諸点に於いても入學當初に比すれば心理的變化及び指導の効果等によりて大いなる差異を來し、社會的意識にも富み競争心旺盛となると共に共同心も熾烈となり、努力計畫等の意思も生じ意欲も統一的となりて組織的學習、計畫的作業も稍々可能となり多少自學的態度も萌し來る。而して此の期の兒童に最も留意すべきは一事一物すべて疑問を有し嬰兒期と異りたる意味に於いて「何故」「如何なる理由」といふが如き形を取つて、稍深化せる解決を要求するに至る。かくて吾人はその心的活動の上に入學當初に於けるものと、學校生活に馴致したる時代とに内面的發展及び環境の影響による相違を認めると共に其の最奥一つの意欲願望激潮として躍動し、深甚の注意を以て之に當り、以て彼等の發展性の萌芽を生々ならしめざるべからざる一貫の趣あるを得するものである。

身的狀況は殆んど自然的差異を認め難けれども教育効果の上に生ずる變化は偉大なるものあるを見る。併しながら未だ骨骼筋肉等の發達幼稚にして除々弱度の鍛錬に可能なるのみの状態にあれば激烈強度の運動乃至競技等を課すべからざるは勿論、不快痛痒を覺ゆるが如きは之を避くべきを至當と見る、例へば努力忍耐を要するが如きものに對しては至極緩漫なる活動を以てし、自己調制を行ひて所期の目的を達成せざるのみならず、有害なる影響を與ふるが如きこともある。之を要するに看護を主とし遊戯及び簡易なる体操等に於てその向上發育を希ふべき状態にあり。

二、教育の方法

教育は目的、理想の問題であつて兒童心身の心理學的考察を以て之を果し得べくもない。故に吾人は本校教育の精神に立ちて、兒童の心身及び其の生活に對し、之が連續的發展への幫助を以て教育の要諦とし、而して後教育作用の諸様相に思を致さんとするものである。

兒童の生活が前述の如き状態にあらば、この生活の向上發展を意圖し、人生乃至教育本來の目標に向つて精進せしむるの道は兒童の生活に相即具體せるものであらねばならぬ。

入學當初に於ける教育方法の根柢は兒童の遊戯を以て學習への道とし、學習即遊戯、遊戯即學習の立場に於いてのみこれ有意義なる趣を見る。即ち歡喜的自發的活動の中に學習への道の機縁を求めて彼が好む所、興味の動く所を逃さず、家庭生活の延長をその精神とし、話すこと、歌ふこと、聽くこ

と、觀ること、遊ぶこと、猶生活の全体的遊戯の中に文字及び數へ方等の要素を按配し、創作、鑑賞等の契機を織り込み、未分科的學習即ち生活の全一的學習を意圖すべきである。故に學校生活の時間内には殆んど遊戯的學習を主とし修身、讀方、算術……等の時間割制及び國定教科書の系列に従ひたる所謂分科學習を今暫く廢して、渾然たる未分科乃至分科以前の生活を生活せしめ、彼等の遊戯乃至質疑的意欲を殺除せざるは勿論彼等の活動を激刺生々ならしめ、生への糧、連續的發展への素因的血肉を豊富濃饒に培ひやるべきである。商ひ遊び數字拾ひ童話童謡及び圖書手工又は身体的遊戯自然研究的學習及び數へ方等時に應じ變に臨みて之を營爲せしめ、徐々に彼等の有意的學習への道を歩ましめ度い。

而して尋一後期及び尋二前期に入りて、多少組織的に自己の學習の對象に向つて、有意的計畫的努力、學習の意思を有し、注意興味等の永續を得るに至れば分科的學習即ち時間割制による各教科別の系統的計畫的學習に入らしめ、有意的學習乃至勤勞等の意識的活動をなさしめ、自發的努力的態度にも意を用ひ、教科書を以て主要課題として學習せしむべきである。

又規律的行動、團体的生活等の自治的態度にも相應に理解と自覺とを有せしむべく指導し、体操遊戯等にも活潑敏捷規律等を尙ばしめ、中學年に於ける自發的學習及び自治態度への基礎的要素を培ふべきであるが、入學當初に於ける教育方法の精神は之を持して兒童生活への豊なる同情と理解とを忘

れず、彼等の生活に即したる取扱及び指導看護の方法を考案実施すべきである。

三、學習の環境

(1)、環境の意義

環境とは吾々の周圍を圍繞する存在と、活動一切の現象をいふので、實に個人として社會人としての人間を、よりよく生かしむるものなるのみならず環境を離れて吾々の存在はなく、吾々の生活は環境に對して多くの、そしてより深刻な交渉を有つことによつて不斷に進展し躍進する。こゝに於て吾々は環境をよりよく利用し彼等の生活を創造進展せしめんとして之が整理に留意する所以である。殊に初學年に於て學校生活を家庭生活の延長とみるとき、免すれば陥り易き強制、命令、禁止等從來の手段を排除し、最も自然であり自由であり自主的であり社會的であるやう環境を整理し、こゝに學習せしむることは全我的な遊戯であり、遊戯することそれ自身が學習することである生活一元の教育たらしむるものではあるまいか。

此の意味より學習の場所をみると、從來の如く固定せる教室内とのみ考ふることは出来ない。苟も兒童の生活に關係をもつ所凡て學習の場所であるべきである。ただ指導の上に制限さるゝために便宜學習の場所を學校内と校外への引率との二つに考ふることが出来る。學校外に於ける環境は、整理よりも利用の部面多く、人爲に依る点少き故を以つて、こゝには學校内に於ける環境に就いて述べる

こととする。

(2)、學習室の設備

學習室は入學前に於ける家庭に近きものたらしめ、彼等の學習は之によつて動機づけられ、之によつて學習能率の向上をはかるべく計畫す。今設備の大様を挙げれば左の如きものである。

前面に掲ぐる黑板及び教壇は専ら兒童の利用に便ならしめるやう考慮し、その上方に數圖表及び片假名表、右方に繪畫的なる郷土地圖を掲げ、下方に小黑板を掛け其の前方にオルガンを置く。黑板の左上方には平假名及新漢字表を掲揚し、下方に本棚を設け前方窓際の卓上に學習用具を備ふ。教室後部には成績揭示板と顔面を掛け、入口に反したる一隅には掛圖及外套掛帽子掛を設く。其の外寒暖計、カレンダー、花瓶、玩具等は自由に利用せしめ、單なる教室といふよりも、學習室であり、兒童室であるやう出來得る限り家庭に近きものとなす。

尙室外には屬すれども、飼育の動植物、樹蔭の鞦韆及砂箱。學園箱庭等季節並に兒童の生長と共に設備に轉變を來すものがある。これ却つて前者よりも意義深きものとも思はれ、單なる設備と趣を異にし動的であるだけ細心の注意を要すべきである。鉢植の花は枯れ、小鳥は餓死するときそこには子供だけの生命伸長はない。

(3)、學習用具

家庭生活の延長とみる低學年の教育は、その學習用具を出來得る限り兒童の生活圏内より採る。之によつて學習は動機づけられ、兒童独自の萌芽は生長の機縁を與へらる。

今入學當初に於ける設備を舉ぐれば左の如きものである。

● 讀物

- 一、片假名文（童話・童謡・お伽噺類）
- 一、國定讀本（二種）
- 一、副讀本（數種）
- 一、外國讀物（譯物數種）
- 一、小學生全集初級用二部
- 一、雜誌（子供朝日、子供の國、子供之友等）

● 器具類

- 一、計數器（四十組） 模擬貨幣 小黑板十餘枚 箸（十本宛四十組） キヤッチボール 輪投げ
- 一、片假名カード 平假名カード 漢數字カード 輸入單語カード イロハカルタ 双六
- 一、スコップ バケツ 如露 植木鉢 水槽
- 一、手工用打板 粘土板四十枚

二、寒暖計 カレンダー 花瓶

- 一、オルガン フットボール 手旗

● 圖表類

- 一、片假名表 平假名表 新漢字表 數字表 身體檢查表
- 一、數圖表 溫度表 繪畫的郷土地圖 讀本掛圖 修身掛圖 算術掛圖等

中 學 年 教 育 の 方 針

一、教育の方針

從來否現在に於いても、中學年兒童の教育は或意味に於いて所謂まゝ子扱にされてゐる感が有る。低學年の兒童は未だ充分に學校生活に馴致してゐないのみか學校教育の最初期としてその指導上大いに考慮を要するとし、用意周到その事に當るなれど、中學年に至つてはかゝる方面の慮も少なく且高學年兒童の教育に比しても困難を感じる点少きを以て不用意之にあたるのみか、之を等閑視するが如き嫌あるものゝ様である。而して高學年に至つて學習の發展に支障を來し、爲にその責を中學年に取り難するなどは沙汰の限である。

さて漸く學校生活の意味を理解し、學習上に新機軸を展開して、各方面の基礎的能力を培はんとす

るこの期の兒童に對して、其の指導を等閑に附し、その取扱宜しきを得ざれば教育上寒心すべき諸の欠陥を生じ將來に於ける學習の發展に多大の障害を生ずるは當然のことである。此の意味に於いて中學年兒童の教育は他の何れの學年よりも一層緊要なるべきものと言ふべく、周到なる注意を以て之に當るべきである。

而してこの期の兒童は漸次自發的活動を萌し、記憶力、思考力、判斷力等も發達し、活動性旺盛となり一事物に對して強烈なる學習をなさんとする傾向さへ生じ有意的計畫的學習も稍可能となる。然しながらこれは低學年兒童に比して稍顯著なりといふべきものにして未だ眞の自覺的計畫的學習等の不可能なるは言ふ迄もない。又運動遊戯を愛好し盛に身体的活動をなし、敏活、強烈なる活動も可能となり競争的遊技に熱中するに到る。即ち各方面に對して各自々己の生活を意識的に生活し行く様になり來りつゝあるもの、様である。故にそれを更に高き教育的意味に於ける學習生活に誘導し以て自學的學習への素因を啓培すべきである。

随つてその學習は自ら未分科學習の進展したる分科的色彩を呈し稍自律的計畫的系統的となるべく、實に高學年に於ける深き學習の第一歩であり、自發的學習への道程であるべきである。

而して尋四に到れば男女の特性が顯著となるを以て此の点注意を忘るべからざるものである。

二、指導の要点

(1)、自己活動としての學習

本學年にあつては未だ心意の發達幼稚にして、自然的自我の活動盛なるがため目的を創意することは困難であるとは云へ、活動性に富むを以て目的を暗示されることに依り、其の目的達成に向つて盛に計畫工夫をなすものである。

しかして、反省批判も漸次可能となる故に此の期の後半に於ては、最早與へられた教材に對して、其の研究の目的を獨自に又は相互研究に依て設定し、次に其の目的達成に向つて活動をなし、更に其の結果に對して批判をなすに至らしめねばならぬ。

(2)、兒童生活に對する態度

旺盛なる活動が最も自然的、無反省裡に行はれるのは本學年であらう。しかして之に對する消極的手段は單なる醫藥的方法に過ぎざるが故に我々は常に兒童の自然的生活を凝視することに依つて大なる理性の芽生を見出し、時に應じ、機に臨んで自覺を促し、以てその學習活動を發展せしむることが肝要である。

(3)、地歴、理科の基礎啓培

本學年は高學年へのかけはしの意味に於て特に注意を要する。

即ち低學年中學年に於ける各教科の教材中には高學年に於ける地理、國史、理科等の教材が其の素材

として多分に織り込まれてゐるのであるが、其の取扱の如何指導の程度によつては尋四と尋五との飛躍を餘程まで緩和することが出来るから充分之が素地の啓培に留意すべきである。

三、學習の環境

(1)、教科によるもの

修身科—掛圖、徳目系統表、實踐要目等

讀方科—辭書、學習指導書、參考資料、課外讀物、國語讀本準據掛圖等

級方科—文集、雜誌等

書方科—大家の筆蹟刷物、書方下敷手本、範書用具、基本字劃掛圖等

算術科—メートル及三〇センチ竹尺、立樹、グラム秤、砂囊、諸容器、實測表、目測標、教授用時計、適當なる學習書等

理科—掛圖、各課の教具、動植物飼育器、寒暖計、ルーペ、ピンセット、教材圖等

圖書科—モデル、布、モデル台、書板、書架、額ぶち、鑑賞用畫集、特別教室

唱歌科—歌集、五線黑板、唱歌室、蓄音器、レコード、メトロノーム、音階圖、口形圖、掛圖等

体操科—フットボール(各學年二箇)、砂場、鐵棒、跳箱、バツク、マット、肋木、平行棒、卷尺、踏切台、圓盤、キツクボールライン、徒歩コース、デッドボールライン、レコードホルダ

—、ストップブウオツチ、ピストル、運動靴等

(2)、一般教室内

共同研究机、額、本箱、本立、棚、帽子掛、角戸棚、世界畧圖、日本畧圖、愛媛縣地圖、松山地方畧圖、余土村畧圖、小黑板、漢字表、烏籠、砂箱、その他必要に應じて。

高學年教育の方針

義務教育の最後の充實期であり完成期であると共に、兒童期の終りに屬する高學年兒童の教育は、あらゆる点より見て教育上重大なる意義を有するものである。即ち心意上より見るも、身体上より見るも旺盛なる發達の時期であると共に、國家が要求する一般的なる國民義務教育の充實完成を期すべき時期なるが故に、國家としても個人としても幾多の重大なる希求を持つは言ふ迄もない。

義務教育は、兒童の境遇、駿騫、健否に關らず一律であるが、それ以後に於いてはそれ／＼向ふべき方向を異にするが故に、其の最終期第六學年の教育は、特に考慮すべきものがあるを思ふ。

又教科の上より見るも五・六學年にては、低・中學年に於て學びたる諸事項の熟達練成をはかると共に、愈々充實せる内容を十分に獲得せしむるは勿論であり道德教育の上にも重大なる使命の存するこゝとは言ふ迄もない。

一、兒童の一般的傾向と指導の方針

低學年より漸次中學年、高學年へと發達は續けられるのであるが、兒童の發達は概ね身体の發育と、心意の發達とが平衡して居ることを認めるものである。然しその發育並びに發達の状態には、自らなる或原則が認められる。今尋五、六の兒童につき其大要を考察して、それに對する教師のとるべき態度を考察して見やう。

◆身体の發育と其の活動

兒童の身体は均齊に發育するものではなく、身長と体重とは、交互的に増加することが認められる。而して此期に於ては概して五學年初期より身長の伸張期に入り、五學年後期より六學年に亘りて体重の増加期即ち重大なる身体的充實期に屬する。従つて初期に於ては著しき身体的不均齊を見ることがある。即胸圍と体重及身長の関係率は概ね低率を示し、殊に中期に於ける女子の顯著なる發育は、脊柱の彎曲、不正なる姿態をあらはすことが多い。この身体の發育に伴ふ体的活動は頗る旺盛にして、その精力を學習よりも寧ろ身体的活動によつて發散せんとし、過度の運動遊戯に耽り、又生理的無知より來る疾病にかゝり易い傾向を有する。かゝる状態にあるが故に、積極的体育、即均整なる發育と健康とを企圖する体操遊戯を課し、且つ生理衛生上の知識を理解せしめることが肝要である。かくて健全なる心身の發達が、將來の社會的活動に必要な所以を悟らしめなければならぬ。

ぬ。

◆心意の發達

此期に入れば兒童は感覺的物質的支配を脱して、次第に論理的概念的となり學究的態度、眞理の追求へと進展する。然し男兒の推理判斷力發達して、論理的考究を好み應用的創造的なるに反し、女兒は一般に消極的で機械的學習に長じ、一面感覺鋭敏となり、微細なる筋覺の發達に伴ひ綿密なる作業を美的に行ふ様になる。

而して又此期の兒童は特に豊富なる想像力が發達し、架空的なる空想を己れの實行に訴へんとする活動を有するに至る。然しながらこの恵まれたる天性はやがて創造的活動への尊き心意過程であるから、此の性を啓培して次第に正しき論理的推究へと導き、堅實なる思想の涵養、確固たる實行能力の養成に注意せねばならぬ。一面女兒はすべてを感情に訴へんとする傾向次第に明瞭に表れ、センチメンタルに陥り易く、喜怒哀樂、憎惡嫉妬の感情甚だ強くなる、かゝる傾向に對しては出来る限り感情の刺戟を避け、感情の表出に對しては直接間接に絶えず適當の指導誘掖をはからねばならぬ。

想像力及び活動性の發達に伴ふて知識に對する欲求旺盛となり、讀解力の發達と共に讀書に對する興味と期待とを持つやうになる。而して男兒は架空的、冒險的、男性的なる讀物を愛好し、女兒は人情的優雅なるものを好み、理性に訴へることなく唯感情的に其の内容を見る傾向を有する。然しながら

讀書慾の旺盛は往々にして自然性そのまゝに軌道を逸する如きが傾向に進むことあるが故にその讀物の選擇に關しては、興味追求より次第に知的追求へと進ましめるやう兒童文庫の經營に於ても、補充教材の選擇に於ても十分留意することが必要である。

又此期の兒童は、心意の發達と知識の増大に伴ひ自覺自律的に進んで來て、自らの行爲に自我を貫かんとする萌が見えて來る。兒童はもはや、不當の束縛や、干渉を喜ばず、自治的生活を求め様になつてゐる。故に彼等の自覺を尊重して、之に適應した指導をなすことも亦大切である。

自覺に伴ふて盲從的生活より、批判的内省的に漸進し來り、他に依頼することも薄くなり、内心に省みて事をなさんとする獨立的精神をおこすやうになる。かゝる傾向は自治訓練上有益なる展開をなすことを得るが故に彼等の意志の尊重を第一とし、彼等の活動を利用して自治的施設をなしてやることに努める。即學級又は學校の諸施設——自治會、學習組織作業團體——と連絡せしめて、自治的機會を與へねばならぬ。又義務教育達成の終期に當るが故、將來何れの方面に向ふも、自力によつて自己の修養を積み、自己の運命を開拓せしめる（即確固たる自己活動）様指導することは、教育上最も重要な使命といはねばならぬ。

兒童は利己的主我的より中學年の終り頃に至れば漸次團體的共通的精神が表れて、自己の立場を社會的にも考へ、利他的同情心の發露をも見る様になる。

この傾向は自覺自律心の發達と關聯して、適當なる指導をなすべきであり利己的行爲、又は勢力者に盲從する如き事をいましめ、自ら進んで團體の爲につとむるやう、その責任の存在を明かに理解せしむることが肝要である。即ちこの期の兒童は個人と團體との行爲に對する精神的訓練及實行を指導すべき好時期であり、共同學習、相互扶助の實行をも課すべき好時期である。自己の自治的支配より學級自治の徹底を期せねばならぬと共に、公民としての知識を授け公民的訓練の施設をなし、立憲國民たるの訓練の初歩を築くべきである、又協同の活動と協同の責任といふことに對する十分なる自覺を與へねばならぬ。

精神知力の發達に伴ひ自己の環境特に社會に對して、好奇と求知の眼を向け注意を拂ふ様になる、これ等に對しては地方自治、社會事象、政治經濟、軍事、交通等につき、社會生活への第一步を誤らしめざるやう、兒童の程度に應じて適當の指導をなすべきである。

又此期の兒童は尋常科最終のものなる故、學校訓練の中心先驅者指導者として、下學年に範を垂れしめねばならぬ。それはやがて社會に立つての重要な生活要素である。然しながら高等科を有する學校に於ては、指導者先驅者たるの自覺に於ても努力に於ても欠くところが多く、むしろ依據的である。しかのみならず只その活動性と、架空の想像性にまかせて、校風をみだすおそれなしとせない、この点については大いに考慮を要すると思ふ。

男女兩性の別は、此期後期即尋六中期頃より次第に著しくあらはれ、男兒は男性的にすべての行動を支配するやうになり、従つて粗暴なる傾向益々強く女兒は溫和因循となつて来る。男女共學をこる時女兒が常に引込思案となり暴君の如き男兒が常に女兒を壓し勝であるのを見ても分る。これ等の缺陷に對してはそれ〴〵適當なる指導啓發の施設をなさなければならぬ。

二、教育の實際

高等科教育の方針の後半、高學年及び高等科に於ける教育の實際に併論す。

高等科教育の方針

高等小學校は庶民の教育機關として最も重要な位置にあるにもかゝらず、從來其の實績のあがらざりし原因を考ふるに

- (1)、中等學校入學率の大小が學校評價のパロメーターなる觀ありし爲、尋常科に力を注ぎし割合に高等科が忘れられてゐたこと。
- (2)、有力なる父兄の子弟が中等諸學校に入るが爲プロレタリア學級の觀を呈せしこと。
- (3)、優秀なる兒童が中等學校に入り、比較的能力低きものが殘されしこと。
- (4)、教科に於て尋常科の反覆に過ぎず、程度に於て尋常科の延長に過ぎず、従つて青年前期の兒童の要求と相應せざること。

童の要求と相應せざること。

- (5)、修業年限短かく、尋常科の附設の觀あること。
- (6)、實際的ならざること——實業科、公民科のごときが輕んぜられしこと。
- (7)、情熱的なる青年前期の兒童の心理を解せざりしこと——審美的宗教的陶冶に缺ぐるところありしこと。

(8)、自覺自律の精神を無視して、幼少兒童と同様の取扱をなせしこと。

(9)、實際研究家も其の著書に参考書に高等科についての研究を怠りしこと。

要するに、高等科兒童は、其の將來進むべき方向に於ても、現在の生活に於ても、尋常科の兒童と趣を異にした特殊なる立場にあるものであつて、單なる尋常科の延長として考ふには餘りに重大なる使命を負ふて居る様に思ふ。將來義務教育が延長さるゝにしても矢張七・八學年は特殊なる教育を施さねばならぬものと思はる。高等科の改善が叫ばるゝ今日、單なる實業科手工科の加設に止まらず、總ての點に於て革新的なる教育施設指導方針が立てられなくてはならぬ。

野口氏は、高等科の教育は廣く一般庶民の教育なること。この期の教育は國民の實生活に重大なる關係があること。社會教育の基礎として重要な教育時期であること。純教育の立場より見て非常に好適な位置にあること。の四ヶ條をあげて更に、尋常科卒業者の五割五分が高等科の教育を受けてゐる

こと。高等小學校の教育は他日實際生活に従事する人々を教養する、即社會生産軍の卒伍養成の機關であること。高等小學校の教育は一般民衆の最高教育機關で、所謂國民高等學校として、最後の磨をかける重要な學校であるのみならず、今後補習教育青年訓練公民教育成人教育への基礎をなすものであつて、とりわけ正規な學校教育の最後のものとして、又年齢の上より見て頗る効果をあげ得る時期であること。又教育の本旨は、あらゆる知識を薄つべらに授け、それを暗記暗誦せしむるものではない、實踐躬行を基礎として、自らを體驗し強き信念と細かな實行的知識を獲得し併せて研究の眞方法を自得し、かくて彼等兒童の知能は練磨せられ、判斷力は増進し、その實行的習慣は確立せらるゝに至るのである、高等科は實に獨立した教育機關であるから、他の上級學校の爲に制せられることなく、教育の眞目的を十分に達することが出来ること。などと述べてゐる。本校の如く尋常科卒業者の七割以上が高等科の教育を受け、しかも現在に於ても將來に於ても、生産階級自治機關運用の主腦者が、殆んど高等科卒業者を中堅とすべき状態に置かれたるところにては、眞の意味に於ける高等科の教育を念慮せなければならぬ。而して比較的知能低かりし兒童が卒業後實際業務に當つて、驚くべき成績を示しつゝある現状は、教育上大なるヒントを得るものである。

かく重大なる使命を負へる高等科教育が如何に考へらるべきかにつき、左に大体方針を述べん。

(1)、教育の理想は連續的發展であり、連續的發展なるが故に其の一つ一つの階段に於て獨自の目的

があり、一々の過程に於て意味を有することになる。即教育は準備でなく生活そのものである。兒童の刻々の生活は刻々の生命生長であり、その自然的な生活は理性への一步一步である。吾々は自然の中に兒童を生活させると共に、環境の有意義なる整理によつて、自然に價値ある生活を創造して行くやうつとめてやらねばならぬ、かくして學校生活が彼等の正しき文化生活であるならば、續いて來るべき卒業後の生活に於ても、亦自らの進むべき道に掉し得るものであると思ふ。子供の時代を、眞に子供として生活したものに於て、はじめて青年としても、壯年としても意義ある生活をなし得るものでなければならぬ。教師は兒童の刻々の生活について、正しき理解と正當なる導きとに精進しなければならぬ。

(2)、すでに自覺自律的に進んで來た兒童を、何時迄も他律的畫一的に干涉束縛することは、徒らに兒童の倦怠と反感を買ふて、彼等の生命を害ふものである。自我意識の發動によつて自律的に、自己意識的に、目的々に學習し行爲してこそ、歡喜と努力とは生ずるものである。教師の任務は、理想を求めて無限に創造して行く個々の生命を、成長伸展させるやう補導することであつて、訓練に於ても、學習に於ても、自治的自律的ならしむる様諸般の施設經營を考慮することが肝要である。

(3)、知育偏重の弊は、徒らに分析的末梢的に走りて、人間本然の眞性を培ふことを忘れ、生命の源泉を涸渇せしめて人格の分裂を來し、無味乾燥なる枯木の如き人間を作るに過ぎない。知育も美育

も、要するに人格價值を高むる一つの要素に過ぎない。

教育は圓滿融通なる立派な人間を作ることではなくてはならない。殊に高等科の教育に於ては、所謂人物を作るといふことが、其アルファでありオメガでなくてはならない、故にすべての要素が圓滿に自我に渾一されたる價值ある全人的教養をなすことを理想とせなければならぬ。

(4)、國民教育の要諦は、民族固有の文化を繼承し、更に新に文化を創造する基礎をつくることである。

今日自然的で鞏固なる組織を有する社會は、國家である。吾人はこの祖先の創作したる文化（國家、地方文化）を、更によりよきものに創造して、人類の幸福を増進することを忘れてはならないと共に、立憲治下の國民として國民全体の國政參與により、國民の協同精進の力によりて、國家社會の進運、人類文化の進展をはからねばならぬ。かゝる見地に立つて兒童にのぞむとき、自治共同の眞義を体認せしめ、自治精神の涵養、團體に對する責任、協同心、犠牲的精神、社會奉仕の念を啓培すること、即生命ある公民道德の涵養につとむべきである。

(5)、高等小學校を實科中學と考へたい。職業的陶冶、勤勞尊重の精神の涵養は、あらゆる人間生活の基調をなすものといつてもよい。單に職業上の技術に熟達するのみならず、人格陶冶として最も大切なものがある。本校の高等小學校卒業生が、全部農業に従事するわけではないが、最も直接に兒童と交

渉ある農業科等によつて、職業の基礎陶冶（即理解、興味、意氣、理想、堪能）をなすと共に、勤勞共同の徳を養ふことを得ると共に、一面自己親密の活動により、知識を確實にし、情操の陶冶となり、意志を練磨する。本校の卒業生が、アカデミックな教科に最劣でありながら、卒業後の職業生活に於て營々として其職を樂しめる現状は、何を語るものであらうか。吾人の三省を要すべき重大なる点でなくてはならない。

(6)、しかしながら職業は經濟と密接に關聯するが故に、ともすれば實利功利の一面に走り易き傾がある。其の結果は折角築いた尊き勤勞の精神も、あやまれる我利主義に墮せぬとも限らない。吾人の希求は其の職業に自己の安住地を見出し、天與の職務に對して報謝の念を持ち、高尚なる精神生活をなさしめ度い。即現代の文化を理解し、社會事象に對する識見を有し、現代思想に對して正しき批判を有する健全なる人生觀を樹立させたい。かくて將來への絶えざる修養の基礎をあたへなくてはならない。高等科卒業生が將來地方の中堅となつて立つ時、確固不動の信念と、敬虔なる信仰を持つる爲には、科學的にも藝術的にも宗教道德的にも陶冶されてゐなければならぬ。眞理の前には何物の權威もおそれず、正しき道に自己の全生命をさぐる不動の信念を有し、高尚なる趣味を解する立派なる人物の養成に資したい。かゝる基礎的陶冶は、高等小學校に於て大部分養はれなくてはならぬものであると思ふ。かくて輕佻危激なる思想は、質實剛健なる國民精神となり、いまはしき社會問題に對しても、

正しき理解を持ち得るに至るであらうと思ふ。

(7)、英國民の襟度は運動競技の間に養成される。尤も身体上の發育旺盛なる高等科兒童をして適當なる運動を課することは、彼等の精神上の傾向より見るも望ましいことであり、身体は精神をはなれて存するものでない以上、彼等の精神陶冶の上にも、趣味の喚起の上にも、その旺盛なる精力の發露を、運動競技の間に求めてやらねばならぬ。

適當なる運動競技の間に於ける協同、禮讓、注意の集注、綿密周到微細なる心の働、忍耐剛健等の諸徳の涵養は、可成有効になされるものである。其外鍛鍊的遠足、見聞をひろむる爲の郊外教授、旅行等によつて、心身の強き練磨、意志の剛き修練をなすことも此時期の兒童には最も適當であり、其の効果も大である。かくて体育に關する趣味と理解とを養ひ、強き身体、旺盛なる精神力が將來の生活に必須なることを悟らしめねばならぬ。

(8)、青年前期の兒童として成るべく高き知能を得て、やがて社會人の第一歩を試むべきものにとつては、人生の理想、價值を創造して行くところの人生觀の確立がなければならない。漫然たる生活は、人生をおそるべき深淵に導き入るゝものである。危き人生の一路を、確固たる理想と不動の信念とを以て進ましむることは、意義深き尊き生活であり、よりよき社會人として活かしむる道である。知識技能の練達、道德意識の確立、宗教的信念を得しむる等は重大なる要素であらうと思ふ。

一、兒童の一般的傾向と指導の方針

◆**身体上** 尋五、六を受けて更に身体の充實期に入る。高二後期に於ては、身長体重共に殆んど完成期にまで發育する。而して生理的變化も著しく現れ、男女兩性の相異が著しく、趣味の上にも、性行の上にも、又兩性の特質を表はすに至る。此期に於ける男女兩性の上に最も注意すべきは、男子の聲帯の變化、女子の初潮である、共に青年期への第一歩である、最も同情的取扱を要するところである。男子は活動を好み、女子は元氣粗喪するを以て、それ／＼適當なる指導によつてその缺ぐるところを補ひ、規律ある生活、身体的鍛鍊を施し性格の上にもその効果を大ならしむるやう留意したい。

◆**心意上** 具体より抽象へ、感覺的より論理的へと理知系な發達は著しい進展を示す、科學的系統的な体系的知識を建設すべき好時機である、殊に自然科學に於ける研究は理想的に進んで來る。尋常科に於けると格段的に自覺自律の精神が向上してくる、故に學習訓練上彼等の自己活動を尊重し、自己支配による人格修養の助長をはかる好時機であると思ふ。

自己支配の力、自制的精神があらはれて、團体的精神が發達するから自治的精神の涵養は徹底的訓練の手段と、實社會的訓練の手段とを以てし、且實社會に出入せしめて自治訓育の實効を期し度い。殊に他を世話したいといふ愛他的傾向もあるから、特に女兒には此の美德の發揮を助成し、下級生

の指導などに任じたい。殊に団体と個人との關係の理解は一層進展して、団体意識、団体への責任觀念が強くなる。高學年にて述べし如く、諸多の學級乃至學校施設が彼等のこの精神を體現するに都合にはかられると共に、団体的共同的精神の意義を、明確に理會せしめることが必要である。更に進んでは公民的訓練の施設指導に留意することも必要である。

又青年前期の兒童として、次第に高尚にして審美的憧憬なる好尚を持し來り、宗教的神祕へのあこがれを持ち來る様になる。此期の指導は教師の人格的指導によつて、人間らしき眞剣なる人格者を養成するやうつとめたいと思ふ。

この時代には身体的におこる生理的變化に伴ひ、男女兩性の精神作用に甚しき變化と區別とを生ずる。男子は一般に粗野輕佻の風生じ、着實剛健の態度が少くなる、これは青年期へ續く特性であつて、これが不良性を帶ると生意氣な所謂不良青年などの風に染むの基をなす。女兒は次第に活潑な態度がなくなり、因循姑息優柔不斷に表裏ある行動や氣分があらはれる、と共に一面感情の動きが鋭く神經的な特性が著しくあらはれる。故に男子には沈着な作法高尚なる趣味を馴致し、女子には快活なる運動遊戯を課し有益なる談話、優雅なる趣味等によつて其の元氣を養ふ一面、女子たるの天分を培ひ。徒らにセンチメンタルな感情を刺戟することをさげねばならぬ。

更に趣味性の變化に従ひ野卑下劣なる趣味に親しましめず、青年前期の高尚なる知徳上の趣味性

を養ひ、且つ勤勞に對する趣味と理解とを得しめ、それを尊ぶ思想を開發し訓練上の立場よりして、種々の訓練的作業の完全なる實行を期し、粉骨碎身して働く良習慣の養成につとめたい。

又實社會の實狀に通せしめるための適當なる指導は、彼等のすべての學習に訓練に取り入るべきであつて、將來社會に出でんとする兒童に對しては最も大切な事である。(笠井氏より)

二、高學年及び高等科に於ける教育の實際

(1)、學習様式 一齊教授によるを大体原則とするのであるが出来るだけ自習自學に立脚する。兒童の研究發表を取り入れて、共同研究により學習を進めることは、學年の進むと共に漸次濃厚にし、高等科に於てこれに徹し、最後は獨自研究にまで進ましむる。

(2)、教授時間 時間割は從來のまゝとし、その各の時間中に自習時間を取り入れ置くと共に、高學年に進むに従ひ其の分量を漸進的に多くす。又時間割の自由採量を認め學習の連續をはかり、興味の中斷等の學習不經濟を防止すると共に、既了教材を時間の爲に何時迄も引張るが如き不自然を防止する。特に地理國史理科等の實習實驗を加味する教科に對しては、二時乃至三時間連續をも認める。

(3)、自學指導 自習時間を限定的特設制度によらずして、一時間の最初の十分十五分、或は一單元教授時數の中最初の一時間(例へば讀方の或一課を四時間の豫定にて教授するとして、其の中の一乃至二時間をとる)を自學時間として、教師の指導を加へたる、有効なる自由學習をなさしむ。かくて

高等科などに至れば、教科の性質或は教材の種類によつて適當なる方案を立てて、出来るだけ多くの自由學習をなさしめ、遂には獨自に計畫立案研究（勿論教師輔導）する迄に徹せしむることが肝要である。これ卒業後教師をはなれても尙自ら研究する態度を養成しておくことが大切だからである。然かも尋五六高等科を通じて、家庭に於ける學習指導の助けとなることも大であると思ふ。自學指導には適當なる参考書教具等の環境の統整と、その運用の指導が重大な役目を持つが故に、廣く環境に着眼し之を整理してあらゆる方面より、學習材を取入れ運用する様指導しなければならぬ。例へば高等科に於ける公民的訓育の如きは、自治村に於けるあらゆる方面の材料が豊富に存在してゐることに従來は極めて没交渉であつたやうに思ふ。

(4)、各教科指導の實際 各教科獨自の目的に従ひ其の精神に基づくは勿論なれども、其の學習の手法に至つては高學年兒童相應の指導方針を立てなければならぬ。尙教科相互の關係に於てはその連絡あるものを適當に關聯せしめて、其獨自性を失はざるに不離の關係を考慮し、時間的不經濟多元的分離の悲哀を防止せなければならぬ。例へば女子の家事科と理科とに於て、同一教材の同一部分がそれぞれ別々に取扱はれる如きは、學習經濟上より見るも、知識そのものより見るも、考慮すべき点が多い。かゝる教科の系統ある連絡によつて意義ある學習系統を作らなければならぬ。この事は各科の方針と連絡して、適當なる方案を各の學年に於て考究せなければならぬ。

(5)、環境の整理、環境は廣く見ればすべての兒童の周圍の自然人事の一切を含むものであり、狭く見ても尙且つ學校（校地校舍設備教師兒童相互）社會（村里家庭）を含む。いづれにしても此の環境が教育に及ぼす、無意有意の影響は實に重大にして力強いものがある。教育は先づ環境の統整とその利用について考慮しなければならない。そして其處より出發しての種々の施設、種々なる教育的意義を打立てなければならぬ。環境から受ける無意的影響はむしろ有意的なる教室の講義訓話よりも餘程大きいものがあることを注意せなければならぬ。然しながら吾々は施設として先づ學校内に於ける否學級に於ける環境を考へることが先決問題であり、それが餘程具體的である。學級を單位として其中にすべてを廣く取り入れることを先づ考へて見やう。

◆教科によるもの、各教科主任に於て調査したるものを基本として設備する。

修身科 掛圖、徳目系統表、公民資料、偶話俚諺話集、善行美績讀物、英雄偉人傳、郷土に關する讀物及功勞者傳記、等の讀物

讀方科 辭書（二兒一冊）、學習指導書、課別による教具、參考書、副讀本、高學年に進むほど多くの美文詩、代表的文藝作品に親ましめる設備、各課の原本等

綴方 文集、雜誌、讀方と共通のもの

書方 大家筆蹟刷物又は實物、範書用具、等

算術科 度量衡器及附屬品、實測實驗用具、實測標、目測標、學習書

國史科 年代表(全表、部分表)、教具(模型、器物、遺物、繪葉書、繪畫、彫刻、刷物、地圖)、
研究用參考圖書、學習指導書

地理科 地圖(最近のもの、部分圖、各種の地理事象を表はしたもの)、統計圖表、繪はがき、掛
圖、産業現品標本、旅行案内、年鑑、余土村誌、模型(地圖、鑛山火山地形港灣等)、學習
書類、旅行記、紀行文、等

理科 掛圖、各課の教具(實驗觀察用機械器具と其の設備)、動植物飼育器具、實驗用器具機械製
作設備、天文地文現象觀測用具、教材圖、參考圖書、理科讀物(教材理解研究、發明發見苦
心誌及偉人傳、教具製作手引類)、郷土の動植物分布調査表及標本分布圖

圖畫科 モデル、モデル台、布、畫板、畫架、額縁、鑑賞用畫集、特別教室

唱歌科 歌集、五線黑板、唱歌室、蓄音器、レコード、メトロノーム、掛圖、歌聖肖像、タクト
体操科 フットボール各級二個、砂場、鉄棒、跳箱、バツク、マット、肪木、並行棒、卷尺、跳切
台、圓盤、砲丸、バレーボールコート及ネット、バレーボール
運動場設備(キツクボールライン、フットボールゴール、徒歩コース)、レコードホルダ
ー、ストツプウォッチ、ピストル、運動年鑑

手工科 木工金工用具、作業台、研ぎ場、製作品戸棚、作業用具材料戸棚、すべて圖畫室と兼用

農業科 農園(水田、桑園、蔬菜園)、農具各種、農用掛圖標本、農産品見本、温床設備、養鶏設
備、養蠶、養蜂、養牛等の設備、農産製造設備、常に兒童が農場に親しみ、實習が興味と歡
喜の中に行はる、様設備整頓さるゝこと

裁縫科 各種見本掛圖、物尺、火鉢、アイロン、各種織物標本又は實物、各種被服類標本、ミシン、
等和洋裁縫及手藝用諸設備

以上大休環境の設備方面を述べたるも初にも言へることく、環境はすべての自然人事に亘るものなる
が故に、時に應じ機に臨みて適當に取り入れるやう、各教科主任と各學級主任とに於て研究調査して
價値ある利用をなす様考慮すべきである。

◆一般教室設備 一般教室設備は大休全校統一あるを要するも、高學年に於ては其の學習の様式及
作業等の關係上多少特異なる點あるを要す、例へば兒童用机の如きなるべく一人一脚用となすべく、
相互學習實習作業(地理の製圖)などに結合分離自由なる様なしおくことを必要とする。尙其他必要
なる設備をあぐれば、時計、寒濕度計、小黑板多數、算術等と關聯して大定規、グラフ黑板、兩脚
器、自習用大机、兒童用揭示板、書籍箱、雜具戸棚、帽子カバン掛、成績品揭示板、新聞揭示板、美
化設備として額縁、插花瓶、趣味設備として動物飼育器、植木鉢等、以上諸設備は出來得る限り兒童

の手によつてなされる、を理想とするものである。

(6) 教科担任制の加味 教科担任制は高等科に於ては特に必要なる制度である。教師の特徴によつて深き研究による指導は、兒童に能率高き學習をなさしめる結果になる。只本校に於ては實習生・訓導の間に於て、特徴教科に應じたる分担任を主体として、訓導相互間に於けるものと副とする。然しなから技能科・農業科に於ては専任又は教科主任に於て担当する。教科担任制は訓練の統一上常に担任者間に於て、研究統一あるを要す、尋常科に於ては主として技能科に於て担任制を採用し、他教科は學級主任之が指導にあたるを本体とする。

各教科教育の方針

修身科

一、本質論

修身科は他教科と並存して全教育の一部を擔當するものなれど、唯一體たる人間の教育に、各種の教科を以て當る現實相に於て、多元的にとゞまつたのでは、未だ其れが彼の生の原理となり、生命そのものとなつて成長發展するまでに徹底しない。それ等は正に一元に統一されねばならぬのである。

この最後の統一と云ふことに於て形式的教科としての修身科の意味、最も深きものがある。

惟ふに修身科は單なる知識の問題でなく、生命内容を統一する問題といふ意味を有つてゐると考へてよろしからう。修身科が修身科としての價値を發揮するためには、先立つ要件として潑刺たる本能感情がその生命内容として存在しなければならぬ。而して後に、生きたる人の魂と魂とが感應するところにおいて修身科が最後の統一としての特色をあらはし來るのである。即ち修身科の最後の統一は魂と魂との内容に成る點に於て文化價値の焦點を示すものである。一切の文化は生命と融合し潑刺とすることにより教育的意義があり、教科としての價値を發揮するのである。即ち修身科は個々分離せる日常の人倫を教ふるにとゞまらず、一切の教科を生かす根本動力を人間と人間との深き接觸の間に教養すべきものである。

二、目的論

教則第二條に「修身ハ教育ニ關スル勅語ノ趣旨ニ基キテ兒童ノ徳性ヲ涵養シ實踐ヲ指導スルヲ以テ要旨トス」とある。即ち教授の基づくところは教育に關する勅語である。而して之を實現するための要件として徳性の涵養と實踐の指導とが置かれてある。

修身教育は道徳の理論を授けるので無いことは勿論である、しかし實際教授に當つては理理が明確にされてゐなければ時に意外の誤謬に陥ることがある、例へば自利の見地から本務なり國家の行動な

りを説明することがあつたり、又功利的見解に立つて、公衆の利益幸福を計ることが第一義であるかの如き取扱をしたり、或は個人主義が見抜けなかつたり、時には空漠たる人類主義を奉じて家族制度を批評して見たりするが如きである。是は單に理想論に屬する一面であるが、其他本務論、徳論等に屬する問題に於ても同様の憾を存するのである。

次に徳性乃至道徳意識の研究も充分になされておなければならぬ。然らざれば兒童の道徳心を啓培助長する修身科の任務を完うすることは出来ないのである。兒童と雖も道徳的な精神作用は程度の差こそあれ本來授けられてゐる、併し之は適當に啓培されなければ充分な働をなさない。此處に修身教育の任務があり、その任務達成のために兒童の道徳意識の發達を明らかにする必要がある。

三、教材論

修身教授の材料は兒童の徳性を涵養し實踐を指導する爲の資料にて、人間生活の舞台には無限に藏されてゐる。自然人事の兩界に亘り、善惡正邪の兩面を残さず、凡そ吾人の感觸に刺戟する程のものは悉く修身科の資料である。けれども普通に修身教材と云ふ場合の教材の意味には、特定の制限が加はりてゐる。如何にも自然人事百般の事象は悉く修養の資料たり得るのではあれど、常に必ずしも道徳的影響を與へては居ない。殊に子供は無關心で居る場合が多い。のみならず時には却て好ましからぬ影響を與へることもある。それで、吾人は教育上の見地から、この雜多の事象に選擇を加へて、兒

童修養の資料として適當なものを握り、之を体系づけて實際教授に臨むのである。

而してその選擇の原理は、必要の原理と價値の原理である。現行國定教科書は價値の原理によつて教材を選擇し、必要の原理によつて實際教授に當り、以て兒童心身の狀況に妥當せしめんとしてゐる。

言ふまでもなく教科書の教材は修身教材の中心材である、即ち國民教育の原理である、その中には國家の要求が盛り込まれてゐるのである。更に又教科書は縱横の關係を考へ、一定の系統を立てて全体として遺漏なきやう排列されてゐる。換言すれば兎も角にも周到な注意を拂つて精選されたものである。よつて吾人は是非共教科書を重視し、十分その價値を發揮せしめなければならぬ。それは、教材を徹底的に研究し之を眞に理解し、自己の生活を其の中に投入し、感激を持つに至らなくては其の教材を取扱ふことは出来まい。しかも教授を實際に行ふに當つては其の機を捕へなくてはならないのである。

而して教科書を生かす意味からも亦その精神を充分に發揮する意味からも教科書以外の資料を以て適當に之を補ふことは必要である。

更に一方から言へば教科書は元來一般のものであるから一定の時處位に於て之を適用するに當つては、其の教材の一つ／＼には輕重の差の生ずるは當然である、即ち消暑、敷衍附加は云ふに及ば

す、不可遁的偶發事件の發生も屢々であるであらうし、更にまた時勢の變遷と云ふことも考慮しなければならぬ。

其他徳性涵養、實踐指導のためには、教科書以外に幾多修養の資料を見出すことが出来る。どうせ複雑多端なる實際生活の上に實踐規範を取扱つて行くのであるから、何と云つても學校内に去來する出來事や或は社會に現はれる事象に無關心でゐることは出来ない。

文部省と雖も、決して教科書以外の教材を認めないものではない。各卷の緒言に此の事は明瞭に斷つてある。故に吾人は教科書のこの主旨を考へて充分副教材を利用する所以である。

四、方法論

修身教授を行ふに當つては、その教育の對象たる兒童の研究に於て特に道徳意識の發達を明確にする必要がある。元來兒童心意の發達は、感覺的・物質的・具體的・經驗的・獨斷的・盲從的・模倣的・利己的より漸次概念的・抽象的・論理的・批判的・內省的・自覺的・公共的に進むのである。此の段階的生活姿態を無視して、徒らに教師の心理を以て推律しやうとすれば教育上大いなる破綻を生じ徹底した眞實の教育は行はれない。而してこの重要な根本問題は、前述教育方針中の低・中・高學年高等科各期に於ける兒童觀に於て其の概要を示した譯である。修身教授に於ても、この兒童發達の程度に準據し、徳性の涵養及び正善の實行を自覺的、自律的になさしめ、訓練と相俟つて品性陶冶の基礎を建つる様輔

導するのである。

而してその輔導の要件と目すべきものは

- (1)、兒童心身の發達程度の顧慮
- (2)、行爲の內的方面と外的方面との調和
- (3)、心術の指導
- (4)、修養方法の指導

等にして、之を教授事項の上に照合すると、出来る限り自學をなさしむべき事項即ち兒童を活動せしむることを本体として教師は適切に輔導すべきものと、其の反對に教師が正面から主として輔導の位置に立つて行くべき事項と二方面から見ることが出来る。

即ち自學を重んずべき事項は

- (1)、本務の理解
- (2)、例話の普遍化
- (3)、善惡正邪の判斷
- (4)、實踐事項
- (5)、實踐の工夫

(6)、自己反省

而して輔導を重んずべき事項は

(1)、理解構成上の着眼点

(2)、例話の模習

(3)、児童の批判に對する批判

言ふまでもなく教育は創造である、理念を覺念する真我の自覺が根本であり至極である以上、初學年から基礎的の教授に努力して充分活動せしむべき心身の訓練を行ふを主要となすべきである。

◆低學年の修身

抑厭は虚偽の母胎である。それによつて児童の生活が外形的整正を得ることはあらう、併し其處には我の成長が認容されてない。然るに我の成長の道が道德なのである。

児童の生活を所謂道德的に評價せんとすることは、児童の生活を理解せる者の採るべき態度ではない。児童をして道德を生み出させるまでの生活貯藏をなさしめることが低學年修身教育の根本である。で一二年の修身教育は児童の生活の理解者更に言へば、すべてを認容し得る高き人格者であらねばならぬ。勿論道德の正しき理解者であるべきことに今更言を俟たない。其處に眞の熱情も即されてあるのである。

一二年児童の生活は遊戯である。故に道德生活と雖も遊戯の生活の中より成長する。「遊びの合理化」と言ふ言葉が流行するが、此の語には誤弊がある。教育力の純粹なる發動はたゞ児童と共に心からほんとに遊ぶときにのみ、られる。何と云つてもほんとに遊ばなければならぬ。それは實に眞愛の生活なのである。温き心は全人格的態度を創造せる人の胸に胚生する。全人格的態度とは、善人も悪人も抱愛するところの生活態度なのである。

惟へば人生は深遠である、無限である、實に淋しい。併しその深遠に、淋しさに沈潜し得るでなければ、人生の愉悅を創造することは出来ない。希念する所は實に清明なる人格者である。

◆低學年修身教科書取扱について

低學年に於ては、修身教科書を深化し、藝術化して取扱ふべきである。乍然如何に材料の具体的研究が積まれても、價値の直觀が無いならば、教科書の材料は児童の生活に於て統一的發展をなすことは出来ない、生命を欠ける智識の集積であるならば、生活進展のためには無用であるのみならず有害である。何者、それは人間生活を迷路に導くか、停滞せしむるのみであるからである。智識は生活自体でなければならぬ。生命の要求となつてゐない智識は人をして偽善者、偽悪者即ち偽生活者たらしむることになる。

修身教科書の教材を韻律的藝術となして取扱ふ時には、児童の生活をもつて道德的規範を發見する

ことが出来るのであると思ふ。自己の生活と道德的智識の間に寂寥の世界を作爲せしめてはならない。

◆中學年の修身

中學年の修身は低學年よりの連續的進展であつて、高學年への階梯的過程である。然れども其れ自体としては勿論獨自相を有するのである。

兒童は中學年に進み來る頃は、充分學校生活にも慣れ、心意活動も漸次旺盛に向ひ來れる折なればその教育的意味は見方によりては非常に深いのである。低學年に於て何れかと言へばどうしても他律的現はれに傾かざるを得ざる部面もありし修身科の教育、並びに實踐指導を道德本來の立場に於て生活し得る様、即ち生命生長の道德であり規範である様、周到なる注意と博大なる愛を以て教育して行かんとするのである。

然れどもやはり注意すべきは低學年の修身に於て述べたる魂の接觸、人格的感化といふ根本である、重複を避けて再述はなさないけれども、澄める眞成の觀得する直覺と反省にうつたへて德育の眞義を果たさんとするのである。

◆高學年の修身

修身科は小學校に於ける唯一の哲學的教科である。而してこの趣の最もよく顯はるゝは高學年の修

身科である。哲學といふことの眞義は生活を受することである。生活を受することは生活を孕育することである。而して古來の哲人の述ぶる所、行する所を研究すると云ふことも生活進展のために無用のことではない、人々は偉大なる生命によつて創造せられたる哲學の跡によつて自己の生活を孕育鍛練することが出来るのである。しかし其處には必ず中心生活が要求されてある。中心生活なくして、幾多の哲學説を追ひ求めて以て研究するときは、生命は却てそのために抑壓せられて了ふのである。

修身科が哲學科であると云ふことの意味は、修身教育の中心生命が思索生活であるといふことなのである。思ふに日本人の生活に革命の行はれたのは度々の事實であつた、しかしその革命は何れ程の深さにまで及んで居るのであるか。表面的には著しき習慣打破があり、氣分の變化もあつたであらう、乍然内面的に如何なる思索があり變革があつたのであらうか。かく考へると我國には、文化々と文化の聲は高けれども、未だ眞の文化は創造されてゐないとも言ひ得られはしないのか。文化とは自己が自己に復歸する相そのものである。個人主義生活は人間生活の窮竟より言ふならば過程の生活である。なれども眞の文化は個人主義生活を生活しない人間には創造されることがない。何者文化は妥協でなくして愛だからである。愛は妥協の破壊せられし跡に萌え出づる新芽なのである。

かくて高學年兒童に對してその徳化の營みを納めんとするには、やはり兒童の心的特質を明らかにしなければならぬことは既述の如くである。よつて前節高學年兒童の特質に示せし所に據り、更に

生命なき概念を追求することの淋しさに徹して、自己の生活に復歸しなければならぬ必然性を見出し、謙虚な態度で所期の理想を實現すべく努力するのである。

◆高學年の修身書取扱

高學年修身書の活用は思索生活に據らなければ不可能である。兒童に先づ誠實な態度を涵養し、眞心を以て教科書に臨むことによつて、その中に思索問題を發見せしめ、それによつて道德生活を成長せしむるのである。しかし兒童に修身書より思索問題を發見せしめそれによつて兒童の道德生活の成長を希念すると云ふことの外に、兒童が偶發事項や時事問題或は自己の生活上の問題を提出して、それを思索問題となしその解決乃至歸結を教科書に求めることの如きもあるであらう。かゝる場合に於ては修身書に現代的徳目の缺除して居ると云ふ破目に行き當り困惑することも屢々であらう。其處には教育者の生活が誠實でなければならぬと云ふ要求がある。

修身書が完全無缺なものではないと云ふことは判り切つてゐるが、修身書を無價値なものであるとして排斥する態度を肯定することの不可なるは已に言明した通りである。深き生活者は他の批判によつて支配せられることなく、自己が所信の生活によつて對象より味識するのである。流行的左傾思想は單なる概念のみ、誠實なる生活者の生活によつて見出されたる概念は概念であつても生命概念である。修身書の取扱は生命に信順する所の態度を以てなさなければならぬと思つてゐるのである。

讀 方

一、國語教育の基調

故森文部大臣は、日本語の不整頓を慨嘆して、之に代ふるに英語を以てせんとしたことがある。時にこの舉に對して、米國エール大學教授ホイトニー氏は、戒めて曰く「昔から或國民が父母の言語を捨て、他の國語を採用した例は決して少くはない。併しながら斯くの如き場合は、政治上社會上共に壓倒せられた止むを得ない場合のみに限られてゐた。」と言ひ。更に語を次いで、「英語を次で日本語に代へることが日本の文化を進める上に、假令幾何かの利益はあるとしても、祖先の言語を改善し、發達させて文化の進歩を計る方法を探るのではありません。一國文化の進歩は、唯自國語によつてのみ仕遂げらるべきものである。」と文書を以て忠言し。又上田萬年博士は、「日本語は日本人の精神的血液なり。日本の國体は此の精神的血液によつて維持せられ、日本人種は此の最も強く最も永く保存せらるべき鎖のために散亂せざるなり。」と力説されてゐる。

實に言語は、其の國特有の精神を宿すもので、我が國語には日本精神が漲つてゐることを忘れてはならぬ。これ國語教育の根本精神である。

國語教育者は眞に國語を熱愛し、この基調に立つて言語の教育にあたり、國語の第二形式とせられ

たる文字語句を取扱ふにまで至らなければ、國語教育の使命を果すことは出来ない。斯く考ふるとき、國語を對象とする讀方教育の使命が如何に重大であるかと思はれる。

二、讀方科の意義及目的

讀方教育は其の基調をなす言語・文字・文章を透して讀むことの能力を啓培するにある。而して文字文章は言語の音聲を形に表現したるものなるを以て、此の言語の音聲を聴き、又は發表する學習は、文字文章を讀み又は書く學習と共に、讀方學習の本質的要素である。而して此の讀むこと・聴くこと・書くこと・話すことによつての思考作用等所謂精神内部の働きを修練することは、讀方學習の重要な本質的要素であらねばならぬ。

故に讀方教育の目的は以上の諸作用を陶冶することにより次の三項に歸着するものと思はれる。

(1)、國語による思想の獲得と表現能力の陶冶

思想感情の媒介者としての文字(國字)及び言語(國語)により收得能力と表現能力との基礎陶冶をなすために、正確な發音明瞭な調子で標準語を話し、且つ之を自由に操り得るまでに習熟し、口にも筆にも自己の思想をよく發表し、他人の説話・文章を理解する能力を養ふこと。

(2)、讀書力の培養

文を直觀することによつて、其の文章の表現する價值内容を、明瞭正確に然も深刻に、理解鑑賞す

るといふ讀みの境地に達するには、眞に讀み得る力が働かなくてはならぬ。つまり此の文を正しく讀む力が讀解力である。

故に高き讀みをなさんとすればするほど、讀書力の培養を重大視する所以である。

(3)、自我の啓培

垣内先生は其の著「國語の力」に於て「讀方が文字を視て精しく考えることから、我々自身を教育することではなければ、讀むことは個性を生ひ立たすことでもなく、文化を進めることにもなり得ない。」と言ひ。赤坂氏は其の著「國語教育論」に於て、「偉大なる人物の書いた文學に親しみ、文學を以て趣味の源泉として、其の生活を豊富にし博大な識見を得るに至るは重大な事である。」と説かれてゐる。蓋し小學校に於ける讀本の教育は一種の手段であつて、目的は一生涯に亘つて、國民が讀書に依つて人格を高める能力と、趣味性とを養はんとするにある。然しこは終極の目的なれども、吾々日々の營みに於ては讀本を讀方教育の中心とし、之によりて培養せられたる讀書力を課外讀物にまで及ぼし、讀書の趣味を涵養すると共に、自己教育にまで導くことの興味を體驗せしめなければならぬ。こゝに於て自然や人生の種々相に對する高き精神生活も出來、國民精神の涵養に資することも出来る。

故に「讀むことによる自我の啓培」は讀方教育に於ける最高の主眼となすべきである。

三、読むことの意義

文を読むとは自己を深化し純化しようとする意欲によつて、文章の形式たる文字を辿り語句を透して、読者の心と作品とが合一し、即ち主観客観の合一境としての想自体に深く沈潜し、之を理解し鑑賞し批評することによりて、其の作者の生命の流を検討し、理念の世界をさぐり、読者の生命が之に融合し、以て自己を生長せしめることである。

かく見れば、読みは死物の如き符號に働く主観の力がなければ、これを統一して、内容の世界を構成することが出来ない。故に其の文章が如何に生かして讀まれたか否かは、全く我の深さによるもので、同一文に對しても読みとる深さは千種萬様の差等を表はすことになる。つまり自己を読むことであつて、こゝに讀解修練の深い意味を見ることが出来る。

而して讀む作用を可能ならしむるものは讀解力であつて、之を形式的に見れば、文字を訓み其の文字の現はす言語の意味を知る文字言語の力、其の言語を連續統一する語法の力、及び思想感情の理解力と言ひ得られ、更に之を内容的に見れば、文章を直觀し作意を直觀して、文章の表はす意味を明確に把握する内容把握力と、叙述の眞意・眞諦を玩味し、情趣を喚起して其の境に自己を觀、更に深く人生を考察する文章鑑賞力との二つに分けて考へることが出来る。

四、文章の本質

讀みの對象たる文章は、作者の生活を作者の文字言語によつて、論理的關係に於て表現したもので、文章は作者の生活より生れたる思想感情があり、この思想感情を表現する文字語句があり、其の表現は表現の制約たる語法によつて統制せられてゐる。

かく文章は文字語句を要素として成立し、これが感覺を通し更に知性に訴へて初めて意味をなすものである。即ち文字は其の意味を生命とし、文章は文字の集合にして時間的・論理的關係による連續の上に意味の流を持つ。而して此の場合には個々の言語のもつ表象を超越した一つの感情の流をもつものである。

されば形式ある所に直ちに内容を持ち、内容は形式を俟つてはじめて表現される。即ち内容形式は全く不可分のもので、文に於ても一元にして一如である。文章中に於ける個々の言語は、全体の意味を分有してゐるもので、其の一語々々の中に作者の生命が流れて意味を具現する。故に文章を離れて言語なく、言語の理解なくして文章の眞意味を讀むことは不可能になつてくる。

五、學習の材料

教材とは兒童に機縁を與へて、暗示を與へ思索せしむる自己生命伸長の對象をいふ。今之を讀方教育の目的より考察すれば、其の材料は讀解修練に有効であり、同時に讀みとつた内容は讀者の心のよき糧となるものでなければならぬ。即ち内容自体に思想を深化し擴充し、人性を啓培する價值をも

ち、それが純粹によく表現されたものでなくてはならぬ。かゝる意味に於て教材は所謂文學的なものを必要とする。

又讀解修練のためには、深く讀むと同時に多く讀むことが必要になり、更に彼等の生活に即した子供心のあふれたものでなくてはならぬ。故に吾々は子供の生活、傾向、趣味、心理等の程度に就いて考究し、適切にして價值ある作品を多量に撰擇せねばならない。

かうした要求の上から現行讀本を見るとき、質に於ても量に於ても可成り憚らないところを認める。故に我校に於ては國定讀本を中心としつゝも舊讀本及課外讀物中より教材を補充して讀方教育の向上を期してゐる。

六、讀方學習の態度

(1)、讀書の意欲より

我は動的であり可能的であることに目醒めさせて、自己の空虚を充實し、無限の創造進展を圖らうとする心的傾向を來さんか、即ち讀まんとする欲求の生ずるところ必ずや興味をもち高き讀みの境地に達することが出来る。これ讀解態度の根柢とも見るべきものである。かゝる萌しを兒童の心に宿らしめるには、一に教師の感化に俟つべきである。教師の内に滿ちたる思想の反映は不知不識の間に兒童を薰化して行くものである。

(2)、意味を讀むこと

讀解の本質より之を見ても、乃至は吾々の讀書生活を反省しても、訓みと意味を捉へることは別々のものではない。讀むことそれ自身が意味をさることであつて、常に讀みと意味とは緊密に結びつけられて未だ切離されたことがない。「讀みは即ち意味である」ことを明瞭ならしめ、最初の讀みから意味をさる態度を齎らしむべきである。

(3)、熟讀翫味すること

文は思想感情の表現されたもので、詩趣情趣をもつと共に人生への考察をもつ、即ち情感の世界であると共に理知の世界である。故に之を理解し鑑賞する爲めには、先づ放心を收斂して動搖し易い心を据ゑ、睡を凝して文字の底に潜める意味をさぐらねばならぬ。即ち感性を鋭敏にし、理性を明敏にして熟讀翫味し、深く味ひ考へる態度で接せしめなければならぬ。かゝる態度で文に接せしめてこそ兒童の讀みは進展してゆく。

七、學習指導の方法

(1)、内容形式の問題

文章の本質に於て述べた如く、讀方教育に於て、文の内容と形式とを分離して考へる二元的見解には本質上の謬見がある。文章は決して形式と内容とを分離背反した二元的に觀るべきものではな

く、一元的に一つのもの、両面の観方といふ見地に於て、兩者を對立考察すべきものである。従つて此の一元的見解に於ては、文章の形式を重んずることは即ち内容を重んずることであり、内容を重んずることは即ち形式を重んずることである。かく文章に於て形式内容は一元であつて、文は一語々々の活力によつて生き、作者の心情や文のもつ情景や實況は、語及語の連續の上に托されてゐる、されば叙述を透して内容を洞見し初めて文意に觸れることが出来る。文の形を想の形に深め、想の形を文の形に見るべきである。故に言語文字の理解及び語法修辭の吟味深きときは、確かなる意味の理解情趣の感得となり、意味の理解情趣の感得不充分なときは、そこには言語文字の理解叙述の吟味の足らざるものあるを思ふべきである。

(2)、基本的方法としての文章法

文章は作者の思想感情を、文字語句により全一体として有機的關係に統一されたものである以上、文章を読むことは單に與へられたる作品を受動的に外面的に分析綜合することなく、其の内面的な全文の意味、作者の生命を目標として進むべきである、而して其の全文の意味は文字語句の意味が關係づけられて成立する。故に常に文章全体の上に立つて其の背景の下に部分の意味を深化し、部分の意味の深化が同時に全文の意味の深化となるやう取扱はねばならぬ。即ち文を單位として總合的に學習する文章法によるべきであつて、文字や語句や個文や文段やは全文の意味を構成する要素で、それ

等個々の吟味や解釋も、或は作者の想定や表現法の鑑賞なども、常に全文の意味と關係づけられるべきに於てのみ意義をもつ。

かゝる立場に於てなされるセンテンス・メソッドの一般的方法は次の如き順序より展開する。

イ、文意の第一次直観

ロ、構想(又は節意)の理解

ハ、文字語句の深究

ニ、内容の理解

ホ、鑑賞より創作へ

文意の第一次直観とは、第一回の読みによつて全文の心的意味を把握しようとする作用である、つまり第一印象を捉へることであつて、作者の表現せんとした心と、それを如何程までに表現し得たかを全体的に直観することである。故に此の段に於ては少數の不明な文字や語句にかゝはることなく、先づ全文体を洞察してそれを心の面前に引き据ゑることである。

次に構想の理解とは、この直観した文意を更に生長せしめ發展せしめ行く方法として、その文を構成する各節を全文の意味に關聯せしめて理解してゆくことである。而して此の場合はその節を構成する文字や語句の深究が同時に行はれる。かくて節意・句意・語意・字義を中心問題に關聯せしめつゝ究

明することにより文の内容は順次明確となる。

かくして第一次に直観したる文意は、いよ／＼深化し發展し、更に再構成的体験により文の生み出されたる内面的根元を究めて、これを味讀し、より高き自己を創造し、遂には之を表現せんとする作用にまで及ぶ。こゝに於て讀むことは鑑賞より創作へと進み、真に高き讀方學習を行ふことゝなる。

(3)、文の直観と其の指導

讀方教育に於ける文の直観とは、文を讀むことによつて直接に對象の本質を讀むことである、即ちデイルタイの体験的再構成であつて、讀者の魂が文字の裏にひそむ文の生命に生きることである。

こゝは讀方學習の第一次作業たる通讀より、最後の鑑賞創作に至るまで一貫して持續さるべきであつて、構想の理解も文字語句の深究も、單なる個々の作業でなく全文に關係した大きな意味の一部分として究明せねばならぬ。若しも文意の直観が文の生命を捉へ誤りしことあらば、これを究明することによつて、之を補ひ之を修正し讀みはいよ／＼深化し發展して完全体へと深められてゆく。かくる意味に於て讀方は直観に始つて直観に終るといふことも出来る。

指導の一法として文字語句を鋭くみることは、蓋し直観作用修練の最良の方法であらう。

(4)、鑑賞と其の指導

文を讀むことによつて、その内容をなす美的價值に觸れ、その文の個性を味讀し、作品そのものごと一体になつて作品と共に働くことを鑑賞といふ。即ち讀者の心が作品の中に浸つていくと云ふ讀書三昧の絶對境をいふのである。よりよき作品に接したとき、吾々の魂は知らず／＼作品の中へ奪はれ、作品の個性の中に作者の生命を慕つて流れてゆく。

かゝる美的鑑賞の作用の啓培は兒童をして、よりよき文學的作品の中に浸らせ、生活させ、讀み耽らせて自我發見の悦びを体験せしむることである。

従來の讀方教育があまりに概念的であり分析的であつて、総合的に全体的に情意を以つて鑑賞の境地に生活せしむることの足りなかつた点は、大きな缺點であつたといつてよい。

(5)、言語・文字の取扱

言語・文字は文章讀解の實を擧げるための要素であつて、文章の意味に到達する要關である。この意味に於て言語文字の理解は第二義的のものに見られる。併しこの意味はそれ自身が目的でないこと云ふことで輕視してよいと云ふことではない。言語文字が文章の意味に向ふ要關であるだけに、これを粗畧にしては如何に内容の理解・感得を企及しても到底なし得ないのである。讀解の第一義に徹せんとすればする程、言語文字の周到なる取扱が必要になつてくる。

尙之を讀方の心理的過程より見れば、先づ第一に文字を記憶し、それに伴うてその訓方即ち發音の

仕方を知ればならぬ、その次には言語の結合に對する注意が現はれるべきである。内容を重視せんとしてこの方面の取扱を粗畧に附することは本質的の謬見がある。讀方教育の獨特の立場は、單に載せられたる内容の理解でなく、第一義的なものゝ存することを忘れてはならぬ。

更に言語文字は、一面自己の思想感情を表現する形式である故に、たゞ單なる理解に止らず、之を記憶に訴へ、やがて其の活用にまで發展せしむべきである。吾々はこの誤れる語句文章の取扱を根本的に改造し、正しき本質觀に立脚して讀方教育の實際を創造してゆかねばならぬ。

八、讀方學習上の諸問題

(1)、學習様式と實際

讀方學習の方法は當然文章法に據るべきである。即ち文を單位として総合的に學習して、理解し又は鑑賞せんとするには、文章全体を目標としてはじめてなされるべきものである。然しながら實際學習指導の場合に當りては、土地の狀況、兒童發達の程度及び學習の材料等によりて、必ずしも一樣ではあるまい。適當の方法を探り、その精神を活用すべきである。それは全く人によるべきであつて、凡て學習指導の方法に於ては常に一般法と特殊例とのあることに注意しなければならぬ。

(2)、朗讀法の指導

朗讀(美讀)は他人の思想感情が文字によつて表現された文を、そのまゝ音聲に還元して、他人の表

現せんとした内容を再構成することである。よき朗讀とは文を深く讀み入ることから流れ出づる自然のリズムをいふ。故に朗讀の指導は齊讀や範讀の模倣によるのではなく、文そのものゝ深き理解鑑賞の上に立たなければならぬ。

斯くしてなされるよき朗讀は、形の上より見れば、一分間に二百字乃至二百五十字を訓み得べく、それには何等の技巧も不自然さもない單なる談話調である。尙近來は意味を擴めて標準語の徹底をはかるため發音及びアクセント其の他の讀み振りを朗讀の中に加へる論者もある。

標準語のアクセントの指導は地方に於ては頗る困難であるが、「標準朗讀レコード」の利用によつて、發音の明確、アクセントの正しき最もよき朗讀の指導を爲し得ることが出来る。

(3)、方言・訛語の矯正

國語精神の有るところに國民の融合團結がある。日本の國體は此の精神的血液によつて維持せられ散亂しないとは前述せるところである。

こゝに於て吾々は自然のまゝにしては亂れやすい日本語を、教育といふ立場から保護し、統一するといふことは大なる務として忘れてはならぬ。此の故に小學校の讀本は正しい國語を以て其の標準を示し、之が徹底を期して居る。固より方言の美点を否定するものではないが吾人が眞に國語の尊貴を思ふとき、兒童を方言より標準語へ導き、自らも之に習熟するの努力を拂ふべきである。教師は先づ國

語精神の發動するところにより、児童の言葉の調査にかゝり、協力一致して之が徹底に努むべきである。本校に於ては別に定むる要目により、これらに關する知識を興へ、之に對する態度と適用上の注意を調査して漸次方言・訛語の矯正に努力してゐる。

此の問題は理論ではなく、教師と児童との根氣比べである。熱心な多くの人達の眞剣な態度によつてはよほどまで矯正されるものである。

◆本校に於ける言語一覽表

(1) 訛語

訛語	意	義	訛語	意	義
アコ	アソコ		オホケナ	オホキナ	
アベル	アビル(浴)		キシヤナイ	キタナイ	
エエコト	ヨイコト		クチビロ	クチビル	
エツボド	ヨホド		ケツル	ケル	
ヨツボド	エビス		ケンド	ケレド	
エビス	オソロシイ		コナイニ	コノヤウニ	
オトロシイ					

コサエル	コシラエル	ナアーニモ	ナンニモ
サカシ	サカサマ	ヌクイ	ニクイ(難イ)
サムシイ	サビシイ(寂)	ネラム	ニラム
サプイ	サムイ	ネンジ	ニンジン(人參)
サワ	サヲ(竿)	ノコ	ノコギリ
シス	シユス(繻子)	ヒチ	シチ(七)
シラル	ステル(捨)	ヒボ	ヒモ(紐)
シト	ヒト(人)	ビヤ	ビワ(批把)
ジャクロ	ザクロ	ブチ	ムチ(鞭)
ジャラウ	ダラウ	ホイタラ	ソシタラ
ダイコ	ダイコン(大根)	ホシテ	ソシテ
タボコ	タバコ	ホトコロ	フトコロ
ツヅ	ツブ(粒)	ボル	モル(漏)
トンギラス	トガラス(尖)	ランキヨ	ラツキヨ

(2)、矯正スベキ方言

方言	意	義
アヤギ	エダノアル薪	
イケズ	イタヅラ	
イツチヨウ	數ヘルトキニイフ	一ノ意
イナゲナ	ヘンナ	
インゲ	イ、エ(否)	
イラバカス	ナブル(黽)	
ウンニヤ	イ、エ(否)	
オガス	ホリオコス	
オゴロ	ムグラ	
オセ	オトナ(大人)	
オドラン	ガマ(蝦蟇)	
オンビキ	カヘル(蛙)	
カガス	カガス	
ガイナ	カグ	
カグ	カツサイナ	
カツサイナ	カツタ	
カツタ	キリプサ	
キリプサ	キツバチ	
キツバチ	……ケ	
……ケ	……ケニ	
……ケニ	……ケン	
……ケン	コンニ	
コンニ	ゴオタイナ	
ゴオタイナ	スリバチ	
	強イ、無茶ナ、暴亂ナ	
	カク(缺ク)	
	カチキナ	
	カリタ(借)	
	買ツタトノ別	
	キピス	
	コハバル	
	……デスカ	
	……カラ	
	……カラ	
	シキリニ	
	グチ	

ゴオヤク	グチコボス	セコイ	苦シイ
ゴツイ	厚イ	セセカマシイ	ウルサシ
サツチ	シヒテ(強ヒテ)	ソナイニ	ソノ様ニ
ジバ	ツネ(常)	タクラバチ	蓑笠ノ笠
ジュジュム	ニジム	タゴル	咳ヲスル
シヤグル	平タクナリ	チイト	少シ
シヨウニ	ホントニ	チミン	目高(小魚)
ジヨウレン	竹ニテ作レル器ノ一種	ツイ	同ジ
シンドイ	苦シイ	ツブレ	釣瓶
シワク	打ツ(叩ク)	ラガフ	ナブル
シバク	フルヒ(篩)	……テヤ	ナアノ意?
スイノ	落チタル松葉	ドヤヲキル	駄々ヲコネル
スクズ	小癩ナ	トンギヨウ	頂上?
ズンバイ	……デスヨ	ドンブクロ	眞最中
……ゼ	スサキリ	ナモシ	ネーアナタ?
ゼチメン			

ネキ ノオテ ノサク ハセダ ヒシテ ヒロク ヘチ ヘラコイ ペロ	側 ……デセウ 放リ遣リニスル 仲間外レ 一日 アパレル 外(適中セズ) ヅルイ 舌	ホタツク ホツタラカス ホオホ マガル ヤネコイ ヤライ ヤンチャナ ワヤク ヲンジリ	ブラノ遊ブ ウチヤリニスル サウ 邪魔スル 六ヶ敷、複雑 軟イ キタナイ 悪戯 尾
---	--	---	---

(3)、禁止スベキ卑語

……シタ アガイ アンタ	意 アノヤウ アナタ ナサイマシタ	卑語 ウチ オマヘ ゲツ、ケツ	義 ワタクシ 又ハ僕 君 又ハアナタ シンガリ
--------------------	----------------------------	--------------------------	----------------------------------

コガイ ドンゲ ソガイ ニイ ネヤ	コノヤウ シンガリ ソノヤウ 兄 又ハ下男ノ意 ……ナア	ネエ ヤン ワシ シヨンベ	姉 又ハ下女ノ意 人ヲ呼ブニ用フ ワタクシ 僕 小便
-------------------------------	--	------------------------	-------------------------------------

綴方

一、綴ることの意義

綴るといふことは廣義にいふ所の表現作用の一種である。顔色・身振・動作・繪畫・彫刻・音樂によつてある種の感情乃至想をあらはし、また言語(音聲)を以て思想感情をあらはすことと等しく、綴るといふことは文字文章を以て思想感情を表現する作用である。而して綴る作用は言語による表現作用と共に、吾人の思想感情を表現する作用の中、最も明瞭であり有効である。即ち言語及び文字文章による表現は、複雑極まりなき吾人の生活、思想、感情を如實に適確に而かも普遍的に表現し得る特質を持つ。またこの近似の二者の中、時間的に思想感情を保存せしめ、空間的にそれを傳播せしめるとい

ふ立場から見ると限りに於ては、文字文章による表現効力は言語によるそれより遙かに上位にある。尙綴るといふことは、書く、記す、記録する、叙述する等の概念とや近似の内容を有す。今その内容を考ふるに、單に文字文章を筆で書く場合、その書かれたる文字文章には確にある思想なり感情なりが内容として存する。然れどもそれは決して書寫者の思想や感情ではない。また單に後日の記憶に資する爲の日記の如きも、その筆者の思想感情の表現と見るは無理である。運動會等の記録に於ても、生活があり言語學上の思想はあらうが、その記録者の思想なり生活なりは認められない。尙理科の學習にその要項を筆記したり、試験の答案を認める場合に於て、思想感情が内容として存してゐても、それは筆記し認める者の生活から湧き出して來た所の彼自身の思想感情ではない。また歴史、物語等の如く過去の出來事を叙述する場合、作者は自己の思想感情を表現するのではなく、たゞ過去の出來事、過ぎ去つた事實を報告すればそれでよいのである。かくの如き純粹叙述は作者自身の働きが加はらず、單に記録の爲にその模様を叙述したもなれば綴方とは見られない。こゝに於て綴るといふことは狭義の表現と一致して來る。——生活表現と綴方指導中の綴ることの意義による——

二、綴方の目的

綴方に於ては自己の生活自己の思想感情を文によつて表現しなくてはならぬ。そこにのみ綴方の意義が存する。この意味で綴ること即ち表現は、所謂創造作用の一種であると共に藝術的勞作の一

種であらねばならぬ。そこには自己の生活を對象として、綴らんとする作者の人格的生命的創造活動が行はれなくてはならぬ。随つて文章はすべて、作者の人格及びこれによつて統一された作者の内的生活から生れたものでなければならぬ。この故に綴方生活には何より作者の内的生活、即ち實相として文學的・科學的・倫理的・宗教的等の生活の營まれる精神生活が尊重せられる。かくて人格的生命的創造的自己活動が最も健全に自由に働く時、その表現の手段は自らこれに附隨して生れ、そこに個性の輝を發揮する。作品の價値はその藝術的價値にあるも、作品を生んだ素材即ち生活(題材)的價値もまた忘れてならぬものである。換言すると藝術的表現は、人生に對して有效な意義のある素材の上におかされるべきであり、それによつて作品の藝術的價値は一層照映されるものである。されば綴方教育に於ける藝術的價値創造の表現指導は、當然生長に役立つ素材即ち生活(題材)的價値に思をいたしその上に立つてなすべきである。素材の問題に無反省であつてはならぬ。

かくて綴方の目的を案するに「自己の生活を文にあらはし、自己を生長せしめる」ことである。生活を文にあらはしは綴ることの意義を示し、生長せしめるは目的を意味するものであるが、文章(作品)は自ら向上進展しつゝある生活を自らが内省し整理し表現するやうな態度と能力を養ふことによつて創造され、生長(作者)はかくすることによりその個を自ら理想に基づいて、改造進展せしめる所に見出される。故に文にあらはしといひ、生長せしめるといふも、或は作品といひ、作者とい

ふも楯の両面、個の兩相、つまり形式内容一元の表現に歸するもの、換言すると生活を文にあらはしは單なる生活の經驗再現の意ではなく、文にあらはすこと即ち自己を生長せしめる連帶、相助の相を持つものである。

三、生活と題材觀照

文の根元は作者の生活にあり。生活とは何か。人生は直觀から表現への螺旋的向上循環のプロセスだ。而して生活とはその直觀から表現への生命の流れの總稱である。別言すると生活の本質たる生は頃刻も同所に停滯することなく、不斷に向上し充實し進展して止まぬ。生命はその生長を企圖する爲に常に客觀の世界と交渉を持つ。生命の生長は環境によつて企て得る。そのプロセスを稱して生活といふ。生活とは生の具体的表現である。故に直觀から表現への生命の流れであり、生の具体的表現である生活の指導は、生命の欲求を尊重し、その願望をかなへてやることを以て第一義とし、そこより進展させなければならぬ。子供が彼等の欲求する生活を生活し得た時彼等の心は喜に充つる。そこに表現の動機は生る。而してこの歡喜の生活より、客觀的方面に驚異すべき事象を發見することに進展するが、更に進んでは内的生活、深さの生活に指導の眼を向けねばならぬ。即ち心の眼を開くことである。生活に意味を發見さすことである。美的價值發見である。——美なるものは物象である。然し物象を美にする所以は、物象が物象として吾人に與へる官能的快感ではなくして、物象の中に表出され

る生命そのものである。故に單に一つの對象がある種の感情を惹起するの故を以て、漫然としてこれをその對象の美的價值に數へることを許されない。快、もしくは善たるに止つて美ではない。對象の中に没入する時に必然に吾人の心の中に喚起される價值感情である。——

題材及びこれに對する態度について、表現と鑑賞中の「文學獨自の境地」の言葉を借りて見たい。「文學の題材は何か、これを最も手短かに平凡にいへば自然と人生といひ得る。特別に文學的だといふものがあるわけでない。たゞこれを取扱ふ態度、これに對する態度の如何によつて文學と非文學との境界が別れる。題材だけに就いて見れば、哲學とも科學とも共通であつて、自然と人生を取扱ふといふ点は變りはないがこれに臨む態度に大なる差別がある。仁者は山を樂しみ、知者は水を樂しむ。山水の人格陶冶に資する点を見るは實用的態度である。人のふり見て我がふり直せ、人生の紛紜曲折を見て、これを道德生活の參考とするは功利的態度である。山水の美しさ氣高さをつくづく眺めて、神往忘我の感を起すのは即ち文學の態度であつて、利害の念を離れ實用の心を棄てた境界である。花の開落や月の盈缺を見て、その理を窮めその則を明かにしようとしたり、積善の家が時に餘殃を受け、積惡の人却つて餘慶に浴するやうな世相を見、強固な意力の生活の側に頽唐した神經の生活あるこの人世を觀て、そこに因果の理法を探究したり、遺傳と境遇の原則を立證したりするは、即ち分析研究の科學的態度であつて、花月の現象を觀察して天造の妙手を稱へ、世態人情の様々を目撃し

て深き味を味到し、幽々の意を直観するは、即ち綜合感得の文學的態度である。而してこれを取扱ふ者は情意を没して純客觀的な討究をなすのでないから、自づと作者の生活を通じて來なければならぬ。換言すると題材である自然も人生も、共に一度は作者の生活となつてしまはねばならぬ。歌はないではゐられぬといふ美しい自然の光景は、純粹な客觀的存在ではなくして、作者が深く味ひ得た一幅の生活内容になつてゐるのである。そのまゝ、暗に葬るに忍びないといふ面白い人事のいきさつは、冷たい科學的研究の對象ではなくて、作者自ら經驗して掬めども盡きぬ芳味に徹した人間生活の一斷片である。かうして作者の生活に取込まれた萬象をそのまゝの姿で文章に再現しようとするのが即ち文學の態度である。「この文學獨自の境地は、綴方生活に取りて矛盾なく、寧ろかうした態度に立つことによつて一層生氣あらしめられるものである。否この態度の上に立つべく文學獨自の境地を多分に包含してゐるものと思ふ。最後に生活(題材)觀照の態度——物の觀方——を端的に感激の語で結びたい。綴ることも第一に綴るべき事象を捉へるといふことによつて成り立つものであり、それは認識の作用による。この認識は心と物との接觸、融合、燃燒の心境を物語るものであり、當然感激の結果によると言はねばならぬ。即ち材料は感激によつて燃燒されたものといへる。寫實に陥るは感激せぬものを捉へるからである。感激せぬものとはもろ／＼作者が感激性を持たぬからであり、感激性を持たぬとは十分なる理解、觀照と生命の投入を遂げ得ないことである。物に感激するとはその

事物事象の情を見出すことで、感激とは物の情を觀、それに一の悟を感ずる心的作用である。作者の心を引き出すだけの力を有たぬ物を觀た場合、その物は何等心に象映しない。作者の心を引き出すものがあるとは、自他の抱擁交關、接觸交融の相で觀照の極めて鮮明な現象である。自己を凝視するといふ心的作用が成り立たねば制作心は起らない。制作のよつて起る源は實にこの感激性で、感激に乏しい、觀照の不鮮明なる場合は、物を自他別視するだけの第二次的の空間態度に終ると言はねばならぬ。物を實在的(存在的、空間的)に見る時は、その物にその物の情は見出し得ない。即ち感激の生活は成り立たぬのである。感激は心の生活の情化された場合で、知化され、意志化(實踐化)された心の生活と不即不離の相に於て、實在としての人間の價值創造に參與するものである。

四、文 体

綴る力、即ち創作力は單なる表現形式や、技巧の修練では陶冶されるものでないことは明かだ。然し題材は捉へた、これを觀照する態度も出來た。その上その自己の内容を創造的力の發達によつて形式化即ち文字文章にあらはして、はじめて創作となり作品となる。そこに於て作者の味ひ得た生の記念像が出来る。故にたゞの備忘録でもなく、報告文でもなく、實用文でもなく、生活再現でもないから、わかりさへすれば表現形式はごうでもよいといふわけにはいかぬ。表現形式即ち文体もまた重きをなす。然しながら表現には獨自の内容があり、形式はそれ自らの統一ある發展である。故に劃一さ

れるべき性質のものでない。

(1)、韻文について——童謡、和歌、俳句等言葉の排列とか音律とかを考慮するもの——

詩は内容からいへば、感情的であり、空想的であり、主観的である、その思想なり感情なりが實際上の行爲となつてあらはれやうとするもの及び、主智的、説明的、客観的のものは詩であり得ない。即ち詩の本質として詠嘆すべき感情を盛るものでなければならぬ。而してその形式なる韻文とは如何なるものか。韻文の特質は高調せる感情を表象する所に起源が存する。即ち語の調子乃至音律にある。詩の内容が吾人の感情の律動であるが故に、それを表象する言語も當然律動的であるべき筈である。故に我が國の詩は一定の律動形式（詩型）をとつて進んだ。が今やその形式をかりて諸種の内容が盛られ、或はまた表象的言語に何等の律動なく、形式は自由に、従つて内容に感情の律動なきに至つた。かくて童謡なるものもその正体の如何なるものなるか判明せず、従つて評價態度人によつて異り、童謡の前途悲しむべき状態を招来せんとしてゐる。この韻文取扱に關しては、豊醇な内容ある所、作者生命の律動を見、これを生かし盛る所の言葉ありて詩となるものなれば、内容は詩であり、形式に音律を持つものを採る。故にリズムミカルなものとなるが當然であるが、外型的な傳統的な調子乃至音律にのみ囚はれることはよくない。さればこれが指導については、子供の發達を考慮して韻文をつくることを隨意とする。

(2)、普通文について——叙事、叙情、叙景、説明、評論等——

描寫は生命を具体化することであり、具体を特殊化することであり、更に具体を單純化することによる極致がある。人物の描寫はその特徴をうまく掴むことにより、會話に方言をとりこむ時は、如何なる部分をとつてその地方の特色を如何なる程度に利用するかにより、自然の描寫は作者が自然の暖かいふところに入つてその生命を見出すことにより、擬人の描寫は主観が光と熱を以て題材を偶像化せしめないことにより、生命を具体化し得られ、そこに特殊化、單純化への進境が開かれる。尙叙事に、時・所・人・事件の四要素、叙情に、偽なき感情の告白、叙景に、うつすべき景色の見立が具体化の主なることはいふまでもないが、いづれも價值感によつて題材が選擇されねばならぬ。

論説は概念的であり抽象的であり、共に精密な正しい觀察、それを構成統一することが必要である。尙説明は自己の思考作用を誤りなく傳へるものなれば、平易な確かな言葉をつかふべく、評論（議論）は意見が加はり主張を述べるものなれば、明確なる判断より出發すべきである。

然し實際に於て、自己の生活表現である綴方に、叙事・叙情・叙景・説明・評論等その純粹なものがあらはれる場合は少く、特に叙事・叙情・叙景等に相交錯することが多い。故に指導は一文のその條に即して行はれるものである。

(3)、その他——書簡文・日記文——

一定の讀者を豫想して行はれる書簡文は、對者及び用件を考慮して認められるべきであり、それが指導は自由作にあらはれる時、機會をつくつてやる時、また文話として行はれる。假作せしめることは價値に乏しい。日記文は一日といふ時間單元を目標とし、文の簡潔を尙ぶものであるが繼續する所にその意義がある。欲をいへば單に備忘の爲のみでなく、事件の記載より漸次内省的表現への重視、綴文の素材即ち文材をこゝにも求める等に及ぼしたい。

五、表現指導の諸相

(1)、綴る前

先づ診察するに、取材乃至題材選擇に苦しむは、生活内容の貧しい者、綴方なるものの正体を掴み得ない者である。また表現欲に燃えながら筆とつては、滯滞して生みの惱を味ふ者は、全体的氣分に支配せられて内面的な要素を掴んでゐないことに起因する。これに對して如何に投藥するか。内容を深めるにあり。内に貧しい者、如何に表現すべきかを悟り得ない者、何を表現し得られよう。内容を深めるとは、常に經驗を通して自己を見つめる態度を養ひ、價値ある自己より深き自己を創造して行くことである。これが指導は滋養を與へることであり、放射口を開くことである。滋養を與へるとは環境への開眼である。家庭生活に、學校生活に、自然界に、朋友に、社會状態に深い注意を拂ひ内省し、讀むこと、聞くことの多を求め、以て生活内容の豊富を期す。内に芽ぐめども大石の下の上も

ぎは芽を出すべき所を知らない。放射口がないのである。放射口を與へるとは文例を示すことである。温室の植物は暗室のそれと生長を異にする。故にその文例は一個人の趣味性癖に偏せず各方面から、發達程度に應じて與へられるべきである。以て綴り方の正体、表現への階梯をうかがはしめる。かくて内生活はそれによつて刺激され、暗示を得て、葬られた過去の思索や經驗、萌さんとして萌し得なかつた思想感情、潜在してゐる意識、情緒が目覺され、統制され、創造活動、放射活動を開始する。

(2)、綴る時

着想——素材が作者の生活に同化された時、そこに素材は題材と化し精神内容となる。故に題材はこれを外に求むべきものでなく内に見出すべきものである。自分の生活を深くみつむる時、心の奥に自ら湧き出るものこそ眞の題材である。即ち自己の裡に價値を發見せしめねばならぬ。素材を如何なる生活様式に於て、如何に把握したら價値あるかを、面白いやうに、新しみのあるやうに、深みのあるやうに、硬化しないやうにと具体的に指導すべきである。

構想——着想された想即ち主想を生かす爲に、必然的偶然的從想を如何に塩梅するか、換言すると生けるがまゝに取出し、または實感印象を如實にあらはす爲に、題材を如何に掴むか、如何にまとめるかを指導すべきである。

記述——着想、構想の連続作用であり、それは考へる力を高めることである。眞實の生活、眞實の感じ、事實そのまゝ、感情そのまゝを型の模倣に陥ることなく自身の言葉で、妥當の語にてあらはす工夫をさす。文題は特に入念に、具体的（求心的）に、包括的に文章の生命を宿し力あるものを命名するやう指導すべきである。

推敲——言葉は生活本然の姿を象徴したものであり、やがて生命躍進のあるがまゝの姿である。生命、生活、言葉（文章）は一元的な實在である。故に推敲は、作者自らの自己生長のための自己改造であらねばならぬ。されば自ら深く沈潜し、内省して、生命と表現の間に生じたひびみ即ち推敲の箇所を自識せしめ、内容即ち生活第一、形式即ち表現第二として進ませなくてはならぬ。

(3)、綴つて後

作品に對して第一になされるは閱讀である。閱讀は各個人の生活内容、表現形式の缺陷、長所を知り、以て學級の生活内容、表現形式の傾向を察知し、また學級全般に示すべき鑑賞文、批正文の材料を見出し、そこに指導の具体方案を樹立する。第二に推敲箇所の指摘、評点及び批評の記入をなす。

兒童に對しては個人的及び學級全般に分れる。個人に對する主なるものは、作者、指導者の共同推敲即ち眼前指導である。それは表現をつゝいて反省内省さす。表現をよくする爲でない。生活を深化、充實、整正さすにある。ある批評乃至推奨の言葉と共に作品の返付を受けた兒童は、一覽表に記

入して生活進展の跡を顧み、更に進展の爲の表現活動へと向ふ。學級全般になすものには、批評・批評・鑑賞・朗讀・文話等を探る。

批評——共同にて批評推敲する。

批評——對象について正しく理解すること及び價值判断をすることであるが、常に作者の長所を發見してはその前に躓いて啓示を受け、表現上の悩みを見出しては、自らの悩としてこれを生かす工夫を凝らすことを忘れてはならぬ。

鑑賞——作品が表現するものを正しく受入れる。その中に自身の靈を見出すことが出来れば、ありのままの理解に止らずして一層深い味を發見するやうになる。而して自身の魂を作品の中に發見するだけでなく、自己の欲求する所のものが目覺され、把握しやうとして得なかつたものが形を與へられ、未知の世界が續々として眼前に展開され、憧憬の境地が生々として面前に現示されて来る。こゝに鑑賞者の生長があり、完成への努力がある。この自己生長と自己完成とは鑑賞から得られる最貴重の賜である。

朗讀——第二義的の鑑賞である。廣く多く受胎さすといふ立場より、鑑賞文以外の價值ありと認めるものを朗讀せしめ、主として聞くことにより鑑賞せしめる。

文話——自他の作品を通して具体的に着想・構想・記述・文題命名・推敲の仕方を説き、文の見方、

即ち批評・鑑賞の仕方を知らず。古來の創作苦心談・作家の生活・現代の創作的傾向等の例話を試みる。文の種類・傾向・文体・口語・文語・方言等と綴方との關係、文の價值、内容的價值と形式的價值、素材即ち生活（題材）的價值等について、その他綴文能力を高める爲の一般的修養について具体的に説く。

六、各學年の實際指導

實際指導については尙幾多の問題、即ち本校兒童の綴方生活の實際及び將來の考究、その上に立つた指導要項及び程度の推定、必要にして豊富な鑑賞、批評の材料即ち文例の聚集選擇、郷土歳事記の編成等が残されてをり、これらを織りなした指導体系が生れねばならぬ。故に實際指導は別冊「各學年綴方指導要項」に譲る。

書 方

一、書方教育の基底

普通に書といふは水筆の墨蹟筆致を指すのである。かゝる水筆によつて書かれたる枯淡幽遠なる墨蹟を懐しむ東洋文化特有の價值意識は、矢張之を藝術的心情とでも謂はなければならぬ趣のものではあるまいか。藝術的活動は時間並びに空間の表現形式をかりて行はるゝが、書はその如何なる表現形

式の部屬に配して眺めらるゝか。矢張空間形式を以てなさるゝものといふべきであらうか。かゝる美學上の論究は今暫く之を置くとしても、歴史的社會的個体乃至人格体としての吾々に、墨蹟筆致に對する藝術的感銘の如きを感じるは、單なる好奇價值に動くが如きことでなく、如何とも仕難き美意識の問題として認めねばならぬ心的現象の事實である。

この美的表現としての墨蹟筆致——所謂水筆によりて書かれたる藝術的文字——は吾等の尊き祖先が、その實生活に於ける書字——文章による想情の表現に必要な文字の書寫——より必然的に生み出したるものにして美的要求の發展深化して到れるものである。かくの如く墨蹟筆致即ち藝術的文字乃至書の幽趣は、かゝる美的要求の到れるもの、即ち發展深化の至境にして、技術、巧拙を超越したる趣ともいふべきものが其の生命であるが故に洗練せられたる美意識に於いてのみその眞趣を覗ひ得るものゝやうである。勿論、詩歌、音樂、美術等もかゝる趣向を有するものならんが、有限的相對的立場に於ける吾等の意識上の問題としては、書はより高き我——所謂素養に待つべきこと大にして、直ちに以て之が味得、鑑賞を可能ならしめざるものゝ様である。之、今日に於ける美學上の問題としても、純粹美術論の對象としても取扱はれなかつた所以であらう。

扱かゝる超脫的な趣を有する藝術的書方——詳はしくは書の創作乃至鑑賞、即ち狹義の書方——が、極めて幼稚なる兒童の書方——延いては小學校に於ける書方——に對して如何なる意義を有する

か。又教育本来の意義並びに兒童の自然的發達の状態に鑑みて如何なる價值及び調和点を有するが。之書方教育上の最も重要な問題である。

翻つて吾等の祖先がかゝる藝術的の文字乃至書、を生みなしたるその始源並びに吾等が日常の生活に於ける事實を以てしても如何に文字の書寫——書字即ち廣義の書方——の必要にして人生に不可欠であるかを痛感するは、今更之を贅するを要せぬところであるが、かゝる廣義の書方とは、言ふ迄もなく吾人の思想感情乃至その他必要な事項を、文章を以て表現或は記載せんとする爲に文字を書き寫すことに外ならぬ。而して表はさんとする想情は直頭明確なると共に、書字の敏速即ち、タイムの經濟を必要とするのみならず、歴史的社會的制約による文字の整理、明確を要求する、共に、美的要求としての美麗、氣品等を要求されるが故に、日常の生活に必要な書字は正確、美麗、敏速をその要件とするものである。而してこは普通教育乃至國民教育上よりは勿論、兒童現在の生活たる學習上よりも所謂字の稽古として教科の中に置かねばならぬものである。

さて前述するところによれば吾人は藝術的書乃至書方と日常生活に必要な實用的技能としての書方との兩相を、その始源に於いては等しく人間意思の要求より出でたる文化事象として眺め、而して後その分化深進の相に於いては兩者の本質的特異性を論じたのである。今これをシュンランガーの所謂審美的價值及び經濟的價值の如くに定位せしめ、かくて教育上兩者の教育的價值を論せんとする

ものである。

二、書方教育の目的

教育に於ける藝術的陶冶の問題は今更之を論ずべくもないが、書の藝術的價值が人生に相即したるものなる以上、教育上亦必然的にその價值を認めらるべきであるが、その陶冶價值の問題に至りては再駁の必要があらう。

さて藝術的立場に於ける書方は、之を東洋の傳統的文化としての水筆による書に於てのみその眞價を視ひ得らるゝのであつて、その他の硬筆、繪筆等による制作は所謂工藝美術とでも謂ふべく、水筆の走る所のみ獨り書の興趣を觀得し得るのではあるまいか。

勿論教育上美術工藝等の藝術的活動を掬み入るべきは勿論なれど、それは又手工、圖書等に於いてなされるべきものであつて、藝術的立場に於ける書方としては當然水筆によるものを以てなすべきであらう。然しながら水筆による書方は兒童の自然的發達の過程に鑑みて考究するならば、その階程に適應せざる至難の事である。書の趣を觀得することも、筆意筆法を會得することも、連續的發展の相に於いてはその意義を認め得べきものとはいへ、兒童の心的要求及び自然的發達の階程よりすれば、かゝるは彼等の第一次的直接的の要求にあらざるのみか、筆意筆法等の機微よく之をなし得ざるにはあらざるか。殊に幼童の筋肉運動も幼稚にして機微細小なる運動に對する統制不可能なるのみならず、心

的方面に於いても筆意筆法等の理解、會得も至難なるに、水平垂直、上下左右兩様の手指の運動を要件としたる水筆書方を教課し、その練習を強要するは、學習經濟上の甚だしき不得策は之を許容するも、却つて書の本質、教育の本義に背馳するものではあるまいか。

然しながら書の美的價値は嚴然として之を認むる以上、吾人は實生活に必要な所謂實用的價値と相待つて教育上その地位を認めざるを得ない。故に水筆による書方は兒童の自然的發達を考慮し省察して、その教育的價値を認むべきであり、その價値目的を究明すべきである。

翻つて實用的見地に立つ書方を考ふるに、こは凡ての文化に流布してそれを幫助し、日常の生活に必要な不可欠なるが故に教育上又重要な意義を有するは既述の如く、その價値目的は自ら明らかであらう。而してこは硬筆（鉛筆、ペン、鉄筆、骨筆）及び毛筆を以てせられ、就中硬筆は水平、左右の運動のみにて足り、所持携帯にも簡便、使用處理も單純、技能の習練も容易等、幾多實用上の長所あるが故に、廣く且有効に行はるゝは到底毛筆の比にあらず。且又兒童の學習にも直接必要にして、その能率に關係あるは多大であり、その自然的發達の程度より見るも甚だしき不合理を認めない。勿論毛筆による處用も多々ありて、吾が東洋文化特有の興趣を覺ゆること切なれど、こは所謂實用の中に藝術的色彩濃かに織りなせる複雑なる状態にあるのである。

然しながら藝術對實用、延いては毛筆對硬筆の對立の如きは單なる抽象的蓋然的論議にして、かゝ

る概念的考覈以外に不可浸なる人間心情の問題もあり、且又歴史的傳統的意味に於ける意義も存し、無用の用ともいふべき意とも認むべきものなるのみならず、人間的趣味の問題、精神的要求等も加はりて、人生の實相としては實用、趣味全く正反對の立場に立つべきものにもあらず、即ち藝術なるものが人生を離れてあるものでもなく、實用が人生の全面にもあらず、日常の生活に藝術を求めんとするものが人生の真相なる以上、前述の兩者は人生への道として統一さるべきものであつて、比較的、相對的の制約を受けてのみその特質を認め得べきであらう。

かくて吾校に於ける書方教育の目的は、

「書方は日常の生活に必要な文字を正確、美麗、敏速に書寫し得るの技能に習熟せしむると共に、書に對する藝術的素養の基礎を養ひ」

と約説し、更に書方に於ける副次的形式的なる精神上の陶冶價値をも認めて、

「兼ねて綿密、蕭洒、等の良習を得しむると共に徳性の涵養、品性の向上に資す」

と附記する所以である。

三、書方教育の題材

毛筆硬筆共にその特異性を論じて、書方上に於けるその本質的相違を述べ、その藝術的及び實用的價値を究めて、教育上に於ける陶冶價値を辨別し、更に進みては兒童の自然的發達の階程に鑑みて實

際指導の様相を闡明せんとする時、先づ對面するは教育上取つて以て行はんとする題材である。

硬筆書方は之を實用的價値の上に於て考察するが故に、主として筆記体の細字を取るべく、その系列（例せば片かな、簡易なる漢字、平かな、一般の漢字等の系列）及び字形の大小、字体等は國語讀本に準據せば略解決を得。本校にては國語讀本に準據したる題材の範例を制定し、以てその指導に便す。而して鉛筆字ペン字を中心とし、その他は之をその必要に應じて加味す。

毛筆は藝術的立場に於いては大中字及び楷、行、草の三書体を以てし、専ら國語書方手本に準據して、氣品、勇滾、溫雅なる書法を眼目とす。その實用的方面に於ては細字を以てその主となし、行書を本体として、正確、美麗、敏速を期すべきなれどその練習の過程としては大中字の練習を輕んぜず、細字の基礎的指導を行ふものとす。

故にそれ等題材を表示すれば



即ち書方の本質的立場より分類すれば

(1)、毛筆書方

(2)、硬筆書方（鉛筆ペン字書方）
書体よりすれば

(1)、毛筆

イ、楷書体

ロ、行書体

ハ、草書体

(2)、硬筆

筆記体

字形の大小よりすれば、大、中、小字となるのである。

更に日常の生活に必要な書式、書翰文の認め方等も本科の題材として忘るべからざるものである。

四、書方教育の方法

吾人は書の本義並びに書方教育の目的を究明し、更に教育上取つて以て行ふべき題材を論じたのであるが、その實際指導の方法は、書法の眞義及び當然なる條件としての兒童の自然的發達の階程を考

慮せざるべからず。

かくて鉛筆練習は之を最初級より課し、最初は稍大きく片假名及び平易なる漢字、進みては平假名、一般の漢字と國語讀本の順序、系列に従ひて模書、臨書せしめ、正確をその最初の要件とし順次敏速美麗なる書方を練習せしむ。高學年に到りてはペン字練習をも加へ、行書体を主とし、その他必要なる書式にも渡らしむ。

毛筆練習は之を最初級より課せず、稍後れて——尋常科三四年——之を課し、専ら國語書方手本の系列に従ひて書法の練習をなさしめ、最初は腕法、鈎法、筆意、筆法等の指導に意を用ひて分析的に字劃の練習をなし、進みては間架、結構にも及び氣品幽雅なる書風を會得せしむべきである。而してその最も至難なるは筆意、筆法の機微なるを以て、最初に於いては先づ模書によりて主として筆法の技を練らしめ、大字を以てその練習に充つべきである。故に本校に於いては尋常科三、四年に書方下敷手本を使用せしめ、練習に便ならしむ。

之を要するに各學年に於ける課程表を以て表示せば左の如し。

學年	要目		
	鉛筆練習	ペン練習	毛筆練習
	每週	教授	時數

尋一、二	二、〇〇	—	—
尋三、四	一、〇〇	—	二、〇〇
尋五、六	—	〇、五〇	一、五〇
高等科	—	〇、二五	〇、七五

而して尋一二の兒童には毛筆練習を課さず、専ら鉛筆による練習を以てし、尋一國語書方手本は尋三初期に於ける基本字劃練習に使用せしめ、尋二國語書方手本は尋五に於ける平假名練習及び大字練習に用ひしむ。

左に各學年教授方法の要点をあくれば

(1)、尋常科一、二學年

イ、姿勢、腕法、鈎法の正確なる基礎的指導。

ロ、鉛筆のけづり方、使用法。

ハ、正確なる書方、美麗なる文字。

(2)、尋常科三、四學年

鉛筆練習

イ、正しく美しく、早く。

ロ、前期よりは細い字を書くこと。

毛筆練習

イ、楷書大字の練習に於いて分析的に字劃の練習をなし基本字劃の筆法を會得せしむ。

ロ、筆意、筆法の會得を補助するがために、下敷手本を使用せしむ。

ハ、毛筆に於ける腕法、鈎法等を充分に會得せしむ。

ニ、筆の保存法、墨、硯の使用法、手本の置き方見方等にも留意す。

(3)、尋常科第五、六學年 高等科

ペン字練習

イ、ペンの持ち方、使用法。

ロ、ペン字の書方につきて。

ハ、美しく、正しく書くこと、更に進みては早く。

毛筆練習

イ、中細字及び行草書体を加ふ、ことに行書の基礎を會得せしむ。

ロ、専ら臨書をなさしめ、時々應用書方をなさしむ。

ハ、細字には小筆を使用せしむ。

ニ、書式、手紙文の形式等をも課す。

而して毛筆練習に於ける基本字劃は永字八法即ち、側、勒、弩、趯、策、掠、啄、磔及びその變化の數十法なればその練習には筆意筆法の機微に渡りて指導を忘れず充分徹底を期すべきである。

腕法は懸腕、提腕、枕腕の三つなるが字形によりて適當に之をなさしめ、鈎法は單鈎雙鈎、各所によりて用ひしむべし。

然れども指導の方法並びに要所に至りては教師の技能識見をその第一要件とするのみならず、加ふるに周到綿密なる指導上の研究を待つべきなれば、先づ自らの技を練り、法を會得し、以て之に當るべきであり、かくしてこそ方法自ら生れ出するものなれば徒らなる方法上の細案は之を省き概説に止むるものである。

算 術 科

一、緒 言

算術は數學の一分科にして、日常生活に於ける數の必要より生れたる實用數學なれど分科以前の數學乃至最初級の數學、即ち一般數學の基礎的分科にしてそれ自身特殊の職能と方法を有するのみなら

す、一般數學の基礎的意義を存するものである。

然しながら算術と雖も數に關する學にして、その本質的基礎は之を一般數學の上に置くものなるが故に、小學校に於いて取扱ふところのものはむしろ之を兒童數學とでもいふべく、その教育的考究は之を一般數學教育の本源に求むべきものであらう。

由來數學は純論理的な抽象的先驗科學であつて、その對象とするところのものは超經驗的な抽象概念であり、數學的認識は自然に於いて其の内容に適應する對象ありや否やに對しては全々没交渉である。かゝる抽象的論理的な先驗科學たる數學が一般兒童の教育上如何なる地位に立つべきであらうか。

且又推理力の陶冶を施す点に於いて形式的陶冶の祖城とも稱すべき數學が、古い意味での形式的陶冶説が倒れた今日、教育上如何なる地位を占むべきであらうか。

思ふに教育は兒童の生活に相即具體せるものであり、兒童の立場から物を考へ兒童の心理的發展にさはさすものでなければならぬ。それ故に完成された數學上から見て論理的なものが、教育上直ちに以て合理的なことではない。否抽象的な法則や徒らな難問を持ち來つて之が理解を強要し、如何にして此等の抽象概念等が具體的な事實の間から生れて來たか、何故に斯る概念を必要とするかを述べないのは、今日に於ける公理主義の數學から見れば勿論何等の欠陥があるわけではないけれども、兒童

に取つては甚だしい非論理的な事といはねばならぬ。

今數學發達史の跡に鑑みるに、數學は他の總べての科學と同様に日常生活の必要より日常の經驗を基として生れた。而して次に此等の結果を綜合し抽象し一般化して漸く科學としての數學を造り上げ、其の内容を豊富にした。更に進みては之に批判を加へ嚴密化し論理化して所謂今日の公理主義の數學を組織するに到つたのである。斯に數學發達の歴史は兒童少年の數學精神の伸び行く道を暗示し數學教育上その進むべき道を示教せるものではあるまいか。

二、一般數學教育の目的

さて數學教育の目的は之を何處に求むべきか。それは廣く且つ深く科學自身の根底に觸れたものでなければならぬ。

人は數學の美を鑑賞するのではなく、實生活に於いて數學することを目的とするのである。故に吾人は今日に於ける純論理的な先驗科學たる數學を特に他の經驗科學から區別せず、却つてその根源に遡り一般科學教育に共通な目的たる科學的精神の開発を以て、數學教育の目的とする所以である。

否、今一步を進めて認識論的考察によるも、經驗科學が個人的近似的な箇々の經驗的事實から出發して之を一般化し普遍化して、遂に普遍的法則に達する迄にはその裏に數學的認識が潜んで居り、數學なくしては自然科學が成立し得ないことを知るのである。

この一般化、法則化の精神こそ經驗科學に於いても數學に於いても、科學全般に共通なる科學的精神である。而して此の精神こそ眞に數學の精神ではあるまいか。この一般化、法則化を最も極端に迄徹底させた所に公理主義の數學が生れた。それは完成された最後の形式であつて、その過程として創造されつゝ展開されつゝある所の科學的精神こそ少年兒童への數學教育の精神でなければならぬ。

然らば數學教育内容の核心は之を何處に求むべきか。それは勿論數學上に於いて科學的精神の中堅となるもので無ければならぬ。それは函數の觀念である。

少しく注意すれば函數觀念が數學は勿論、一般科學を通じて如何に廣く行はれ、且つ如何に深く一般事象の根底に觸れて居るかを認識し得るであらう。函數の觀念は吾々の日常生活と共に有るのであつて、常識を整頓するものこそ科學的精神であり、數學上そこに使用される根本思想こそ函數觀念である。

それ故數學教育の中心として函數觀念を採用することは、教材として最も廣く人生と關係あるものを探ることとなるのみならず、數學は生活を生活することとなり、數學を學ぶことが即ち人生を經驗することになる。故に函數觀念による教育は決して古い意味での形式的陶冶を施すことではなく、經驗に伴へる内容、人生に欠くべからざる科學の方法、實用的要素の陶冶である。

三、本校に於ける算術科教育の方針

(1)、算術教育の目的

吾人は前節考覈せしところの一般數學教育の目的に立ちて、單に數學の一分科たるに留らず、そのすべての分科に對する基礎的なる學にして、實生活に於ける數の必要並びにその生活に於ける事物の數量的處理、解決の要求より生れたる最初級の實用數學——主として算術——を素材としたる小學校に於ける算術科教育の目的を究明せんとするものである。

然しながら今日に於ける「算術」なるもの、意義乃至内容とするところは甚だしく複雑なるのみならず、その範圍も明かならず、或は計算術の概念を以てするあり、或は論理的立場に於いて其の附號、法則にその本質的意義を認めんとするありと雖も、約言すれば算術は「數の關係」に關する學にして、「凡そすべての場合その本質的課題は所與の數から他の數をそれ等の間に存立する、ある既知の數關係に依つて見出すこと」とするが、その最も適當なるものではあるまいか。

かくて本校に於ける算術教育の目的は

「兒童の數量生活に於ける彼自らの擴充發展」

にありと考へる。而して兒童の數量生活を擴充發展せしむることは

「事物に對して之を數量的に處理せんとするの能を啓培する」

ことにある。此處に言ふ事物數量とは時間的、空間的、並びに評價的數量の意にして、かゝる事物

數量を處理せんとするには先づ

「事物を數量的に認知して事物數量相互間の關係を決定し、所與の數の間に存立する既知の數關係をたどつて生活に於ける事物の數量問題を解決する」
ことである。故にその内容は

「兒童の數觀念を擴充せしめ、事物を數量的に測る單位制及びその測定法を會得せしめ、事物相互間に於ける自然的及び人爲的關係を理解せしめ、生活に於ける數量問題の解法、並びにその解決に必要な算法（暗算、筆算、珠算）に習熟せしむる」
ことである。

而してかゝる事物の數量的處理、解決こそは實生活に於いて數學することであり、その生活にはかの函數觀念がその根本思想となつてあり、かく數學することに於いてのみ函數觀念そのもの、發展と共に科學的精神を養ひ得る所以と信するものである。

かくて小學校令施行規則第四條

「算術ハ日常ノ計算ニ習熟セシメ、生活上必須ナル知識ヲ與ヘ、兼ネテ思考ヲ正確ナラシムルヲ以テ要旨トス」

の眞面目を視ひ得るものである。

(2) 算術教育の方法

然らば算術教育上如何にして科學的精神を學び始めしむべきか。それは先づ直接に兒童の生活から學ばしむべきである。兒童の心理的發展に徹し、數學發達の跡に鑑み、教育上探るべき最上の道である。それ故に教師は兒童に對して熱心な協力者となりつゝ、

イ、數觀念を擴充せしむ

◆命數法と記數法

◆整數、小數、分數、負數

◆倍數、約數

◆量を數にて表はすこと

ロ、數量單位制を認知せしむ

◆箇物

◆貨幣

◆度

◆面積

◆量、体積

◆ 衡・求積

◆ 時間

◆ 温度

◆ 経緯度

◆ 弧度角度

ハ、測定法を會得（實驗實測法）せしむ

◆ 箇物數量の數へ方

◆ 連續量の測り方表はし方

ニ、數量關係の理解を計る

◆ 自然的關係（幾何型体、自然科学的方法）

◆ 人為的關係（習慣、規約、法定等）

ホ、數量問題構成の態度を養ふ

◆ 生活の數量化による構成

◆ 實驗實測より構成

ヘ、數量問題解決の能を得しむ

◆ 既知の數關係をたどつて思考推理

◆ 算法の發見

◆ 作圖解法

◆ 實驗實測による解決

◆ 檢証

ト、算法の理解習熟及び應用を計る

◆ 實物計算、暗算、筆算、珠算

◆ 整数、小數、分數、負數の四則算法

◆ 數量問題解決への應用

各項の指導に當り、その指導の方法は

イ、遊戯より學習へ

ロ、具体より抽象へ

ハ、實驗實測より發見へ

ニ、歸納より演繹へ

ホ、近似より正確へ

へ、個々の観察より法則へ

と漸次兒童の心理的階程に應じて進んで行くべきであり、自然に對する兒童の驚異の心を展開せしむべきである。其の間に兒童は自ら自身の數學を抽象する様になつて來る。

要するに假空的な、或は形式的陶冶說に基いた題材を棄て、現代の社會に生命あり、但兒童の生活に密接なる題材を取り、人間教育の上から算術を學ばしむべきである。人間教育の外に數學乃至算術の教育があることは少くとも普通教育に於いては許さるべき事ではなく、人間教育の目的が人間性の啓發にあり、道德、宗教、科學、藝術、經濟等を創造發展せしめて行かふとする内部からの自發性を培ふ所以の道である以上、小學校に於ける算術科の教育も亦かゝる教育の立場に於いてのみその眞價を實現し得べきものであらう。

國定珠算書準據

珠算教授系統案

珠算教授課程表

學年	學期	加減	乘法	除法	其他
尋	1	整數 十進法速算			算盤各部の名稱、算盤の位置、其他事項
	2	整數 十進法速算			
五	3	整數 十進法速算	十進法速算		加減の復習
	1	整數 十進法速算	十進法速算		全上
六	2	整數 十進法速算	十進法速算	十進法速算	加減の復習
	3	整數 十進法速算	十進法速算	十進法速算	全上
	1	整數 十進法速算	十進法速算	十進法速算	全上
高	2	整數 十進法速算	十進法速算	十進法速算	全上
	3	復習	復習	習	聽暗算、看取算
高	二	復習	復習	習	傳票算、比例、面積、體積、歩合、租稅、貯金、保險、單利、複利の問題計算

<p>尋五 第一學期 (十五時)</p>	<p>一、算盤各部の名稱及準備事項 二、數の置き方 三、簡易なる加減 四、五珠の分解を要せぬ加減 (1)、各桁とも4以下の數を加減するもの (2)、各桁とも5以下の數を加減するもの (3)、加減する數に欠位あるもの 五、或桁の和5となる加法及び其逆の減法 六、五珠の分解を要する加減 七、復習 其一 八、或桁の和10となる加法及び其逆の減法 九、或桁の和11以上となる加法及び其逆の減法 (1)、五珠を動かさぬもの (2)、五珠を動かせども其分解を要せぬもの</p>
------------------------------	--

<p>尋五 第二學期 (十五時)</p>	<p>(3)、五珠の分解を要するもの 一〇、加減の特別なるもの 一一、復習 其の二 一、小數の置き方 二、小數の加減 三、復習 其の三 四、速算の練習 一、基數を掛けること (1)、被乘數が基數なる場合 (2)、被乘數が二位の數なる場合 (3)、被乘數が三位以上の數なる場合 二、復習其 四</p>
<p>尋六</p>	<p>一、二位の整數を掛けること</p>

尋五
第三學期
(十時)
加減練習を忘るべからず

<p>第一學期 (十五時)</p> <p>加減の練習を 忘るべからず</p>	
<p>第一學期 (十五時)</p> <p>加減の練習を 忘るべからず</p>	<p>第一學期 (十五時)</p> <p>加減の練習を 忘るべからず</p> <p>(1)、乗数が10の位のみの數なる場合 (2)、被乗数が基數なる場合 (3)、被乗数が二位以上の數なる場合 (4)、特別なる場合 二、三位の整數を掛くこと (1)、乗數の尾一位又は二位が欠けたる場合 (2)、一般なる場合 三、四位以上の整數を掛くこと 四、帶小數を掛くこと 五、小數を掛くこと 六、復習 其五</p>
<p>第二學期 (十五時)</p>	<p>第二學期 (十五時)</p> <p>加減の練習を 忘るべからず</p> <p>一、基數にて割ること (1)、何進何十と言ふ割聲を用ゆるもの (2)、添作及び倍作と言ふ割聲を用ゆるもの</p>

<p>第二學期 (十五時)</p> <p>加減の練習を 忘るべからず</p>	
<p>第二學期 (十五時)</p> <p>加減の練習を 忘るべからず</p> <p>一、基數にて割る練習 (1)、2にて割る場合 (2)、3にて割る場合 (3)、4にて…… (4)、5にて…… (5)、6にて…… (6)、7にて…… (7)、8にて…… (8)、9にて…… 二、基數にて割ること(割り切れぬ場合)</p>	<p>第二學期 (十五時)</p> <p>加減の練習を 忘るべからず</p> <p>二、復習 其の六 (3)、何十何と言ふ割聲を用ゆるもの (4)、下加と言ふ割聲を用ゆるもの (5)、特別なる場合</p>

<p>高 一 第三學期 (十時)</p>	<p>加減乗の練習 を忘るべから ず</p> <p>二、四位以上の整数にて割ること 三、帯小数にて割ること 四、小数にて割ること 五、復習 其の九</p> <p>一、復習 其の十(加減乗除) 聴暗算、看取算、棒寄法、棒引法 簡單なる事實問題の計算をも課す</p>
<p>高 二 (四十時)</p>	<p>一、復習 其の十一(加減乗除) 傳票算</p> <p>二、事實問題計算 比例問題の計算 体積同 面積同 歩合同</p>

<p>高 一 第一學期 (十五時)</p> <p>加減乗の練習 を忘るべから ず</p>	<p>一、二位の整数にて割ること</p> <p>(1)、除数が十の位のみ数なる場合 (2)、被除数は二位商は一位の整数なる場合 (3)、被除数は三位商は一位の整数なる場合 (4)、歸一倍の割聲を用ひ一位の商を得る場合 (5)、作九の割聲を用ひて一位の商を得る場合 (6)、商が二位の整数なる場合 (7)、商が三位以上の整数なる場合 (8)、被乗数が小数なる場合</p> <p>二、復習 其の八</p>
<p>高 一 第二學期 (十五時)</p>	<p>一、三位の整数にて割ること</p> <p>(1)、除数の尾一位又は二位が欠けたる場合 (2)、商が一位の数なる場合 (3)、商が二位以上の数なる場合</p>

租税同
貯金同
保險同
單利同
複利同

國史科

一、本質論

日本歴史は社會的存在としての我等の祖先が、如何なる理想を構成し之を如何に實現したるかを研究せんとするところのもので、その研究の對象を認識し得べき個々の史料を蒐集し批判し適當に解釋し、史料相互の關係を史學構成の原理たる聯結の觀念（時。因果關係。價值關係。）により綜合統一したるものである。

而して普通教育に於ける國史科の對象とする所も科學としての歴史と同様であり、それが材料たる史實は科學的に研究論定されたるものに基礎を置くものなれば、二者の關係は極めて密接なるもので

ある。然し乍らそれは只密接なるだけであつて同一のものではない。即ち科學としての歴史は純然たる科學的見地に立ち、史學それ自身の爲に構成せられて行くものなれど、教科としての國史はあくまで教育的見地に立ち國民教化の爲に構成せられて行かなければならぬ。随つて茲に二者のよつてもつて立つ所の見地の相違がある。

故に科學的歴史の認識に洩れたる史實——社會の發展には關係少けれ共倫理的價值の高き個人の行動の如き——にてもそれが教育上大なる教化力を持つものならば、國史科に於てはそれを採用して十分尊重せなければならぬ。之に反して假令國民生活の發展を理解するに極めて重要な史實にても、それが教育上價值少しと認めらるる時は斷然割愛せらるべきものである。

此の立場の相違は必然に次の相違を生む。即ち國史教育に於ては過去の史實を、現在の生活を充實し將來の理想を完成せしめんが爲に研究するので、なほいはゞ過去の世界を現在及び理想の世界との關聯に於て眺むるのである。所謂歴史の中に理想を國史の中に國民生活の理念を探求するのである。

勿論科學的歴史に於ても、歴史家の個人的觀照や現代的色彩は大いにあるけれども、史家は過去の時代に深き理解を以てその時代を表現せんとするものであるから、その觀照はごうしてもその時代を離れる事が出來難い。従つて歴史家は「後向の豫言者」と言はるゝ如く現在及び將來への展望は許さ

れ難いのである。

斯くの如く倫理的批判を伴ふ教育といふ立場に立つ事と、現代及び將來の觀照的地位に立つ事とは、教科としての國史を學としての歴史より峻別すべき根本觀念である。

二、目的論

國史科の目的は教則に示されてある如く、

「國體ノ大要ヲ知ラシメ、兼テ國民タルノ志操ヲ養フ。」にある。

即ち國家組織の根本的体系、國民生活の核心であり、政治道德の根本たる國體を理解せしめ、この國家生活を進歩發展せしむる爲の道德力即ち志操を陶冶するを以て目的とするものである。

そもそも、國家生活は人間自然の性情に基きて發展し、理性の要求によりて完成せしめられつつあるもので、個人はこの國家形成を通じて自己完成をなし、國家の發展は個人の發展と相即するものである以上、國家がその成員たる國民を教養せんとする國民教育に於て、國家の歴史的發展の蹟を知らしめて國民たるの自覺を喚起せんとすることは、他面個人として、我の生存は建國の當初にありこの自覺即ち歴史的存在の自覺を覺知せしむる事となるのである。

國體とは、言ふまでもなく我が國が國家として自立し、統一し、存續する所以の特質の顯現で、國家存立の基礎たる我が民族精神に由來するものである。而してその特質なものは、久遠なる建國の

當初より存在し、歴史と共にいよいよ昭著に、いよいよ分明に、而してますます精切に發揮展開せらるる。然らば我が國家の特質と見らるるものは何ぞや。

(1)、國の成立が一國一家の道德的國家である。

我が國は大和民族を中心として發達して來たが、皇室はその宗家であり、國家の成立發展の中心であつて、皇室の分家が繁榮結合して國家をなしてゐる。随つて天皇と國民とは内面的關係に於ては家長と家族とで、自然的絶對的な道德的感情によつて結合せられてゐるのであつて、權力の關係による征服被征服の國家、契約による權利義務の國とは著しく異なる倫理的國家である。固より我が國民中には事實として異種の民族を包含せりと雖、中心民族たる大和民族に同化融合せられて、精神的に於ては全く同一である。

(2)、天壤無窮の神勅は建國の精神である。

我が國家組織が家長對家族の暖かき道德的感情によつて結合せられたるところに、主權の存在も、君臣の分も、當爲として明かになつてゐるが、この精神を宣明されたるものは皇祖の神勅である。

(3)、皇統の無窮

義は君臣情は則ち父子といふ至純なる關係にある時、國家の首腦であり中心である所の天皇を擁護することが、國民としての純眞にして當然の情であり、それが又我が國民として國家を存續發展せ

しむる最上の任務であるとの自覚は、歴代天皇の御盛徳と相結んで万世に亘つて皇統の一系を持続したるものである。

(4)、君民一徳

歴代の天皇は皇祖の神勅を体して國家民人を、私有視せらるるところなく「しらす」の語の指示する如く徳治を以て民に臨み、國民も亦最も自然的な内面的要求から發する忠君の至誠を世々捧げ奉つた。更に祖先の意志を繼承し血統を尊重する祖先崇拜の民族性と相俟つて、いよく強く君臣關係を發揮した。

(5)、絶對尊嚴にして不動なる國家

以上述べし如く、全國民と家族的に一体な皇室を中心として國家的團結を固くし、古來幾多の内憂外患も常にこの皇室によつて渾和統一され、不可思議と思はるる程の同化力と信念とを以てよく外來文化を同化し、今日の強き統一をなせるまことに故ありといふべきである。

國史教育に於てはかかる特異なる我が國体の精華をその生成發展の過程に於て史的事實を以て理解せしめ、其の根源たる國民精神の眞髓を体得し以て國家の生存發展を無窮ならしむるの志操を養はんとするものである。

更に考ふべきは、國史の道德教育に對する關與である。國史の成果の中には、國民といふ立場より

離れて個人としての人格陶冶に資すべき事實が極めて多い。かかる道德的事實によつて兒童の徳性を涵養するは歴史教育上極めて重要な視点である。

三、教材論

(1)、歴史教材の教育的意義

小學國史は國民の行動、國民意志の表現として學習者の内容を擴大し、生命に感應する。

國史は已存の事實であり恣まゝに變更解体するを許さざるのみならず、國民意志發動の國史はそれ自身價値の實現である。故にこの價値と權威とを感得せしむる所に國史科の任務がある。然し、國史が已存の事實なるにもせよ、學習者にとつてはその史材は自己統一の資料となり生活經驗となつて、主觀的に意味付けられる。歴史教育は後者の主觀的意義を前者の規範的意義へ指導するにある。

(2)、教材各論

◆神代史—神話

神代史は飽くまで神話として取扱ひ國民教育の資料となすべきものである。

神話は民族精神の創造であり理想であつて建國の精神が明かに現れてゐるものであるから、我が國体の体得。國民志操涵養の第一教材で、國家發展を無限ならしむる根源である。この見方

に立ち、この信念を高める所に教育的意義がある。この意義に覺醒した取扱が今一層必要だと感ずる。

◆政治史 附戦争史

政治は國家理想實現の直接的な形式として、人文中重要な部面である。

政治教育の高唱さるる現時の要求として、政治の理想、その要諦、その影響等特に重要視さるべきである。

政治史の一部面とも見らるる戦争史に對しては相當批難の聲が高い。然しながら戦争史を以て直ちに軍國主義の鼓吹、好戦國民の養成のみが高潮される如く解するは未だ當らない。

更に國際主義なる美名の下に、國力の充實進展を忘却する如きは、輕薄なる近視眼の見解である。

戦争史は動的な兒童の心理に適合し、その戦争記事によつて幾多の道德教訓を與へ、人格や國民性を陶冶するには尤も適當なる材料で、殊に國家非常の秋に發揮せられた祖先の國民的美風には深き感激を與へられる。かゝる意味から戦争史は、指導の着眼点にこそ考慮を要するが、決して排斥すべきものでなく高き見識の上に立つ活用に依つて多方面の陶冶を圖らねばならぬ。

◆經濟史

社會の變遷が經濟的要素によつてのみ成るといふ唯物史觀論者の説が全部當らないとしても、經濟要素が人類社會發達の根本動力の一である以上、國史教育に於て經濟史を加味することは當然といはねばならぬ。亦史實の中にも經濟的見方をするによつて、明確に解釋し得る場合が少くない。兒童の理解し得る程度に於て、或は積極的にその必要を悟らせ、或は消極的に教訓を汲ませて經濟思想の啓培に資すべきである。

◆文化史（社會的、精神的生活史）

國家の使命が自國の隆盛發展を通じて、人類の文化發展への貢獻にあり、現代の文化が過去の文化の持續發展であつてそれが人間生活を完全ならしめんとするものである以上、國史教育に於て文化史を尊重し、各時代の文化の諸相と、其の各文化要素の複雑微妙なる綜合が、如何に人類生活を有意義に又價值あるものたらしめしかを明かにする事は、文化に對する理解と文化創造に對する意欲を陶冶することに深き意義を有するものである。

しかるにこの重大なる文化史の取扱はやゝもすれば淺薄單調に流れて興味を失し、甚だしきは之を厄介視して之に對する用意を疎漫にするが如き傾向あるは實に慨歎すべき限りである。吾人は常に文化の價値を思ひ時勢の變遷に着眼して文化史の使命を果し、將來よりよき文化を建

設するの意志を陶冶することに特に力を致さねばならぬ。これは現今歴史教育の一大展開ともいふべきものである。

◆民衆活動の重視

従來の歴史は特權階級と男子のみによつて構成されたかの如く唱へられた。然し、よし偉人が一般民衆を指導し支配したとするも、社會群衆の動向を考慮せずしては其の偉業は成し遂げ得なかつたのである。最近の群衆心理史観はかゝる歴史の本質より出でたるもので、この史観の解釋によつて理解し得る史實は決して少くなく、又民衆の自覺と女性の向上などが、國家の發展に對して寄與することの深き意味に於て強き主張といはねばならない。

◆尋常小學國史と高等小學國史

前者は人物本位、後者は事件中心である。即ち代表的人物を通じて社會を観ると、事象を通して社會を観るとの差異である。然しながらこの兩者は相俟つて一貫の系統を持つもので一方に詳細なるは他方に畧し已に了解せるものは重複を避け理解の困難なるものは高等科に譲り、しかも國民に感銘せしむべき重大なる史實は反覆を厭はざるも、この際は其の史實に對する視点を變へて説明を加へる等深き考慮が拂はれてゐるのに注意を要する。

一、二の例をあげんか、

政治史にありては尋常科に於て其の精神をのべ高等科に至りてはその精神より發したる政治組織に及びて政治教育の完成を期し、戰爭史は尋常科に於て詳細にし高等科に於ては大勢の上から戰爭の起りしこと及び其の影響などを述べ戰爭そのものの記事は殆んど省略されてゐるのである。

同一事件に對するものとしては元寇の如き一大國難は見方をかへて之が徹底につとめてゐるのである。

更に理解の困難なる爲高等科に譲りたるは經濟史、文化史に多い。

即ち、莊園制度による社會の變遷、宗教、美術工藝、風俗の變遷等で、是等によつて、經濟と、政治、文化との關係を明かにし、各時代の文化によつて其の時代相を見るが如く取扱ふべきである。

◆人物事件の批判（史論）

史論は史料に對する論定にして學習者の最後の到達点と考へらる。小學國史にては褒、貶、判斷に苦しむ事項の三者につき批判をなしてゐる。この批判は國家意志の要求として、又史實評價の規範であつて科學的歴史と教育的歴史との差異を甄別する点である。

批判に對しては、修史學にいふ「公平な判断」に脅かされてその取扱を輕んじ、或は學習者の要求もなき事實を附加して批判の公平を得たりとする傾なきに非ざれ共、人物事件の正邪善惡に關する批判は、兒童にとつて明らかに知られたる史實だけを材料としてなすべきもので、他日新らしき材料が提示されるれば批判も變るのである。要するに其の程度に應じ公平嚴正なる批判を下すやう指導すべきである。

四、方法論

指導の目的より考ふれば方法の要諦は當然國史の真相を理解せしめなければならぬ。

之が爲には過去の國民活動についてその重要なものを知らねばならぬ。(史材の領得)

進んで、その活動の理想、理想構成の過程、理想實現の様式等、史材の内面的意味を發見し史實の奥底に流れる生命を感知するの必要がある。(史材の感知)

更にそれらの史實を適當に批判し反省して現代生活を比較考慮し、進んで將來の生活展開へと指導すべきである。(意志の振作)

即ち知的陶冶と情操陶冶と意的陶冶を必要とすべく、之を學習についての心理的要素に分類するならば、記憶推理判断反省と感知と意志の陶冶となるのである。

知的陶冶については從來主として記憶が中心であつたけれども、現代は推理批判が中心となり従つ

て自學自習又は問答による思考教授となつた。

この傾向は大体に於て當を得たものとして是認することが出来る。何となれば歴史的智識の領得については單なる記憶又は暗記によるものよりは、歴史的流轉の諸相を推理によつて自得し各時代の國民生活を批判的に扱ひ、又歴史的事實の反省によりて、過去より進展したる現代を理解することが尤も合理的であり尤も有効であるからである。殊に將來の理想を實現せんが爲に過去の事實にある教訓を求めんとする歴史教育の本質に對しては、推理批判反省等による陶冶は尤も妥當なる方法である。

然し乍らあまりに自學主義を高潮するが爲に、學習者の心理状態や發達程度を考へず却つて其の弊に陥ること少からず。即ち自ら史實を理解し比較考量して一つの系統に構成することは、可成複雑な作用で、高尚な發達階段にあるものでなければ出來難い。随つて學習者が未だこの階段にまで到達しない場合、この方法による時は却つて過重なる負担を強ふることになつてその効果少なく徒勞に終るのである。第二には推理判断についての不完全である。即ち歴史現象は過去に於ける大人の活動であり時代的背景なくしては正しく理解するに困難なるものである。故に未だ全然歴史的知識なき兒童に、自由なる推理判断を下さすことは、却つて誤謬に陥らしむるものとなる。されば出來得る限り史實を心理化し兒童の經驗に基きて理解せしめ其の間推理思考によつて國史を生活せしめねばならぬ。

情操の陶冶については従来主として説話教授によつたのであるが、近來自學主義の影響からこの陶冶をも讀史教授によつて行はんとする傾向となつた。兩者を考ふるに何れも史實の理解の正しく行はれる事を基とするものなるも、讀史による時は一度文字を解釋することによつて史實を理解しそれによつて感情を起すのである。従つて未だ心理内容の高尙なる發達を見ぬ兒童に取つては、讀史によるよりも言語を通し、説話者の態度に接する説話教授に、情操の陶冶をなすことの容易を感ずるのである。意的陶冶は知的陶冶と感情陶冶の複合せる結果として現れるものである。例へば國民が國家の体裁を明かにして國家に服従し、國家を發展せしむべきことの合理的なるを知ることや、順逆正邪の理を明らかにして正義の念を抱くといふ知的陶冶、及び國家に對する國民的情操が養はれた時、そこには歴史教育上最も重要なものといふべく、知的陶冶を主とする讀史教授と、情的陶冶を主とする説話教授と何れを用ふるも、効果をあげ得ると見ることが出来る。

只知的陶冶によるものが稍々高尙なる心理作用を要するものなるが故に、之によらんとするに際しては、學習者の程度心理作用の發達等を十分考慮しての後ならざるべからざることと、兩方法を通じて、推理、反省、判斷、批判等を、尤も活潑に働かしめて、いはゆる兒童自ら國史を生活するの地位にまで導かねばならぬことで、その運用の適否は意的陶冶に最も重大なる影響ありといふべく、その

結果如何は指導者の手腕に俟つべきものである。

地 理 科

一、地理學の本質と地理科

凡そ人類は地球を寧ろ自然を離れては生活なきものである。茲に於て自然は如何なる影響を人類生活に及ぼすものであるか、人類生活は如何にして自然に適應し、自然の制驭支配を受けつゝあるものであるか、即ち此の自然と人類生活とは如何なる關係の下にあるかといふ兩者交渉の如何を究明することが地理學本來の目的である。

故に地理學とは人類の生活舞台としての地球を研究の對象とする學問であり、地球と人類との相互に影響する点を究明する科學であると云へやう。かく考へ來れば地理學の内容は要するに、此の大自然の中に吾々人類が如何なる生活をなせるかについて考究して行くべき頗る廣汎なるものと云はなければならぬ。

此の意味に於て地理學本來の使命なるものは左の如く考へることが出来る。

即ち幾千年の歴史を有する人類が、地球上の生活に於て如何に自然といふものに親しみがあるか、如何に自然の偉力に支配されてゐるか、如何に自然を征服し自然を利用しつゝあるか等自然と人類生

活との諸關係を闡明ならしめるにある。

故に地理學は單に土地自然のみを研究するものでもなく又其の結果の人文のみを研究すべきものでもないことが明らかである。

而して地人相互の關係を理解することから更に進んでは未來に處すべき理法を發見し人類文化の發展を圖ること即ち價值創造をなすところまで行かなければならぬ。

さて國民教育の立場にある小學校地理科の任務は決して地理學者を養成するにあるのではない。地球上に於ける住民の一人として、又國民の一人として、日常生活上必須なる地理學上の知識を得させ、地理的識見を養ひ、且知識收得の方法と知識活用を能を得させることにより、他の諸教科と相俟つて文化國民としての素地啓培に寄與するにあるのである。

二、地理科の目的

教則第六條

『地理ハ地球ノ表面及び人類生活ノ状態ニ關スル知識ノ一班ヲ得シメ、又本邦國勢ノ大要ヲ理解セシメ、兼ネテ愛國心ノ養成ニ資スルヲ以テ要旨トス。』

自然が如何に人事に關係せよか、人類が如何に自然を利用せるかの考察には地球表面に關する知識を必要とし、實際生活上の見地からは、人類生活の状態に關する知識を要するのであつて、自然人文

何れも個々分離せしめて取扱ふべきものではない。

次に國家的生活の上から本邦國勢の大要を理解せしめることが肝要となつて來る。

而して、眞に本邦國勢の大要を理解するためには、日本地理の學習は勿論、進んでは外國地理に及び、彼我の長短を知り世界の大勢に通じなければならぬ。

「知るは愛するの基なり」とは古からの言葉である。よく知らせて愛すべきは愛し、愛すべからざる点即ち我國が他國に比して劣つてゐるところは、改善進歩せしめると云ふ眞正の愛國心を養成すべきである。

尙觀察力、想像力、記憶力、推理力等の養成も該科の目的とするところである。

然し乍ら以上は決して別々のものではなくて、相關的、有機的に關係をもつものである。

即ち地球の表面と人類生活とは地人相關の有機的關係をなし、地球の表面及び人類生活の状態に關する知識の一斑がわかれば、本邦國勢の大要が理解されることになる。此の本邦國勢を理解することに依つて眞の愛國心も養成されるのである。

三、教材の選擇

該科の本質上教材は實に多方面に亘つてをる。故に各方面の材料を精査研究すると同時に材料價値の判定をなし、取捨選擇を行ふことが肝要である。その標準を示せば……。

(1)、自然と人生との關係密接なる材料

高山大河なるが故に教ふるは單に固有名詞の羅列に止り無意味である。山でも河でも人生との關係の度合に應じて取扱に輕重を生ずるのが當然である。

(2)、代表的材料と練習的材料

多くの地理教材中には模範的代表的のものゝ然らざるものがある。

例へば、川と人生との關係に於ける利根川、貿易港としての横濱等はその代表的のものゝ云へやう。故に之に力を注いでおけば他地方に於ける同類の教材は殆んど類推によつて學習せしめ得る譯で、只その地方教材の特異点のみを特別に取扱へばよいことゝなる。

(3)、其の地方其の國の個性を現はす材料

例へば同じ産業教材にしても、中部地方に於ては該地方獨特の趣をなしてゐるのである。即ち農業としての米、茶、繭、工業としての生絲、絹織物、賣藥、陶器、林業としての木曾材、鑛業としての石油等の如くである。而して此の特徴個性を掴ませることが大切である。

(4)、國家的若くは國際的の材料

其の地方其の國の特異性を現はす材料は同時に國家的國際的に重要な地位を占めるものが多い。かくの如き材料に對しては常に大局から眺めて行く様に努めねばならぬ。

(5)、日常生活の上に關係深き材料

(6)、新らしき材料

動的教科たる地理科は特に變動多きものである。新聞、官報、雜誌、統計年鑑等により、生々とした材料を集めることが大切である。

(7)、兒童心理より見たる材料

地理學としては價值多き材料でも兒童の發達程度、理解難易を考慮せねばならぬ。

即ち兒童の理解に適し、興味あるものたる事、初步に於ては具體的事實現象を重んじ、漸次兒童の進むに従ひ、類推方面の抽象的學習に移らしめることである。随つて地理的理法發見の如きも、幾多の具體的材料を學習して行く間に行はしめる様にありたい。

要するに、たとへ教科書記載の事項と雖も、價值少なきものは割愛するだけの用意が緊要である。

四、指導の要諦

(1)、地人相關の理を考察理解せしめる。

地理教授の根底は地人相關の体得、よりよき生活への向上にある。

地理的現象を有機的に考察し、比較研究をなして、地理的法則を体得し、正當に國勢を理解し、眞摯なる世界的地位を自覺し、堅固なる愛國心を喚起して、地理的識見即ち地理眼を培養すること

は、本科教授上の緊要事である。

而して、地人相關的に取扱ふといふことは、人類生活をしてよりよき生活へ向上せしむべき方法であつて、人類の自然界に對する施設經營とも稱すべきものである。

即ち人類が如何に自然を征服利用するか、又如何に自然に順應するかといふ問題である。

例へば、相模川上流の水力發電。又山陰線のトレスル式陸橋、並に彼の濠洲等に於ける鑽井灌漑による農業の如きは自然を利用征服したるものにして、ベルーの一地方に於ける屋根無し家屋、バナマ運河開鑿事業の成功の如きは、人類が自然に順應したる好適例である。又長野縣人の一般に獨自性強く、多くの學者を出せるが如きは如何に自然の影響の大なるかを推測するに足るものである。

扱て尙此の他産業の發達、都邑の分布等總て人文的現象は自然的事象に即してゐるものと云ふも敢へて過言ではあるまい。

茲に於て自然、人文、何れを重大視すべきかの問題が起る譯になるが、之に就ては説が區々である。しかし、學者の立場から地理學を研究する場合に於ては、或は自然地理を重んじなければならぬかもしれないが、小學校の地理は、生活のための地理といつてもよい位であるから、人文方面を重んじ、自然地理は人文地理を理解させるため及び今後の利用と文化向上の基礎的知識たらしめるため

にしたいと思ふ。

(2)、國勢の理解と國力の發展

國民教育としての地理は國勢を眞に理解せしめることが最も大切であつて、之に依つて世界に於ける我國の地位を明らかにし、國民的責務の重大なることを自覺し、國力充實、國家の發展に努力する國民を養成しなければならぬ。

而して、國勢の理解と國力發展について留意すべき点は……。

◆先づ我國土が世界交通上、貿易上から見て最も重要な位置を占めてゐることである。かくの如く自然的位置及び關係的位置に於て世界中最も優秀であることは我國にとつて非常な幸福であると共に、此の地の利を發揮するのは一に國民の力に待つことを自覺させねばならぬ。

◆次に人文地理の方面に於ては我國民が如何なる活動をなしつゝあるかといふことの理解が緊要である。

八千餘万の國民を有することは、實に我國の強味であると共に、其の中の大多數を占めてゐるところの大和民族が中心となり、先導者となつて、他の民族の同化に力めてゐること、及び我國民の知識、道德、身体等文化の程度國民性の長短等に對する深き理解を要する。尙我國現下の國狀に鑑み、特に經濟的活動の状態を明らかにせしめる事が必要である。

此の点から産業の學習にはの一層注意と努力とを拂はねばならぬ。更に地勢、氣候、交通等の關係から産業發達の理由を明らかにすると共に、其の狀況、販路、經濟界に及ぼす影響等を學習せしめ、大に國民の經濟思想を養はねばならぬ。

「國を富ますには如何にするか」。

「今後如何にして産業を發展せしめるか」。

といふことは、我國策であり、國民舉つて解くべき大なる問題である。

其の他、輸入超過、商業道德等幾多の問題が横はつてゐることを悟らしめねばならぬ。

(3)、愛國心の養成と國際精神の喚起

前述の如く國勢の理解と愛國心の養成とは相即すべきものである。

日本地理を學び、外國地理を學ぶも、歸するところは眞に我國の國勢を理解し、眞正の愛國心を喚起するためである。

而して最近に於ける交通機關の急激なる發達は千里比隣の言葉そのもの、如く、世界の實際的縮小を見るに至り、茲に世界各國は相互に益々密接な國際的關係の下に交渉すること、なつた。故に現下に於ては、最早偏狹なる愛國心、頑迷固陋な國家的思想は許されなくなり、各國相互が採長補短、進歩的、進取的の態度に出づる所謂國際的協調時代となつたのである。

世界に於て最も重大な責任と使命とを負へる我國民は、絶えずこの民族的使命、國民的使命の下に世界を眺め、我國を顧みるやうにし、輕舉盲動せず、確固たる信念を持つて統一ある國民的活動をなし、益々國家の隆昌と發達とに貢献するやう指導すべきである。

(4)、日常生活と聯關せしめること

地理を學習することに依り學的愉悅を感ずると共に、一方に於てそれ等の事象が、吾々の日常生活と如何に密接なる關係あるかを探索することが大切である。

こゝに地理學習が知的靜的でなく、情意的動的のものとなつて來るのである。

位置、地勢、氣候などの自然的方面でも孤立的に學習させるでなく、人間の活動に關係づけて學習せしめねばならぬ。又産業、郡邑、交通等人文的方面に於ては、一層生活と聯關して學習せしめ、文化的を進めるについての參考に供して行く様にありたいと思ふ。

全く日常生活を離れ、郷土と沒交渉な學習はその効果が甚だ疑はしいものとなる。

(5)、發展的人物の養成

世界到る處吾々の活動舞台となつた今日、大いに活動發展しやうとするものは必ず地理的識見を持たねばならぬ。

殊に海外發展を企圖する程のものは、如何なる方面に發展し、如何なる事業を營むべきか等相當地

理的事實を明らかにしてかゝらねばならぬ。かくの如く海外發展には正確な知識が伴ふことを要すると共に一方道徳心が肝要である。

私利を貪るために外國人の感情を害し、大國民としての名譽を汚損するが如きことをなさず。共存共榮の方針を以て一に公正な道を辿ることが大切である。

而して、小さな愛國心、愛郷心に捉はれて、齷齪するが如きことをなさず、大に雄飛し、發展地に於ける社會、國家のために貢献すべきである。之が眞の愛郷心、愛國心であり、大國民としての態度である。

(6)、實習作業による學習

畧圖の描寫、圖上測定、分布圖、統計グラフ模型の作製、並に模型白地圖、旅行案内に依る作業等、種々の地理的實習をなすことに依り地理的觀念を確實にし、以て本科學習上の効果を更により大ならしめねばならぬ。

五、地理教育の出發点

(1)、郷土地理の取扱

何人と雖も所謂郷土に恩恵を蒙つてゐないものはない。

然るに郷土なるものは恰も空氣の如く、太陽の如く、大氣中に生育して空氣の必要を痛感せず、太

陽の恩恵を蒙り乍ら其の有難さを感じない様に、郷土そのもの、中に於ては郷土に對する敬意の情を持ち難いものである。

併し乍ら一度他郷に出づれば、郷土に對する追慕愛着の情禁する事が出来ないのは人情の常である。

かくの如く吾人生活の根基原泉が郷土にあることは言を俟たぬ。故に地理學習に於ても、その出發点を郷土に求めることは當然と言はねばならぬ。

さて郷土の範圍は地方に依つて異にすべきも學校を中心となし地理學習上最も得策と考ふべき部分に限界を定め敢へて政治的區劃等の拘束を受くるの要なきものと信ずる。

故に本校に於ては大體地理的要素を包有せる松山附近一圓を以て郷土的取扱の範圍と定む。

次に郷土教授の時期について考ふるに、之に關する說區々なるも、國語讀本其の他の教科書に現れる郷土地理的材料の學習指導に於て、適當なる取扱(その科の本質を害はぬ様)をなせば地理書取扱以前に於て、特別に郷土地理なるもの、取扱をなさずとも、合理的に學習を進展せしめることが出来るであらう。

但し教科書取扱の前に於ては狹義の基本觀念整理のために必要なる郷土的材料の取扱をなさねばならぬ。

而して、郷土以外の地理學習に際し、郷土の資料をば比較の材料に利用し、想像や類推の基本としても活用をなし、以て兒童の理解、徹底を容易ならしむべきである。

(2)、讀圖力の養成

算術、讀方、理科等と連絡し、左記の如き讀圖の基本となるべき事項の取扱をなすこと。

イ、縮圖の觀念養成。

教室校地等の縮圖を描かせて、縮圖と實際の廣さとの關係を知らしめること。

ロ、平面圖、側面圖、斷面圖の觀念養成。

ハ、地圖の方位符號の讀方。

遠足、校外教授等の際適宜に指導すること。

ニ、模型砂地圖等により實地との比較對照をなさしめること。

理 科

一、理科の本質

教育の目的を達するために採用さるゝ理科は、自然を對象とする自然科學的教科である。即ち自然に關する統一的普遍的認識を組織することのみを目的とするにはあらずして、社會生活に於て能率高

き公民たるために、科學的方法にて自己を訓練し、亦或程度の科學的知識を有し、科學的理想に生きんがための教科である。従つて理科は、自然科學に教材的、教法的基礎をおくものである。

二、理科教授の目的

「理科ハ通常ノ天然物及ビ自然ノ現象ニ關スル知識一般ヲ得シメ、其ノ相互及ビ人生ニ對スル關係ノ大要ヲ理會セシメ、兼テ觀察ヲ精密ニシ、自然ヲ愛好スルノ心ヲ養フヲ以テ要旨トス」

社會生活の維持及び進歩發達の要件としての自然を知るには、科學的方法によらざるべからざるは明かにして、科學的方法とは、論理的認識法、即ち推理思考の法則により物を認識する方法である、而して思考推理は、科學的事實より始まるべきものにして、精密なる觀察、實驗等の手段により修練せらるゝものである。實驗とは、任意の時任意の場所に於て現象を現出せしめ、之を注意して認識することにして、觀察とは、現象の發生を自然に待ち之を注意して認識することである。

かく科學的研究の態度にて活動せんとする精神は科學的精神にして理科教授の眞實の目的である。

自然物、自然現象を精細に觀察せば、自然に對する驚愕、畏敬の念を生ずると共に、科學的觀察により自然美は更に精彩を加へ自然を愛好するの念を助長するのである。而して自然に親しむ間に生ずる自然の感化は、思想を向上せしめ、品性を高潔ならしめて、圓滿なる人格、正しき人生觀をも得し

むるに至るものである。

三、教材の選擇

理科は自然を對象とするを以て、教材選擇の範圍甚だ廣きが故に、其の教材は兒童の發達の程度並に教授時數を考慮して、少數代表的の教材を選擇すべきである。即ち

(1)、兒童の理解に適し趣味を有し得るもの。

小學校教育の對象は兒童なるを以て兒童能力の發達に相應じて理解に適し、明確に把捉し得るもの。

(2)、基本教材たること。

理科の目的は自然物、又は自然現象を兒童の現象と結びつけて直接に觀察實驗せしめ、此の間に流れてゐる根本原理の知識を獲得せしむることなれば、各方面の代表的のものを選擇し、それ等の充分に内容ある理解と、基本概念とを得しむると共に、自然の統一相を見出し完全なる自然觀を得しむるものであるを要す。

(3)、普通なるもの。

日常必須の知識を得しめ、且つ自然現象と人生との關係を理解せしむるには、代表的たると共に、兒童の日常生活と密接なる關係を有するものでなくてはならない。何となればかゝる教材

は、兒童の現在の生活又は將來の生活にも直接應用し得るやう訓練なし得るからである。従つて理科教材は本來地方的に定めるべきものである。

理科書の凡例に

「本書の植物動物教材には、地方によりて季節の相違あり、又普通ならざるものもあるべし。かゝる場合には、適宜に順序を變更し、又は他のものを代用して教授すべし。物理化學等に関する教材にも、地方及び學校の情況によりて多少變更すべきものあり。實驗の方法、實例の説明の如きこれなり。」

四、教材の排列

(1)、兒童の經驗、知識によりて教材に難易を生ずれば、兒童の心理的發達に應ずること。

(2)、觀察實驗を容易且つ充分ならしむるため季節的排列に留意すること。

(3)、教材の連絡は取扱の如何によりて達せらるゝものなれども、排列上にも取扱の便宜を考慮すること。

五、各學年の教授方針

(1)、中學年の理科教授

「尋常小學校ニ於テハ、植物、動物、礦物及自然ノ現象ニ就キ、主トシテ兒童ノ目撃シ得ル事項

ヲ授ケ、特ニ重要ナル植物、動物、礦物ノ名稱、形狀、效用及發育ノ大要ヲ知ラシメ、又通常ノ物理、化學上ノ現象及人身生理ノ初步ヲ授クベシ。」

理科教授の主目的は科學的精神の養成なれば、尋四の如き中學年の理科も、科學的研究の方法を離れることは出来ないが、兒童の心理的發達、自然科學發達の歴史等より考察して兒童に適應せる學習たらしむると共に、物に即したる觀察、記述の指導に意を用ひ、又論理的認識の訓練をその間に行ひて、自然界の事物現象を科學的に研究する基礎を築き上げべきである。

(2)、高學年の理科教授

中學年の連續たる觀察記述の深廣を増と共に、思考力發達の時期なるを以て、關係的に事物現象を考察せしめて普遍的認識に進み、更に法則原理を演繹檢證する科學的習慣の養成に力を注ぐべきである。

(3)、高等料の理科教授

「高等小學校ニ於テハ、前項ニ準ジ、漸ク其ノ程度ヲ進メ、特ニ重要ナル元素及化合物、簡易機械ノ構造、作用、人身ニ生理衛生ノ大要ヲ授ケ、兼テ植物、動物、礦物ノ相互及人生ニ對スル關係ノ大要ヲ理會セシムベシ。」

理科ニ於テハ務メテ農業、水産、工業、家事等ニ適切ナル事項ヲ授ケ、特ニ植物、動物等ニ就

キ教授スル際ニハ之ヲ以テ製スル重要ナル加工品ノ製法、效用等ノ概略ヲ知ラシムベシ。」

本學年の兒童は、直ちに社會に入り職業を持つものである。職業の改善進歩は、科學的研究の精神あるものにして初めて可能なれば、彼等の屬する社會を理解し改善進歩を行ふ文化價值創造の素養を涵養することを主眼点とすべきである。

尋常科の基礎の上に立ち自然科學的方法の程度を高めて陶冶するために、學習は兒童の自己活動を重んじ、自己の努力によりて學習を完全ならしむべく、參考書を漁り、日常生活に於ける科學應用の器具を觀察精査する等科學應用による生活改善進歩發達に留意して科學的精神の涵養に努むべきである。

六、各教材の取扱

(1)、生物教材の取扱

生物の研究は生の研究にして、生の表徴は活動と成長との二つの現象に存す。生物の發育變遷の途中一瞬間を取り一時的の靜的觀察は、外部的斷片的の觀察に止まるを以て、連續的に成長發達、現象の變化等觀察せしむれば、觀察の興味と能力とを増進するのみならず、生活作用の研究、生活と外圍との關係、生物の靈妙なる作用、人生との關係等の生物學的原理を探究し得るのである。

かくて兒童の日常生活に遭遇する多種多様の生物に就て兒童獨力で研究推理し、彼等の生活内容を豊富ならしむる基礎を作ると共に生物愛好の念を養ふに至る。

(2)、物理教材の取扱

物理学の本領は自然界の事象に對する理由の説明に存するを以て、観察、實驗による結果を普遍的法則の下に統一し、其の理由を説明することである。學習に於ては、兒童の日常生活の事實を解決する立場にて理由の探究に進むのと、簡易なる實驗により原理を見出し、それによりて日常生活の事象を説明するの二途あり。教材の性質、兒童の發達程度により、途を異にするは勿論なれど、日常生活の事實の解決を目的とする學習は、對象明確なるを以て、兒童は計畫的自律的に研究を進め得べきにより兒童心理に適する方法である。

(3)、化學教材の取扱

化學は反應即ち物質の化合分解によりて生ずる變化を観察し、以て化學的法則に導くを本領とするものなれど、兒童の發達程度により、複雑な而も嚴密な實驗、思考推理等は困難なるを以て、中學年に於ては、單体の物理的性質の研究、化合の状態より進み、學年の進むに従ひ、次第に程度を高め、物の組成を中心とする化學的研究をなし、化合に於ける物質の變化を明かにするのである。

化學は實驗による研究を主とすべきものなれば、實驗的訓練を充分ならしむると共に、歸納推理の練習にも努むべきものとす。

(4)、礦物教材の取扱

礦物學の本領は礦物の物理的性質の研究、即ち結晶、色彩、硬度、劈開、斷口等により礦物を鑑定することである。兒童の礦物觀察に於ては、物理的性質の研究に傾く性質を有せば、中學年に於ては物理的性質の研究より進み、次第に化學的研究を加味するものにして、その間礦物に相應せる觀察、研究法の訓練と共に、觀察を緻密ならしむる習慣の養成に努むべきである。

(5)、天文地文氣象教材の取扱

氣象は兒童の日常生活に密接なる關係を有するものにして、天氣現象の原因を分析研究し、その趨向を正確に豫知することを本質とするものなれば、天氣現象の變化推移を繼續的研究により不斷の觀察を行はしむべきである。

天文教材は觀察、補説により、科學の偉力を感じ、宇宙の秩序を認識し、以て宗教的感情の陶冶にまで進むべきである。

地文教材は、天体の觀察を移して地球上の現象を観察することを本質とすれば、研究の對象物の觀察、繪畫、補説等によりて、成因を考察せしめ天文地文相關的の取扱ひとすべきである。

(6) 生理衛生教材の取扱

生理解剖の知識により保健衛生を理解せしめ進んでその基礎の上に良習慣を造らしむことを目的とす。

取扱は兒童身体の働きある機能体の研究にして、教材の排列に工夫をなして、代用動物解剖により知識を正確になし、その理解によりて衛生上の良習慣養成に努むべきである。

圖畫科、手工科

一、圖畫科、手工科の意義

圖畫及び手工は空間藝術たる繪畫、彫塑、建築及び工藝等の造形美術を其の本質的素料とし、兒童の美的表現乃至鑑賞の勞作を其の主題とせる、兒童藝術或は兒童美術とも云ふべきものである。

審美的勞作の藝術的活動は、利害や打算や、一般的本質への理論的關心を除いて、純乎たる觀賞的態度に立つべきものなれど、現實に存在する事物の多くは吾等の自然的或は經濟的欲求をそゝり、學的關心を刺戟するが故に、審美的精神はそれ自身純真なる活動を期せんとして、人工的的形相を創作せんとする要求を生じ、自我の内面的情調を個々具体の事象に表現せんとする藝術的創作を要求する。而してそれは時間形式をかりて表現せる詩文、音樂並びに空間形式をかりてなされたる造形美術

を生み、更に時空綜合の表現形式に於ける綜合藝術をなし、文化活動の一大部門としてその價值を占むるのである。

かくの如く藝術が人間眞性の要求より生じたる内面的意義を有するものなる以上、教育に於ける藝術的陶冶の職能は重且大と謂はねばならぬ。而して造形美術を其の本質的素料としたる圖畫科、手工科が教育に於ける藝術的陶冶の職能は、當然兒童の藝術的精神を培はんがために、形象の鑑賞力と創作力とに關與するを其の本質的使命とせねばならぬ。

二、圖畫科、手工科の目的

かくて吾人は圖畫科、手工科の本質を造形美術への一途に求め、兩科一体、一途の目的に向つて進むべきものでありとなすものである。即ちその教育上に於ける目的は、

兒童の内面的情調を空間表現せしむること及び、美的形象を鑑賞せしむることによつて、形及び色即ち形象に對する美的鑑賞力及び創作力を陶冶し、以て審美的精神を啓培せんとするものである。

而して美的創作は直觀力、構象力及び其の表現に要する技巧方法を陶冶すべきものであり、美的鑑賞には直觀力、感受力の修練をもなすものでなければならぬ。

以上は兩科を一体とし造形美術的教科として其の目的を述べたものであるが、圖畫科と手工科との相異点如何の問題につきては、之を截然明確に區劃して、兩科の本質的特異性を述ぶることの到底不

可能なることを認むるものである。されど蓋然的に、

圖書科—繪畫を主とせるもの

手工科—彫塑、建築、工藝等を主とせるもの

と之を區別し、更に勞作の上に於ける兩者の相異点として、

圖書科—純然たる繪畫の創作を主とせる純正藝術的勞作

手工科—應用的、組成的、複合的製作等の藝術的勞作を主とせるもの

と分類することが出来ると思ふ。

更に制作及製作等の勞作は之を勞作教育の意義に於いて見逃し難き教育的價值を有するものである。副次的陶冶を認めこれを強調する所以である。

要するに圖書と云ひ手工と言ふも共に形象の表現である造形藝術である。たゞ圖書は主として之を平面的に表はす方面であり、手工は主として之を立體的に表現する方面である。即ち圖書、手工は造形藝術のこの二方面を代表するもので切つても切れない關係交渉を有して居る。近代、圖書、手工の綜合教育が高調せられつゝある所以はこゝにありと思ふ。

時代は進む。人の能力も進む。されど美を愛し美を追求する人の心に今昔の變りはない。穴居時代の原始人が猛獸の骨片或は岩石等に或る種の裝飾的意味の繪畫を描き、太古埃及の王族墳墓等に奇妙

な形態の描かれてあつたことは人のよく知る所である。古代からの人間が如何に美と云ふものに對して執着を持つて居たかがうかゞはれる。古の野蠻から今日の文明に、子供から大人に、今の時代から次の時代に、處、場所、時刻の相異による美的情操の變化こそあれ人間の世界が實用一逼では到底生活の出来ないことが分る。人類から美術を抜き去ることは到底出来ない。現在の吾等の社會から美を取り去れば人間はどんなになるであらうかと考へる時美と云ふものが如何に人間生活に必要であるかを知る。子供から大人へ、此の間に教育で暗示と導きがあつて美的情操を高め社會をより以上に美の域に達せしむべく圖書科、手工科が設けられたのではあるまいか。而して吾人は圖書科、手工科を指導するにあたり今一つ重大なる思慮を持つて兒童に接しなければならぬ。社會をより以上に美の域に進むための圖書科であり手工科ではあるが吾々は決して美術家や専門家を作るのではない。大工や刺繍師や染物師、彫刻師等の技術師を養成するためではない。勿論自然人、風流人を作るものでもない。實に吾人の望む所は圖書科、手工科を通して兒童の知情意の圓滿なる發達をさげしめ個人として社會人として又國民として人格的陶冶をはかり、うるほひのある人間生活をなさしむるための圖書科、手工科でなければならぬと思ふ。

三、圖書科、手工科の教材

◆教材の撰擇

吾々の環境は形と色、即ち形象によりて構成されて居る。兒童の眼に映するもの、耳に聽ゆるもの、形象の世界に或は想像の世界に、圖書科手工科の教材の範圍は随分廣い。兒童はこの環境から自由材料を得、そして自由に表現することが出来る。吾々はこの環境の中から兒童をして自由に材料を得しめ、自由に表現せしめることに意を用ひなければならぬ。而して其の自由なるもの、語たるや決して放縱の自由ではない。兒童の本能衝動のまゝに進ませる自由は、彼等をして完全なる發達をどげしむる道ではない。兒童は未だ獨力にして價值實現まで進み得る程發達はして居ないのである。この傾向は特に農村兒童に著しい。環境の然らしめる所が最たる原因をなし農村兒童は都市の兒童に比して表現能力の劣つて居ることは明らかである。併し農村は又農村としての特色を持つて居る。吾々はあらゆる方面に於いて、この兒童を解し、而して藝術を解し、而して後成案を立て、兒童に接し、兒童を導くことに力めなければならない。

材料撰擇には次の事項に特に意を用ひたい。

- (1)、兒童の能力發達の程度に適したるもの
- (2)、兒童の心理的傾向に合致したるもの
- (3)、兒童の生活環境に即したるもの
- (4)、學習の價值のなるべく大なるもの

◆教材の排列

教材の撰擇と共に忘るべからざる圖書科、手工科に於ける一大要件は教材の排列である。教材排列の適、不適は圖書科、手工科をして向上、向下の岐路に立たせたるに等しい。若し教材の排列を誤らんか。兒童の發達段階を無視したる教材、季節や環境と没交渉の教材、兒童の心理に適合しない材料、而して價值なき材料が多分に含まれて居る教材の排列としたならば如何。

かくては人格陶冶最高の尊重すべき藝術教育たる圖書科手工科は次第に其の影をひそめやがては衰微のきざしを見ること明らかである。吾々は教材排列と云ふことに對しては叮嚀に教材そのものを吟味し研究し而して對象たる兒童の藝術心の向上に力めたい。

兒童は各個に能力の差あり、個性の相異あり、各自の個性に立脚したる教材の排列をなすことが最も大切である。未だに經驗の少ない本校に於いては充分自信のある教材排列をなすを得ないけれども、断片的なる觀察の結果及び少數の報告等を基礎として、大体次の様な教材の排列をなして居る。勿論獨斷的のものであるから今後不斷の改訂を豫期するものである。

◆圖書科教授時間配當表

(一ヶ年四十時と見て
但尋五六男は此の二倍)

教材	學年	尋一	尋二	尋三	尋四	尋五	尋六	高一	高二

美術講話	寫生	圖案	模作畫	觀念畫
	四		六	三〇
	七	三	五	二五
一	五	五	四	一五
三	二五	五	二	五
三	二二	五	五	五
五	二三	五	四	三
五	二二	八	三	二
五	二二	八	三	二

◆手工科教授時間配當表

(一ヶ年尋常科四十時
高等科八十時)

材料	學年	尋一	尋二	尋三	尋四	尋五	尋六	高一男	高二男	高一女	高二女
竹						七	五	三〇	一〇	一〇	二〇
麥		二	二	三	二						
紙		八	〇	〇	〇	一七	一六			三〇	
豆		五	六								
砧		一五	一三	一五	一三	八	七	一〇		一〇	

木、	版	染	刺	製	講
金	色	繪	圖	話	話
	二				
	五				
	三	五			
二	二	三	五		
四	四				二〇
四	六				六〇
四	六	二〇			
六	四	二〇			三〇

四、方法論 其の一 (圖畫科)

(1)、描寫の指導

吾々が物体を描かんとする場合先づ對象物を見なければならぬ。或は腦裡に記憶を閃さなければならぬ。觀念のない形、色彩は眞の描寫ではない。兒童が描寫するに當り先づ見なければならぬ。味はなければならぬ、觀念をまとめなければならぬ。學年、能力の相異こそあれ兒童は何れも描くに先だちて何等かの心の閃があるにちがひない。この場合、吾々は時と場合に應じて形は色は陰はと要素的、部分的に追求して兒童の見る眼を高めて行くことが描寫に先ちて必要である。而して更に單なる眼で見る以上に感じて見る様にまで彼等を追求して行きたい。

兒童により又發達の程度によつて描寫の上に種々なる傾向が現れるものであるが、それ等は多くの場合個性の傾向に根ざす相異であるからして輕々しく見過し、或は劃一的な型を強制すべきではない。個性に、發育に即しつゝ、然も描寫の眞意義を徹して行く様指導しなければならぬ。

イ、觀念畫

尋一尋二尋三の中頃までの兒童に最も適切にして且この時代の兒童に喜ばれるものである。これは兒童の觀念が主觀的であるためこれによつて兒童の個性を知ることが出来ること云つてもよい。これが指導の態度として

◆兒童の觀察を次第に精緻に導いてやる

◆概念的な描寫を實体的描寫に進めて行くこと

◆他教課との連絡をはかりなるべく総合的に取扱つて觀察を深めて行く。

ロ、摸作畫

摸倣性は人間如何なる者と云へども有して居るもので又生活上創作への過程としてふまねばならぬ道である。摸倣が摸倣に終つてしまへば價値のないものであるが創作への過程としての摸倣なれば實に有意義である。低學年の兒童が他の作品を見てこれを描き、大人の作品を摸寫することによりて自己の描寫慾の満足をはかる。結構だと思ふ。高學年の兒童が歴史の武者繪を見てこれを描出す

る。面白いと思ふ。大家の作品の摸寫も一方に偏しない限り指導してさしつかへないと思ふ。

ハ、寫生畫

寫生と謂ふことは決して客觀の形骸を眺め寫す如實に再現すること云ふことではない。其の客觀の本體を感じてこれを純眞に表現する所に藝術的な味となつて來るものである。

尋三の終り頃より實物直觀による表現が漸次頭をもたげ次第に寫生中心の世界に入る、尋四尋五は實に寫生の全盛期である。

兒童を取りまく環境、農村兒童は農村と云ふ環境にありながら農村の義を知らない。見なれ住みなれて居るために。吾々は寫生することによりて農村の持つ眞環境の美を味はしめたい。

ニ、圖案

人間生活を美的化するに最も必要なものは圖案である。模様である。自然美に對して人工美と云ふならば其の人工美中に於いて重要かぐべからざるもの即ち圖案である。

圖案は繪畫の應用的方面である。圖案そのものが獨立して居ることは少なく多くの場合工藝と連關して居る。手工科に於いて圖案が含まれて居ることは言を待たない。手工科に於ける圖案と圖畫科に於ける圖案とは決して本質的意義の異なるものではなく、其の立場、材料等の差異によるものである。

思考、推理の力を練磨する上に於いて圖案は實に意義の深いものである。この意味に於いて本校は圖案を重視して指導して居る。

以上は描寫の態度や形式によつて觀念畫、模作畫、寫生圖案と分けたものでなを其の他色々な分け方もある様であるが、要は名の問題でなく、實質の問題としては、寫生、記憶、模作、圖案何れも價值を有するもので何れの方法を取つてもよいと思ふ。どんな方法によるかは題材により個性によつて異なるために兒童が選定すべきである、たゞ兒童の嗜好が必ずしも個性に適するものでないことを考へなければならぬ。

吾々は兒童をして正しい藝術心の向上へと暗示を與へ導くことに心掛けたい。

(2)、鑑賞の指導

兒童が作品をながめた時、それ／＼善いか悪いか、好きか嫌か位の考へは持つて居る。高學年になると一層此の傾向が發展し、好嫌以上に自己の思想と氣持とを合せて發表する。即ち鑑賞能力が發達し鑑賞眼が廣くなつた所以である。他人の作品を見て自分のものと比較する。立派な作品を見てうつとりとその作品に魅せられてしまふ。次に自己の反省が起る。そして自己の作品の向上をはからんとする。故に兒童をして廣く多くの作品に接せしめ尙其の上説明も織り交せて自得させたいと思ふ。

◆鑑賞材料の蒐集、整理

兒童自身が、色、形、構圖、その他すぐれた作品を集めることはそれ自身鑑賞活動である。新聞の切抜、雑誌の挿畫繪畫書等の蒐集をさせることは鑑賞能力を増進させるに必要である。されど農村にありてはこの蒐集は困難な兒童が多い。故に教師と兒童が共同で色々なものを集めこれを取捨撰擇して整理し適當なる時期にこれを鑑賞させることがこれ又忘れてはならない方法であると思ふ。

五、方法論 其の二 (手工科)

手工科指導にあたり先づ吾々の考ふべきことは兒童の趣味に立脚し個性の能力に適應した題材をえらぶことであらう。兒童の趣味に立脚しない題材を兒童に與へこれが製作を強ひる等の類は自己の愚を人に語るに等しい。

(1)、模作法と創作法

自然物及び實物模型、鑑賞作品を直觀によりて自己の腦裡に入れ而してこれに似たものを製作することを模作法と云ひ、自然物、模型等を直觀するしないにかゝはらず、兒童に主觀的の表現をなさしむるものを創作法と云ふ。

兩者の區別は製作物が客觀的か、主觀的かにあつて指導の傾向を二分したに過ぎない。創作法と模作法とは教育上の區別であつて模作法にありても兒童の創作法は常に現はれる。否むしろ最初は總て模作法であると云つてよい。本箱を作るにしても筆立を製作するにしても、先づ教師の説明、作

り方、或は製作したる實物を見なければ立派な物を作り出すことは出来ない。而して後彼等の筋肉運動即体験によりて自己が体得する、その体得の境地は兒童自らが發見し創作すべきもので、其處に至つて兒童の眞の技能を發揮することを得るのである。創作への過程として模作法の價值をみとむると共にこれを兒童に課したいと思ふ。されど手工科窮極の目的は創作である事は云ふまでもない。

(2)、興味から努力へ

自己の構成本能を満足しつゝ、彼等の嗜好に適するものを組立てて行く其の活動に無限の興味と喜びを覺へ更に自己の力によりて作品として完成したる時には成功の愉快を禁することが出来ない。手工科全體の興味は此處に存する。圖畫科に於いても同じであるが多くの兒童が自由選題を好むは此の点にある。だから兒童の個性を尊重して創造性開發に効果をあげんとするには、彼等の自由を尊重して、創作的指導法を取らなければならぬけれども、たゞ單に興味本位にのみ走る時は兒童の工作意向が常に偏して盲目的な感情に支配され、少し困難を感ずるとすぐに其の仕事をして、自己の好むものばかりに走る弊がある。故にこゝに自覺ある絶えざる努力を要するものを加味して其の欠陥を救済することが最も必要である。

興味より努力へ、即ち興味より出發して努力の新天地を拓かせ、更に新しき興味を喚起し、次に此

の既習の經驗を出發点として又興味の基礎として、他教材にこれを用ひ、前教材の多數を含むと共に或る努力の目標を定め常に新しき興味と經驗とを得させる様、題目を選定して指導して行きたい。こゝに於いて興味は努力となり努力は更に次の興味の基礎となり、而して兒童の手工への歩み大きく云へば藝術への歩みを益々進展させることが出来るのである。

(3)、製作と鑑賞

鑑賞は製作への基礎となり、製作は鑑賞への導線である。即ち鑑賞と製作とは表裏相依の關係を有するもので一體となつて構成にあづかる。鑑賞の方法として常に他人の製作品を觀察せしめ、又は時々小展覽會を催してこれを鑑賞せしめ自己の製作への參考資料たらしめたいと思ふ。

圖畫科指導系統案

尋一	喜んで描かす 描寫慾の 善導及び これを滿	全上	寫生の態 度を濃厚 にする	寫生の態 度を益々 深く	材料の撰 擇力を持 たせる	材料の撰 擇力養成 と實生 活との	全上
尋二	感興即生 活 一般教材 との連絡	尋三	寫生の態 度を濃厚 にする	寫生の態 度を益々 深く	材料の撰 擇力を持 たせる	材料の撰 擇力養成 と實生 活との	全上
尋四	刺激と暗 示を多く	尋五	寫生の態 度を益々 深く	寫生の態 度を益々 深く	材料の撰 擇力を持 たせる	材料の撰 擇力養成 と實生 活との	全上
尋六	寫生の態 度を益々 深く	尋七	寫生の態 度を益々 深く	寫生の態 度を益々 深く	材料の撰 擇力を持 たせる	材料の撰 擇力養成 と實生 活との	全上
高一	寫生の態 度を益々 深く	高二	寫生の態 度を益々 深く	寫生の態 度を益々 深く	材料の撰 擇力を持 たせる	材料の撰 擇力養成 と實生 活との	全上

圖	點要導指生寫	面方的式形
版の應用 木の葉、 草、花瓣 等の形を	實物を見て描くこ この練習	色彩につ いて
圍み 模様 字模様 繪模様	構圖の位 置の取り 方 輪廓 立體の描 き方	影 立体への 見方
帯模様 便化 幾何模様	バックの つけ方 光澤面 同一色の 明暗	陰 明暗 比較
四方連 續模様	配合の美 組合せの 美 光澤面の 明暗 スケッチ	光線 幾何形體 遠近
	略畫 スケッチ 人體の描 法 凹凸面	透視 線の美 立體圖
	透明體 の描き 方 石膏	
	全上	

材 教 要 主	針 方 の
動的なる もの 交通機關 人、動物 玩具類 單純なる もの	足させる 筋肉練習 學習の方 便
動的なる もの 生活的な るもの 季節的な るもの 景色、花 雜誌其他 の讀物か ら考案應 用の初歩	漸次寫生 の態度を 作る 部分的な る觀察か ら全体的 へ
感興的生 活的 花 器物 人物 建築物 景色 讀物から	する 見方の指 導鑑賞眼 を持たせ る
理科數學 と連關 器物 草花 果物 景色 寫生圖案 器、果、 植物、魚 類の模様	客觀的の 見方 計畫的相 互的に仕 向ける 鑑賞資料 を豊富に する
地理、歴 史と關係 圖表武者 繪等 植物 器物 果物 景色 人物 美術講話	に寫意の 方面を取 らせる 寫生的考 案畫への 指導
靜物 風景 人體 動物 講話	展 創造力應 用力の練 磨
器物 動物 草花 鳥類 人物 講話	む 繪畫に 對する 批評眼 及鑑賞 眼の養 成
透明體 の器物 石膏 圖法 美術史	

唱歌科

具	用	材	教	要
	色紙 粘土 豆 麥ワラ		豆 麥ワラ	色紙 折紙 リチギ
	色紙 鉛筆 豆 麥ワラ		豆 麥ワラ	色紙 折紙 リチギ 切紙 抜紙
	色紙 尺 豆 麥ワラ		麥ワラ 芋版 ス セン	紙細工 リチギ 組紙 切紙 抜紙
粘土	厚紙 尺 定規 切出し	芋版 色紙 厚紙	芋版 色紙 厚紙	紙細工 厚紙 色紙
粘土	厚紙 尺 定規 切出し	瓦版 色紙 厚紙	瓦版 色紙 厚紙	紙細工 厚紙 建築
粘土	厚紙 尺 定規 切出し	霧吹染 色紙 厚紙	霧吹染 色紙 厚紙	紙細工 厚紙 建築
製圖板	具 影刻用 木金工 用具	木版 浮彫 丸彫	木版 浮彫 丸彫	木、金 細工
	具 影刻用 木金工 用具	木版 浮彫 丸彫	木版 浮彫 丸彫	木、金 細工
	厚紙 色紙 具 染色用	縹染 紋染 ン ク レ ヨ	縹染 紋染 ン ク レ ヨ	工 厚紙細 縫取り 布切刺 繡
	具 染色用 厚紙 色紙	縹染 霧染 紋染 ン ク レ ヨ	縹染 霧染 紋染 ン ク レ ヨ	工 厚紙細 木細工 布切刺 繡

一、唱歌科の目的

唱歌科は藝術の一部門たる音楽を通して美的情操を啓培し實際生活を豊かにすると共に、魂の純化によつて人格を高尚に導かふとする使命を負つて居る。音楽は人間の感情が韻律和聲旋律からなる無内容の音を以て表現されたもので人間の創造になつた文化の中で其の最も高價なるものである。此の高價なる藝術の中から今日主として初等教育に採用されて居るもの即ち唱歌である。唱歌は詩と音楽の結合に成るもので音楽は無内容の音が流れるのみであるが詩と結合するに至つて内容ある感情を起さしめる。内容ある歌曲を眞に謠ひ眞に聴くとき、我々の創造力は最も自由に發展し藝術的趣味が涵養せられるのである。

歌曲を美しく歌はしむることのみが唱歌科教授の究竟の目的でなく高價なる文化の分前に與り得べき其の資格を具へしむることが主眼である。即ち眞に聴くべき耳を培養し音楽を介して自己の最も奥深き内面的生活を生活させることが究境の目的である。さて藝術教育には創造と鑑賞の二方面がある如く其の一部門たる音楽に於いても鑑賞と表現とは盾の表裏で相互に支持し相互に援助して益々深められて行くものである。鑑賞と表現の二方面を深く培ふことによつて唱歌科の目的を達することが出

来る。故に教材、方法等の研究は此の二方面を中心として行ふべきものである。

二、唱歌科の教材に就きて

◆歌曲教材に就きて

(1)、教材選擇に關して

教材選擇をなす場合の根本基礎となるものは教授の目的乃至理想陶冶にあるのであつて、漫然たる氣分本位で教材選擇をなすべきでない。次にかゝぐる様な一般的标准によらなければならぬ。

イ、一般的标准

◇ 兒童心身の發達程度に適するものでなくてはならぬ。これは基本、歌曲、鑑賞教材の何れにも考慮しなくてはならぬ。

◇ 餘りに感傷的なる歌曲、若しくは軟弱、卑俗なる歌曲は選ばぬこと。

◇ 歌詩と歌曲とのよく調和したるもの。

ロ、題目及び歌詞に對する標準

◇ 簡明に歌曲の内容を概括し、しかも兒童生活に親しみを有し彼等が興味を以て迎へられるもの。

◇ 歌詞の程度は大體に於いて國定讀本、若しくは尋常小學唱歌（文部省著）を具體的標準とする。

三、

ハ、曲譜に對する標準

◇ 施法は長施法を最も多くし短施法は稀に用ひる程度としたい。

◇ 曲風は兒童向きに平易快活で卑俗にあらざるもの。

◇ 曲譜は低學年は平易快活なるものから漸次優美なるもの、活潑勇壯なるものへ最後は崇高壯大なるものを採用する様にありたい。

(2)教材の排列につきて

◇ 兒童發達の段階に適應したるもの。

◇ 他教科、季節、又は學校生活の上に連絡して適當に排列すること。

◇ 教材の分量は漫りに多きを望まぬこと、先づ一ヶ月に一つ位を授け寧ろ教材が少なくとも能く練られて血となり肉となり人格の一部になる様にして行くこと。

◇ 教材相互の關係に留意すること。

◆鑑賞教材につきて

(1)、選擇に關して

イ、藝術的にして教育的なるもの。

ロ、既習の實力程度によつて理解され得るもの。
 ハ、各種類に涉り普遍的なること。

◆(2)、排列に關して

イ、兒童發達の段階に適應せしむること。
 ロ、歌曲教材との關係を顧慮すること。

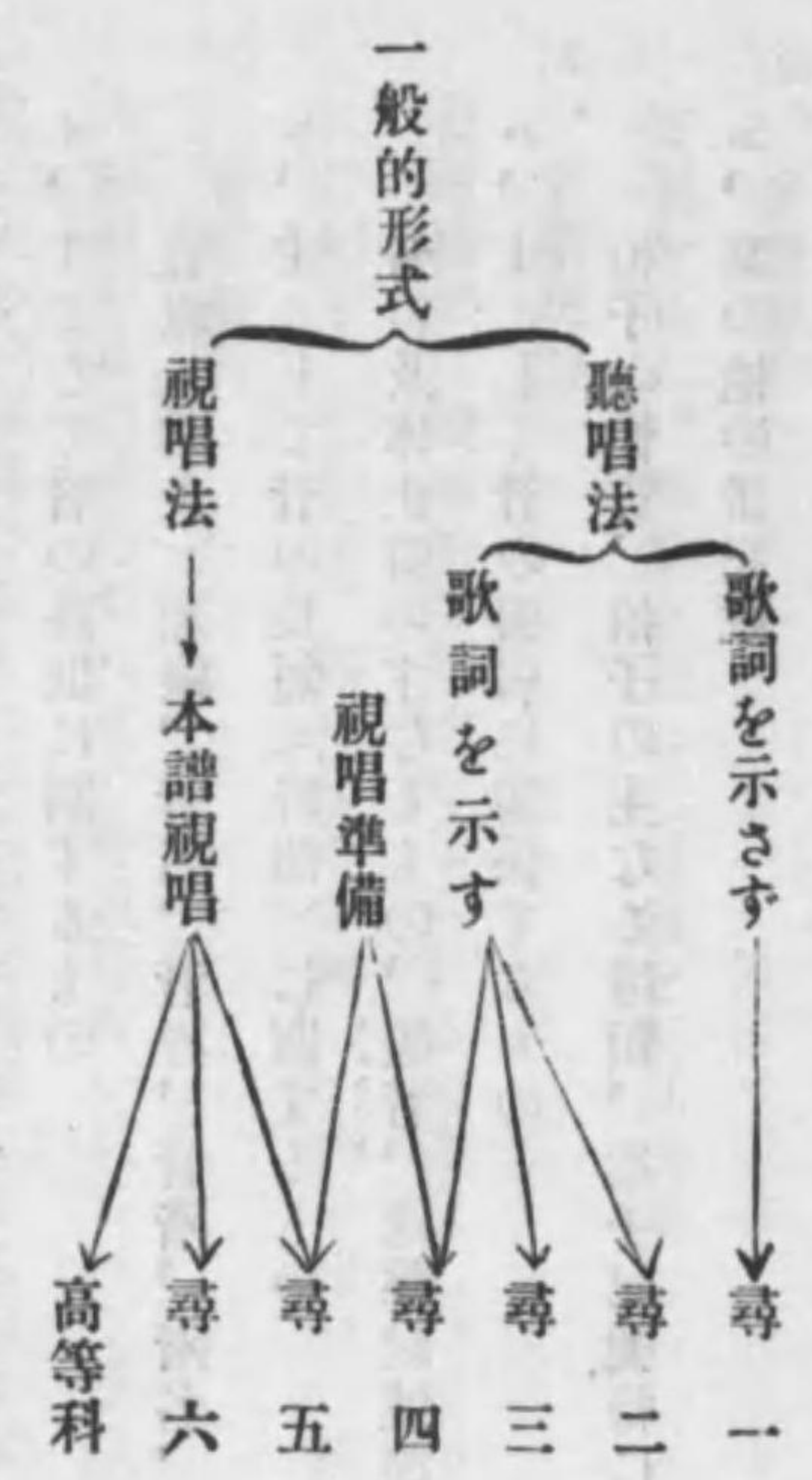
◆基本教材につきて

- 基本練習として行はるゝ内容
- 呼吸練習 ———> 空氣の呼吸方法。
 - 聲音練習 ———> 音聲を美しくする。
 - 音階練習 ———> 高低を正確にする。
 - 音程練習 ———> 高低を正確にする。
 - 拍子練習 ———> リズムを正確にする。
 - 聽音練習 ———> 高低、長短、強弱、美醜等の辨別。
 - 讀譜練習 ———> 曲譜の讀方、理解。

三、方法論

◆歌謡教材

唱歌教材の指導につきては大体左の順序によらうと思ふ。



(1)、尋四の視唱準備期には聽唱法から突然に飛躍的に視唱法に進むことを避けて成可く理解し易く基礎準備となることを授く。其の方法は初めは音階圖のド、レ、ミ、ファを基表として譜表(五線)と對象して其の位置を知らしめ調子とか音符の種類とかは後にする。何れも簡単な説明でござしと澤山に反覆練習をする。初めから樂典書の順序に系統立て、説明するよりも必要に應じて段々と授ける様にする。

(2)、本譜視唱法に入つてからは記譜上複雑なるものは當分聽唱法によつて教授する。又最初ホ調の位

置について十分練習の積んだ後、他の位置から初まる調子を受けて初めて音名、調子、調子記號、ト字記號等の意義を授ける様にすること。

(3)、本譜視唱法なりとて漫りに多くの記號又は樂典事項を知らしめる必要はない、殊に急激に多く授くる如きはつゝしみ豫め是を授ける順序、系統を立て、最も簡易にして基礎的のものから必要に應じ、徐々に授け卒業迄に大凡一通りの樂譜の基礎知識が與へられる様にした。

(4)、本譜視唱法を通じて授く可き樂典事項

イ、主として音の高低に關するもの

五線（譜表）加線、音名、音程、音階、階名、調子（ホハトヘニ等）嬰變、本位記號等。

ロ、主として音の長短（時間）に關するもの

音符及休止符の主なるもの、頓音、延聲記號等。

ハ、主として音の強弱に關係するもの

拍子の性質、拍子の主なる種類、拍子記號特に必要なる強弱記號、縦線、小節等。

ニ、其の他の諸記號

反覆記號。連絡線、特に必要なる發想記號、飯息記號等。

◆基本教材取扱の態度

(1)、呼吸練習は概して時間の初めに課し兒童の注意を集中し姿勢を正し教鞭の合圖によつて之を行はしむ。急吸緩呼の練習を最も多く課すこと。

(2)、發音練習

發音を正し、聲量を豊にし音質を明朗純美ならしめること。

(3)、音階練習

音階練習は機械的暗誦的とならざる様注意し、音律を正しく唱はせること。尋常五、六年以上は特に二拍子、三拍子、四拍子等を與へて拍子練習と結合、連絡させる様にすること。

(4)、音程練習

音程練習は二度乃至八度の普通音程を以て行ひ變態音程には特に歌曲に表はれた場合のみ練習する位に止め、容易なるものから漸次困難なるものに移ることとし十分反覆練習すること。其他拍子練習に結合して練習する。

(5)、拍子練習は音階、音程の練習に結合して行ひ兒童をして有意的に拍數を計算練習せしむること。

體操科

一、体育の基底

實行に依つてその價值を發揮し得る体育に在つては、その理論的方面は等閑に附せらるゝ傾向があるが、現今實際界の混沌さに氣付く時吾等は先づその何故に然るかを顧るの必要を痛感する。混沌は不統一に因由し、不統一の源は實にその基調の不安定に在る。この基調をして安定ならしむる唯一の道は体育の本質的研究を措いては論せられない。然らばその本質的研究は、何處に出發して、又如何なる方向に進むべきか。

体操教師の見る技術上の外面的研究は既に失敗してゐる。生理學者等の見る死屍についての解剖的研究も畢竟人体の機械化以外の何物でもない。結局生ける人生そのもの、その人生を辿る人間生活そのものから出發せねばならぬ。

抑々其の人生の意義は何處にあるか。醉生夢死に甘んじて一生を終へるのが人生の意義ではない。常によりよく生きんとして要求する理念を目指して、その理念實現の無限の課題を一步步果して行くところに人生の高妙深遠さがありそれが使命である。即ち客觀的なる價值を實現して文化を創造發展せしむることである。

かゝる文化活動を充分に爲し得る人間を作ることが教育であるが、今その價值實現は人間の如何なる作用によつて爲されるかを考へて見ると、その價值實現は勿論精神と身体との共働によつて爲され、しかもこの二つの作用は價值實現によつて統整され、密接に關係づけられてゐる。従つて精神を離れ

ての身体はなく身体を離れての精神も存在しないのみか、それ等の作用も亦互ひに相離れて働くものではない。その健全なる状態に於ては心身は正に一体一如として價值實現に働くものにして、かゝる場合最も文化活動は旺盛である。

教育の理想にしてかくの如くであるとするれば教育の一部としての体育も亦この心身の調和的に發達したる心身一如の圓滿な人間を作ることにならねばならぬ。故に体操の爲の体育でもなく、競技そのもの、体育でもない。

生ける人生そのもの、其の人生を辿る生ける人間生活そのものを見つめつゝ、理念實現の爲め、心身一如靈肉一致の旺盛な人間生活を努め得る圓滿にして眞に健全なる人間を作らんとすることに体育の究極目標は在るのである。

二、体操科の目的

以上述ぶる所があらゆる体育の基底となるのであるが、今此の基底の上に成長する小學校体操科の歩みに、その道しるべきもなるべき具体的目的を考察してゆく。この具体的な体操科の目的を適切に示したものは即ち施行規則第十條である。

「体操ハ身体ノ各部ヲ均齊ニ發育セシメ四肢ノ動作ヲ機敏ナラシメ以テ全身ノ健康ヲ保護増進シ精神ヲ快活ニシテ剛毅ナラシメ兼テ規律ヲ守リ協同ヲ尙フノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス」

今これを吟味するに体操科に於ては全身の健康を保護増進して眞に健全なる身体を作らねばならぬ。眞の健全とは部分的局部的發達に非ずして、全一的均齊的發達を意味する。茲に於て先づ均齊なる發育を圖ることが第一の問題となる。

(1)、均齊なる發育を圖らねばならぬ

イ、發育の助長を爲すこと

兒童の發育は極めて迅速であるからその發育材料として、身体各組織内に血液の旺盛なる循環が要求される。而して、其の血行を促進する唯一の方法は運動である。故に學校体育に於ては合理的方法を以て身体各部を平等に運動せしめ兒童身体の圓滿なる發育を助長すべきである。

ロ、不良姿勢を矯正すること

兒童身体の發育は複雑なる環境の影響で常に正しく行はれるものとは限らない。殊に學校生活に入ると學習上の負擔により不正姿勢を誘導し、従つて内臟諸器官に對して不當の壓迫を加へ其の官能を阻礙し遂に不調和なる發達をなすに至る。學校体育の使命の一は此の不正姿勢を矯正するに在る。

發育の助長作用と不良姿勢の矯正とによつて、身体の外部的均齊が保たれる時、この外部的均齊は同時に内臟諸器官神經系統に至るまでの内部的整調を齎すものである。

(2)、四肢の動作を機敏ならしめねばならぬ

四肢活動の如何は直に文化活動の上に大なる影響を與へるものである。故に其の活動を機敏ならしむると同時に必要な場合正常な筋に適當の神經刺激を與へ得る能力、換言すれば身体を意志の忠僕とする調齊力を養はねばならぬ。調齊力の向上は作業に於ける身体活動の精力を經濟的ならしむる一方、日常生活の災害を防ぐ唯一の力である。他の筋運動も或る程度の特種調齊力は修練されるも學校体育に於ては特種調齊力の訓練と共に一般的調齊力の訓練に力を注ぐべきである。

(3)、精神を快活剛毅ならしめねばならぬ

肉体を離れての精神を考へ得ざる如く、精神を離れての肉体も考へられない。されば肉体の健全と精神力の旺盛とも相即不離のものである。これ身体運動に當りて精神を快活剛毅ならしめなくてはならぬ所以である。

(4)、品性を陶冶せねばならぬ

修身科に於て理論的に意識された徳目も實行によつて始めて價值が生ずる。この實踐的能力は体操科の特徴であつて、即ち修身科が實踐道徳の理論的方面を擔當するならば、体操科は實踐道徳の實行の方面を擔當してゐると考へるのは穩當である。殊に体操科の課業に於て規律と服従とに慣らされる。勇氣、誠實を示す機會が與へられる。ボールゲームスや組織的スポーツの間に、犧牲的精

神、正義觀念、迅速なる判斷、フェアプレーの精神等を修得することが出来、かくして品性陶冶の機會は修身教授に生命を與へることが出来るのである。

(5)、体育の趣味を長せしめねばならぬ

健全なる心身の必要は一生に渡つて体育の繼續を要求する、その持續は体育趣味の養成を措いては外に求められない。されば体育を學校のみの事と認想せる日本人に体育を指導する場合特に必要な事である。

三、体操科の教材

上述の目的を体操科に於て達せんには如何なる運動教材を選ぶべきか。其の條件を次の如く規定し度い。

◆、價值多きものたること

体操科の目的を充分達し得るものでなくては價值あるものとは言へない。如何に興味豊富なものと雖この目的に合せざるものを取入るべきではない。

◆、兒童心身の發達に即したるものたること

如何に價值多き運動と雖其の總べてが直に兒童の体育に役立つものとは限らない。兒童を對象とする小學校体育は常に兒童心身の發達に顧みて其の教材を選ばねばならぬ。兒童を離れ其の發達を

無視したる運動は兒童を損ふものである。

◆、土地の状況によること

教育は兒童の環境に制約される。運動教材の選擇も亦環境の制約から離れない、都市に適する運動が農村に必ずしも適當なるものとは限らない、自然環境、人工設備の状況等に依つて運動教材の選擇は行はるべきである。

以上三條件に依つて体操、遊戯、競技、教練、の四教材を選出する。之即ち文部省當局の要目に掲げらるゝ所である。今吾等は此等の教材の特質並びに價值を検討して之に對する態度を決定せねばならぬ。

各教材の有つ特質を研究するには先づ其の發生起源を見るのが捷徑である。何となれば其の濫觴こそ其の運動の有つ目的の出發點であるからである。

(1)、体操

体操の起源は新しく十八世紀末葉である。即ち近代文明の發達が歪曲したる人間身体に對して人工的救助を求むることとなり、其の結果として現はれたものである。而して体操の目的をば「身体の構造に基きて組織せられたる正しき運動により身体を秩序的に發達せしむ」にありとし、身体を正しく調和的に運動せしめ意志に従ひ自由に動作するに至らしめんとした。従つて此の体操なるも

のは、美的治療的教育的にして解剖學生理學等種々の方面より之を組織し、簡單なる運動より漸次複雑ならしめ同一時間に於ける演習の順序を生理學的に決定し教師の號令によりて活潑に運動せしめ音樂等と結合するが如きを絶対に禁止したものである。

イ、身体各部を均齊に發育せしむ。

ロ、各機能の完全なる發達を圖る。

ハ、矯正的價值大なり。

ニ、一般的調齊力を訓練し身体の柔軟性を養ふ。

ホ、輕便に實行し得。

ヘ、進行的なり。

右の如く價值多き教材なるも、運動の根本組織が生理解剖的規律的な結果兒童の自發活動自由選擇に缺けてゐて興味に乏しきこと、或は一般的調齊力は訓練し得るも機敏性を養ひ得ざること等は大きな缺點である。されば吾人はこの科學的體育をより科學的に向上せしむると同時に、之が有つ缺點に留意して之を補ふに足るものを創造し又は取入れ或は体操の遊戯化に依つて体操そのものを改善し、以て體育目的達成の爲めに精進すべきである。

(2)、遊 戲

遊戯に關しては生理、生物學等の立場より勢力過剩、準備、反復、休養等の諸説が唱へられてゐるが、畢竟觀點の相違に歸するを得べく互に相補充すべきものである。結局遊戯は發達的本能にして個體發達の事實より必然的に生じたもので將來の實際的效果如何に關心せず活動そのものを目的とする身体又は精神の自發的活動である。されば人性本能の一發現たる遊戯の兒童に欲求されるも亦當然にして必然と云はねばならぬ。此の遊戯は如何なる教育的價值を有するか。

イ、一般的健康を進め動作の機敏耐久等の諸能力を高む。

ロ、兒童の活動性を満足せしむ。

ハ、興味豊富なり。

ニ、智徳を啓發す。

ホ、社交的國民的なり。

「英國の學校兒童の品性は校庭に於ける遊戯の際に建設せられ、英國的紳士はスポーツの間に養成される」といふ言葉は遊戯の教育的價值を裏付け、特に公民的修養に對する必要性を物語る。

又シユミットの如きも遊戯の教育的價值を力説して「吾人は遊戯によつてくだらぬ教科書や死せる統計表よりもはるかに有効に協同分業、自由活動、名譽、訓練、等の精神を兒童の心中に植付ける

ことが出来る」こと。

併し此の遊戯の指導法を誤まれば次の如き悪結果をきたす。

イ、局部運動に偏して均齊なる發育を妨ぐ。
ロ、危険性を帯ぶ。

ハ、やゝもすれば過度に耽溺して過勞に流る。

ニ、罵詈雑言し不規則に傾き野卑に陥らんとす。

故に、遊戯の指導に當りては自由の中にも細心の注意を怠つてはならぬ。又吾人は競争的好戰的結果主義のものを排し、どこまでも自由、創造の自發活動を重んじ、以上の缺點を考慮し過程の氣分そのものに注意して行ふべきである。遊戯の中、學校ダンス、表情遊戯は藝術的で次の如き特質がある。

イ、細筋を練習し姿勢を優美にす。

ロ、動作を輕快にす。

ハ、感情的生活を向上擴大す。

ニ、自然的調律運動なる故興味多し。

しかしその効果は大であり或る意味に於ては獨特ではあるが、如何なる場合にも各種教材の補足

として用ひらるべく、正規の体育の代用としては不可である。

之を要するに、遊戯の本質は主情的自然主義の點に在る。その効果は兒童にあつては創造であり、而して身体的感情的の收穫は此の本義を失はざる過程の必然的產物に外ならぬ。

(3)、競 技

競技は人類争闘本能の延長として發生し、概ね戰闘的訓練の具に供されて發達し今日に至つたものである。而して競技の中には生理解剖的基礎がないから、全身の圓滿なる發達はこれに依つては望むべくもない。只身体の機敏性、耐久力、統整力を養ふ點に獨特の價値を有つ。この体育法が人間自然本能活動から出發したものであるから、兒童心理に合致し且興味豊富なる爲め活動性に富む少年青年に好まれ、現代体育界に重大視さるゝに至つた。此の現象は慶すべきではあるが、一面、兒童の元氣に任せて種々の弊害が生ずるを考へねばならぬ。諸所の競技會でよく問題の起るのも、要は未だ競技に眞の理解がないからである。

吾々は競技に引つけられる兒童心理を的確に把握しその弊害を積極的手段により未然に防ぐべきである。即ち競技本來の特質を發揮せしむる爲めに、彼等の旺盛なる意氣を善導し、飽くまでも公正の信念を與へ、感興に囚はるゝ傾向を抑制して節制の觀念を培ひ、以てフェアプレー、スポーツマンシップの競技精神を体得させねばならぬ。

(4)、教練

教練は元來國家的の必要より發生しこれが軍隊に於て發達して今日に及んだもので、従つて教練そのもの、中には國家的觀念が豊富に盛られてある。今教練の有つ特質を挙げれば次の三項目である。

イ、秩序を守り協同一致の精神を養ふ。

ロ、勇往邁進攻撃的精神を養成す。

ハ、姿勢を端正ならしむ。

かゝる故に、不規律にして我儘を取へて爲し、柔弱に流れて正義の爲めの奮闘的精神に乏しき今日、此の教練を小學校体育の一部として課することは極めて適切である。

然し体育本來の性質から、又兒童心理から考へて、此の軍隊的教練をそのまま取入れて、命令一點張りの嚴格な行動を兒童に強ふるが如きは小學校体育の本質と合致しないものである。

吾々は教練の形式や過去の取扱法に拘泥することなく、只その精神を深く味ひ、目的の貫徹を圖らねばならぬ。

以上によつて各運動教材は獨特の價値と一面種々の缺點とを有つことを明かにした。されば如何なる場合にも、此等全部の教材が適當に配合されて各の特質を發揮すると同時に各教材が互に缺點を補足

し合つて、此處に始めて体操科の目的は達せられる。

四、体操科指導の方法

(1)、指導の態度

選擇せられたる教材を實施して体育の目的を達せんには如何なる方法上の注意を要するか。吾等は正しき指導方針を有たねばならぬ。何となれば若し指導の方針を誤らんか、教材の價値を失ふのみならず直接兒童の生命に關係するからである。依つて指導の態度を次の如く決定し度い。

イ、創造的ならしむること

過去は勿論現今に於ても体操科が餘りに形式的に流れてゐた。兒童の創造的自己活動等は見ることがもない。自らが自らをよりよくすると言ふ所に小學校体育の生命が溢れてゐなければならぬ。故に体操科指導に於ては兒童の創造的自己活動を眼目とすべく一切の方法はそれの覺醒であり支持であり輔導でなければならぬ。

ロ、自覺を持たすべきこと

兒童が体育の目的を意識して身体的修練を繼續し、よりよき身体的自我を實現することが体育に於ける自覺である。然るに教師は單に號令に依つて兒童を動かし兒童は號令のまゝに盲動するが如きに於ては兒童に何等の興味も努力も起らないのみか危険と嫌惡を伴ふものである。自覺に依つ

て爲される体育は如何なる形式に於ても常に此の自覺心が兒童の心を啓培して眞の体育を行ふことが出来る。是体育に自覺を要する所以である。

ハ、個性に應ずること

新教育思潮による個性研究は實際教育に應用せられて急速の進歩を示した。獨り体育界にのみ此の方面の研究が取殘されてある。此の原因は色々あらうが、餘りに個人の自發的工夫を危険視し又極端な団体主義や体育を二元論的唯物論的立場に於て視たる末梢的態度が斯くあらしめたものである。吾々は此の個性による体育の障礙を除去することに依つて現在の体操科に個性研究の方面を開拓せねばならぬ。

(2)、各學年指導の方針

前に述ぶる所は指導上の一般的態度であるが、實際指導に於ては兒童の發達程度に依つて指導方針を異にする。今兒童の發達段階を左の如く區分し其れ等に對する方針を明かにし度い。

イ、低學年の指導

此の期兒童の身体の發達は極めて幼稚で到底強い負擔に堪えざるのみか、家庭生活から學校生活への變化が心身に及ばず影響は多大である。即ち往々學習が脊柱の彎曲を生じ、繼續的作業が消化器機能に障害を與へ、集團生活が神経を勞し或は脊柱の疲勞と共に呼吸血行を害する等がそれであ

る。又本期兒童の心的活動を見るに衝動乃至感覺活動の部分多く未だ内省自覺の精神活動に乏しい。只遊戯そのもの活動そのものを目的とし衝動、感覺運動に追はれてゐる。

かゝる兒童の体育を指導する場合、嚴正に實行せしめんとすることは不合理であり危険である。低學年の体操科は家庭生活の延長として指導すべく即ち本能衝動を善導して學校生活の喜悅乃至体操科の興味を喚起することを以て第一義とし、此の間に団体的行動に馴れしめる等種々なる体操科の基礎を順次啓培しなくてはならぬ。従つて遊戯を中心として兒童の自由活動を重んずべきは贅言を要しないが、圓滿な身体的効果を收める爲めには各教材を嚴選して適配すべきである。而して組織的の体操をも兒童のものたらしむる道は之を遊戯化するより外にない。運動の構造を遊戯化すると共に其の指導法をも遊戯化して茲にはじめて低學年体操の使命は果され得る。科學的に構成された体操を其の儘兒童に課するは全く兒童に理解を有せざる者である。

ロ、中學年の指導

此の期に至れば身体の發達は著しくなると共に運動遊戯を好み身体活動は極めて旺盛となる。又一方に於て漸次自覺的活動が多くなり記憶力、判斷力、思考力等が發達してくるからやや強度の運動を課する事も出來、或は遊戯等に於てもやや複雑なるものを取り入れてよい。

此の旺盛なる活動を満足せしめ体育的趣味を啓培すると同時に体操科訓練の基礎を固めなければな

らない。又第四學年より適當なる機會に運動生理の概念を與へ漸次自覺的に學習する様指導し度い。

ハ、高學年の指導

此の期に至れば次第に男女の特性が現れ、殊に高等科に至ればいよいよ顯著になつてくるから体操科の實施に於て男女同一に取扱ふは不合理である。依つて高學年に於ては男、女に別ちてその方針を定むべきである。

◆男子の指導

身長、体重、内臟諸器官の發達は尋五頃より顯著となり神經の調節作用も面目を革めてくる。而して高二頃に於ては身長、体重、胸圍の發達が一生に於て最も著しく、男子の發情期が此の頃より始まる。又綜合、判斷、推理の諸能力も大いに進み意志は剛毅果斷となる。体育の好時機は此の時であるから、總ての運動を規則正しく行はしめ機敏、巧緻の動作を練り心身を鍛錬し強壯なる身体を作るべきである。而して器械使用による強度の運動をも課し就中懸垂、跳躍、倒立轉廻に主力を注ぐ。遊戯は複雑なるルールに依る團體遊戯を選び、競技を奨励し、教練は嚴格にしてその精神の達成に努める。

此の期は体操科の充實期ともいふべき重要な位置を占むるものであるからやや高尚なる程度に運

動生理を會得せしめ体育に關する自覺を鞏固にすると同時に運動を愛好し自發的有意的ならしめ体育精神の徹底を圖り度い。

◆女子の指導

尋四の終り頃より次第に女子の特性が現はれて高等科に至つては最も甚だしくなる。即ち筋肉の發育弱く皮下脂肪に富み、肺活量も著しく劣り骨盤、循環機能等に變化を生じ、精神は感動し易くなる。茲に於て男子と同様の取扱ひが不可能となり特別の注意を以て指導せねばならぬ。

此の時代の体操科の指導に於ては勿論強健な身体を作ることには大切であるが、態度姿勢を優美に動作を輕快にし感情生活を向上せしめ、女らしき女を作らるべく努めねばならぬ。

此の期は女子にとつて重要な位置を占むるものであるからやや高尚なる運動生理の概念を授け、自覺的に運動を愛好して体育精神の完徹に至る様指導すべきである。

以上述べ來りし所を以て体操科指導の態度方針を明かにしたが、更に各學年教材の配合とそれら教材に對する注意とを簡單に表示しよう。

	教材	配合	注
低	体操	二	運動構造及び指導法ノ遊戯化
			意

高 學 年				中 學 年			學 年		
子		男		教 練	遊 戲	體 操	教 練	遊 戲	遊 戲
教 練	遊 戲	體 操	競 技						
一	三	四	一	四	三	一	五		
稍完全ナル形ニ於テ、ソノ精神ヲ体得セシム	研究的態度ヲ以テ行ハシム	複雑團體的ノモノヲ選ブ、競技ニ力ヲ注グ	懸垂、跳躍、倒立轉廻ニ主力ヲ注グ	秩序運動トシテ容易ナルモノヲ選ブ	機械器具使用ノ加味	個人的遊戯ヨリ團體的ノモノニ入ル 安全ナル容易ナ競技ノ加味。性的考慮ヲ加フ	簡易ナルモノニヨツテ秩序ニ馴レシム	團體的ノモノデモ個人的ノモノヲ主トスル 唱歌表情遊戯ヲ多クスル	

年 子 女			
教 練	遊 戲	體 操	競 技
秩序運動トシテ容易ナモノヲ選ブ	行進遊戯、ダンス等ヲ重視ス	優美ナル團體的ノモノヲ選ブ	強キ跳躍懸垂、倒立轉廻ヲ省キ平均運動ヲ重視ス

(3)、實際指導上に就いて
 体操科の實際指導に就いての注意點は以上の各論に於いて述べたが、實際指導の如何が体育の効果を左右する故に特に重ねて詳論し併せて其の他の体育的諸問題をも断片的に考察する。

イ、指導の形式

實際指導は各兒童の發育、体力を考慮する個別的取扱が最も適當であるが之は理想で一人の教師が短時間内に多數兒童を指導するに之を完全に望むことは不可能であり又精神的練磨の如きは一齊的取扱でなくては到底達せられない場合も少くない。
 斯る意味から正課時の取扱は一齊的取扱がよい。然し終始一齊的指導萬能を意味するのではなく一齊的の中に各自が自己體質に應じて自ら運動量を加減し、教師も亦常に兒童各の發育に留意して或

は分團的或は個別的取扱を加味して強者を伸ばし弱者を顧るやう指導し度い。

ロ、運動教材

前述運動教材の所に於いて体操、教練、遊戯、競技の四教材が選ばれた。而して之れ等の各個が獨立して同時に同効果を收め得ないことも述べた。されば各教材をして唇齒輔車の關係より身体及び精神を陶冶するに其の一部に偏せず而かもひとへに其の特色を發揚せしむべきである。

ハ、教材の配合

實際指導に於ける各教材の各時間配合は必ずしも一定してゐない。それは季節、天候、前後の状態等に依つて、或は体操が主となり或は競技が主とならうが極端に偏しない爲めに一標準に準據することが必要である。

此の場合各學年兒童の發達程度は異なるから標準も變つて來る筈で今、便宜上四十五分間の教授に於て次表の如く之を定めてみる。

	低學年	中學年
体操	一〇分	一五分
教練	五分	五分
遊戯競技	三〇分	二五分

高學年男子	高學年女子
二〇分	一五分
五分	五分
二〇分	二五分

ニ、運動の順序

運動排列の順序は身心兩方面よりみて合理的なるべく、又生理的にも心理的にもその時間の主眼點があつて、それを達する爲めの準備運動より始め主運動に入り更に整理運動によつて平靜に歸らねばならぬ。今三等三運動に關する注意點について述べる。

◆誘導運動

誘導運動は主運動への準備となるもので、血液循環を促進し運動氣分を作り又筋肉の收縮性を増し反應を機敏ならしむるものでなくてはならぬ。従つて之が教材選擇實際上の注意を列舉せば、(一)動作系統に屬するものたること。(二)運動量大なる割合に疲勞小なるものたること。(三)既習教材中より容易なものを選び出すこと。(四)主運動或は前時間の模様季節等によつて量及び種目を適當に加減すること。されば本運動に適切なるものは、秩序、下肢、頸、上肢、一二の容易なる体の運動、強き下肢運動等である。

◆主運動

運動目的を貫徹するため最も力を注ぐべき所で、身体各部精神の鍛練上より効果の多きものを含んで居らねばならぬ。本運動に適切なる種目及び排列を示せば――

胸の運動。第一懸垂。平均運動。体側運動。腹の運動。脊の運動。行進。第二懸垂（女子ニハ不適）跳躍。倒立及轉廻（女子ニハ不適）遊戯及競技。

右教材進行中も、疲労少き下肢、呼吸等の運動を疲労恢復心機轉換の資として隨時行ひ、累進的向上と緩和調節とに留意して運動量を可及的大ならしめねばならぬ。

◆整理運動

主運動にて促進せられたる呼吸、循環作用及び精神の作用を沈靜に復歸せしむるもので、従つて姿勢を正しく精神を鎮めて血液の循環と分布とを適當ならしめるものがよい。故に敏捷なるものの如きは不適當で、容易な下肢、行進、平均、呼吸等の諸運動が適する。

ホ、各教材の指導

次に各種運動教材取扱上の注意をのべる。之は各教材論にて態度として既に述べたのであるが更に詳論する。

◆教練

規律を守り協同一致の精神を養ふはよいが、之を軍隊式そのまま児童に強ふるは無理で、教

練はその精神をつかますことに努める。依て各學年に要求する所は次の如くに止める。

低學年――姿勢を正し足を揃へて元氣よく歩く。

中學年――姿勢足並の外、手の振り方着眼點に注意。

高學年――足のあげ方、踏みつけ方、步調歩幅の調整。

高等科に至れば、軍隊そのままではなきも、ややそれに近きものにする。

◆体操

1、排列法 体操を行ふ排列法は時間經濟のため自由排列を主とし、時には訓練上正しき排列法をこる。特に夏季には木影を利用し最も自由なる排列のもとに行はしめる。

2、新教材の取扱 新教材に遭遇した場合には既習教材を基礎として示範、説明、自由練習、批正、注意、一齊的練習と次第に進めて行くがよい。児童の練習中には相談的研究的態度で児童に色々工夫させ又適當なる機を見て簡単な生理解剖の知識を授くるがよい。

3、児童への要求は決して形式の爲めの形式に流れず各児童の能力に應じた適量の運動をこらせる。従つて嚴格の中にも自由あり形式の中にも興味を發見さすことに努力し度い。

◆遊戯及び競技

遊戯競技中には児童の自發活動、研究的創造的活動を重んじ可及的干渉を避けるが、ともすれ

は勝利の爲めに野卑陋劣なる言行をなすを以て、特に紳士的態度を養ふべく注意する。

唱歌行進遊戯等は幼學年及び女子にとつては重要視さるべく特に女らしき女子を作ることには主として之による。これが指導上美の觀念は忘るべからざるも技巧の末に趨り自然性を損ひ活動を制限することがあつてはならぬ。

へ、体育の自覺と体育的知識の養成

兒童に体育の趣味を養成して体育を生涯のものとするには之を自覺せしむるを第一とする。此の爲めには簡單なる生理解剖等の知識、或は体育界の實況等を知らしめるがよい。これには新教材取扱の際或は日常遭遇する機會等を利用し又理科教授とも連絡せしめる。

ト、服 裝

体操を行ふ時の服裝は輕快にして自由なる活動を爲し得るもので且つ質素なものが適する。特に女子の体操服は女子としての容儀を保つに足る優美なものたる必要である。

チ、課外体育

体操科指導の時間數は極めて僅少で体育の目的を完全に達することは出来ない。茲に課外運動が要求される。即ち之に依れば兒童の活動性の満足、個別的指導等もよく行はれ以て正課時間の不足を補ひ体育目的の達成を圖ることが出来る。

リ、環境整理

兒童の教育には環境の制約を受けることが大である。体操科教育のより大なる効果を收めんには完成せる環境として充分な場所と之に對する設備とを要する。運動場は兒童の活動性を満足せしむるものたるべく、設備は諸種の運動に適するものを具備して、常にこれが清潔整頓を保ち危険を豫防するのみならず運動効果の万全を圖るべきである。

裁 縫 科

一、裁縫の意義

裁縫とは字義の如く、衣類について、積り裁ち縫ひ繕ふことの意味である、衣類は先づ身体的要求より生れ、漸次道德的意義並びに美的裝飾を加味して、優美高尚なるものとなり。一面經濟的制約を受けて今日に及べるものである。故に此の四要求、即ち身体的、道德的、美的、經濟的要求は當然衣類製作上の要件となり、此の要求に合すべく製作することが裁縫の眞義である。而して斯く製作するためにはその目的に應ずべき知能の習練を要する。

二、裁縫科の目的

裁縫科の目的を達するためには、裁縫の眞義並びに小學校教育の使命と其の對象たる兒童とにつき

て考慮しなければならぬ。而して本校に於ける裁縫教授の目的は之を

「衣類製作の基礎能力の養成にあり」

と考へるのである。謂ふ所の基礎能力とは他日社會人となつた場合、常に發動的態度を以て周圍の環境に適應する様、衣類の製作を科學的、衛生的に工夫し、然も精巧迅速に處理し、更に其の改善にまで至るべき基礎としての知識技能である。而してこゝに基礎能力とする所以は

(1)、裁縫の内容が極めて廣汎で、衣類一切の積り方、裁ち方、縫ひ方、補綴、整理、保存に至るまでの總てを含み居り、到底全般に亘つてその練習不可能なること。

(2)、對象が兒童なること。

(3)、學習時間に制限あること。

(4)、小學校教育は一般的陶冶を目標とせるものなること。
等の制約を認めるからである。

而して此の目的を達することは兒童現存の生活を意義あらしめ、是を指導してその生活を連續的に發展せしめ、以て衣類製作の能に練達せしむることである。更にかく指導することによつては後述の種々なる副次的の陶冶をもなし得るものと信ずるものである。

(1)、觀察眼の養成、正確緻密なる工夫力の修練、記憶、推理、思考、判断、想像等の知的作用の陶

冶。

(2)、裁縫が地味な仕事で裏からの仕事が大部分を占めて居り、然かも裏からの仕事が正直にそのまゝ、表に現れるが故に實着なる思想の養成、眞面目、正直、謙讓等の諸徳を養成する。

(3)、清潔整頓、秩序、勤勉、努力、忍耐、勇氣、物質及時間、勞力等の節約利用等、種々なる良習慣を養成す。

(4)、技術の實習から眼、手等の身体的活動を習練す。

(5)、衣服の目的は單に衛生、作法のみでなく裝飾の意もあるが故に、其の形狀色彩等常に美しいと云ふことを頭に置かねばならぬ。従つて裁縫によつて美的情操を養ひ衣服に對する高尚優美なる趣味をも向上す。

更に本科教授に於いては衣類に關する保健、衛生並びに禮儀作法上の知識を與へ經濟思想の養成を期する事も忘るべからざる緊要事である。

三、裁縫教材選擇の要件

(1)、兒童心身の狀態に鑑みること。

(2)、兒童の生活に密接なるものを選び、土地の事情風俗に適するものを探ること。

(3)、實物主義なること。